

喫茶—mid night—

江月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

至高の一皿。それは料理人ならば誰しもが追い求める夢である。遠月学園では弱肉強食の生徒達の蹴落とし合いが後をたたない。

そんな世紀末もかくやと言わんばかりの学園に一人の男が編入してくる。

彼が求めるのは至高の一皿、ではなく至高の一杯。

たった一杯のコーヒーに持てる技術を全て注ぎ込む自称バリスタの明日はどちらだ
!

不定期更新

書きたいことを好きなように書いているのでその点、ご注意くださいまし

目次

十二杯目	十一杯目	十杯目	九杯目	八杯目	七杯目	六杯目	五杯目	四杯目	三杯目	二杯目	一杯目
99	89	77	67	59	50	42	34	26	18	9	1

二十五杯目	二十四杯目	二十三杯目	二十二杯目	二十一杯目	二十杯目	十九杯目	十八杯目	十七杯目	十六杯目	十五杯目	十四杯目	十三杯目
234	230	218	209	200	192	184	173	163	150	138	123	114

二十六杯目

二十七杯目

242 250

一杯目

—喫茶 Midnight—

少し奥まった通りにひっそりと店を構えるここは知る人ぞ知る名店として様々な人々に親しまれている。

名物はこの主人が気紛れにブレンドするコーヒーとこれまた気紛れに作る軽食の数々だ。特にアップルパイの日に当たった者達は皆ガッツポーズをするほどの人気を誇る。



「鬱だ……………死のう……………」

「じゃあ、さっさと死んでこいよ」

スーツとコート果ては手袋まで全身黒でキツチリと決め、髪もしつかりと整えた男性が味を感じさせるカウンターテーブルに突っ伏してぼやいていた。

それに対してカウンター内の少年は目線を彼に寄越すこと無く揺り椅子に腰掛け、

カップのコーヒーを啜る。そして若干眉根を寄せるとソーサーへとカップを戻し膝掛けの上に置いていたハードカバーの本を持ち上げ読み始めた。

「少しはお客の悩みを聞いてくれないかな?」

「……………じゃあ、客らしくしてろよ」

「ちゃんと君のコーヒーを飲んでやっているだろう?」

「苦い汁が啜りたけりや表行つて泥水でも啜つてやがれ」

男の言葉をバツサリと切り捨てた少年は本からピクリとも視線を動かさずとしない。それほどまでに面白いのか、ただ単に男に興味がないのか。

先程までの反応を省みると明らかに後者だろう。

「無視しないでくれたまえよ、昼也くん!僕は客だよ!」

「キャラぶれてるぞ、薊のおっさん。いつもの余裕を見せろよ」

昼也と呼ばれた少年は初めて顔を動かし薊へと目を向けた。その目は冷ややかであり、まるで養豚場の豚を見る目だ。

「だいたい、あんたが敵を作りすぎてるんだろ?」

「ぐっ……………しかし、だね…………」

「そんなんだからマトモな友達居ねえんだよ」

「グフツ!」

「どうせ、堂島さんぐらいでしょ？おっさんにマトモに話しかけてくれるの」

「ゴフツ……………」

「だから、娘にも嫌われるんだよ」

「カツハア……………」

昼也の容赦ない口撃によりライフを削られオーバーキルを食らった薊はキャラもかなぐり捨ててテーブルへと突っ伏してしまった。心なしか口の回りに接するテーブルに赤いシミが見える気がする。

一通り言い切って満足したのか昼也は再び本へと視線を落とす。

微妙に薄暗い店内にはこの二人以外の客は居ない。故のやり取りなのだが流石に酷いものだった。

およそ十分が経過した頃、漸く薊は顔をあげた。その顔色は悪く、しかしながらイイ笑顔だ。口の端から血が流れていなければそれはもういい笑顔だったのだが。

「話しは変わるが昼也くん」

「……………」

「ちゅ、昼也くん？」

「……………」

「無視しないでくれないか？」

「……………ん？何だまだ居たのか？」

「さつきからずつと居るよ!?君の口撃で死にかけたけど何とか生き残ったからね!」

「だから、キャラ崩れてるって」

「僕のキャラ何てどうでも良いんだ!問題は僕の愛しい娘の事さ!」

「嫌われてんだろ?」

「カハツ!?……………そんなダイレクトに言わなくても……………」

「『もう!お父様!一緒に洗濯物で出さないでください!臭い移ります!』」

「ゲフオ!?こゝ、声真似でもその台詞は僕には効く……………ぐふ……………」

再び突っ伏する薊。その姿に興味が失せたように昼也は本へと戻っていった。

この喫茶店ではよく見られる光景だ。見ている側からすればコントにしが見えない

そんなやり取り。

美食の権化、薙切薊と中学生兼喫茶店マスター、夜帳昼也（やとばり ちゅうや）の

いつもの光景だ。



喫茶 M i d N i g h t。美食の一族を筆頭に各界の著名人や政治家、筋者等、

様々な人々がお忍びで訪れるそんな場所。

店内は照明が少し暗めでつけられておりクラシック音楽が蓄音器から流れ、コーヒーの臭いが店内に染み付いている。

そんな店のカウンターに今日もマスターとの会話を求めて一人の客が席についていた。

「ねえ、昼也くん」

「……………」

「そろそろ無視は止めてくれないかしら？」

「……………」

「あの……………」

金髪の美少女は昼也に何度か声をかけていた。その全てを無視され瞳には薄くだが涙の膜が張られている。

と言うのも少女がこの店を訪れ既に15分が経過していたのだ。その間何度も昼也へと話しかけていた。そして、彼はその全てを無視していたのだ。心も折れかけるといふもの。

補足を見ると昼也自身は少女を嫌っているわけでも況してや苛めているつまりもない。ただ単にめんどくさいと考えさっさと帰るように仕向けているだけなのだ。

彼は喫茶店に居座るのが好きなのであって、客と会話をするのが好きな訳ではない。そもそも、この店を経営するのも単に自分の好きな雰囲気に入れられ、好きなときにコーヒーを飲みたいが為についてにやっていることだった。

「ちゅ、昼也くん……………」

「……………」

「少しぐらいこつち見なさいよ！」

「……………はあ……………何だよえりな。俺は忙しいんだ、後にしてくれ」

そう言うとき、昼也は再び本へと目を落とした。どこが忙しいのか、傍目には分からない。

それは少女、えりなも分かかっておりその表情は一気に不機嫌なものへと変わっていった。

プツクリと頬を膨らませ、頼んだコーヒーに口をつける。

彼女は美食の一族に名を連ねる一人であり、そして料理界で知らぬものは居ない神の舌を持つ少女だ。過去の教育によりそれは徹底的に磨き抜かれ、不味いと評価されれば誰が作った料理であつてもごみ箱行きとなる。

そんな彼女が嫌な顔一つせず、むしろ先程までの不機嫌な表情を霧散させ美味しそうにコーヒーを飲む姿は珍しいと言えるだろう。

この店とえりなの付き合いは、それこそ幼少の頃まで遡る。

美食に染まり豹変した父。そしてその父が珍しく連れてきたのがこの店だった。

他人と和やかに話す父、そしてその話し相手である壮年の男と体格にあつていない揺り椅子に腰掛けてユラユラと揺れながら本を読み時偶コーヒーカップへと口をつける少年。

『……………なに?』

見られていることに気付いたのか少年が本から顔をあげること無くえりなへと声をかけた。それが始まり。

厳格な、そして冬空のような父もこの店に来ることだけは何故か許可してくれたのだ。

そしてその日からほぼ毎日この場所を訪れた。

壮年の男は毎回暖かく迎えてくれた。少年はぶつきらぼうだが話を聞き続けてくれた。

幼心のそれは一種の依存だったのかもしれない。

それでも難切りなは救われたのだ。

さて、そんな彼女もいまや中学三年生。彼女の通う学校は中学から高校へのエスカレーター形式を導入している、が途中編入が可能なのだ。

先程から昼也に無視されていたのもこれが原因である。

つまりはえりなは彼に同じ学校へ来てほしいと思っていたのだ。

だが、昼也からすれば迷惑千万。中学すらも適当に行っている男が高校等に進学する気がある筈もない。このまま喫茶店のマスターに収まることを望んでいた。

「私と一緒に遠月に……………」

「断る。爺さんにもおっさんにも言ったがあんな殺伐とした所に誰が行くかよ。俺は静かに旨いコーヒーが飲めりゃ良いんだ」

「っ、遠月に来れば高級な豆や専用機器も優遇しますっ！」

「だから、興味ねえって。確かに高い豆も良いがな。自分でブレンドした旨いやつを飲むのが良いのさ。せっかくなかたっ苦しい中学が終わるつてのにまた、学校なんぞに行くもんかよ」

「どうしてもっ！」

「どうしても。ほれ、さっさとコーヒー飲んで帰れ」

「……………」

捨てられた子犬のように見てくるえりなを黙殺し昼也は再び本へと目を落としてしまった。

暫く粘っていたが聴てたためいきをつき、えりなは一通の封筒を取り出すとカウンターにお代と共に置いて店を出ていってしまった。

二杯目

—喫茶 mid night—

奥まった通りにある知る人ぞ知る名店。美食の一族すらも魅了する一杯のコーヒ—と軽食が売り、というか客の目当てだ。

何故かというと、当の店主が仕事に関して無気力だから。具体的には客が居ても安楽椅子に腰掛け本を片手にコーヒ—に舌鼓を打つほどにやる気がない。

それでも一日のんびりしていられる程に儲けているのだから、才に溢れるというか、不条理というか。世の料理人に喧嘩吹っ掛ける程度にはなめ腐った根性をしている。

「来たわよ！昼也君！」

「…………どうも」

「……………」

静謐だった店内の空気にそぐわないけたたましい声。しかし店主たる昼也は一瞥すること無くいつも通り、ハードカバーの本に目を落としたままだ。

今回の来店は少女と少年の二人組。活発な少女と眠たげで気だるげな少年と対照的な印象を受ける。

雍切アリスとその付き人黒木場リヨウである。

二人も、というかアリスはその名字が示す通り美食の一族に名を連ねる、“努力”の人だ。その料理の腕は相当であり、その調理風景は一種の科学実験に見えるともつばらの噂。

さて、二人がこの店にやって来たのは単に茶をしばくためではない。いや、喫茶店で何するんだと問われれば茶をしばく、というのが正解なのだろうが、とにかく二人は、特にアリスは別の目的でやって来た。黒木場はその付き添いだ。

「昼也君、貴方、えりなの誘いを断ったのよね？」

「……………」

「どうかしら？ 私の元に就かない？ 最新の機器が使い放題よ？」

「……………昼也、お代り」

「そのポットに入ってる」

「聞きなさいよ！」

プリプリと怒るアリスを尻目に黒木場と昼也の二人はコーヒーを啜る。

今日の一杯は気に入っているらしく、昼也は眉を潜めること無くいつもより若干機嫌良くコーヒーを嗜んでいた。

その様子に更にアリスの機嫌が悪くなる。元来雍切の家の人間は少なからず気位が

高いというか、プライドが高いというか、とにかく傲慢な面が多分にある。

とはいえ、昼也はそれを知った上で無視しているのだが。興味があるのは旨いコーヒーを淹れて静かに過ごすことのみなのだ。地位、名声、大金、どれも興味がない。

だからこそ誰もが媚び諂う雑切の者たちにもいつもの態度をとり、その態度が彼らにとって新鮮であり、受け入れられる理由なのだろう。

「もう！何で私は無視するのにリヨウ君の言葉は聞くのよ！」

「……………はあ……………何だよ」

「貴方が！私の元に！就かないかって……………」

「お断りだ。そのコーヒー飲んでとつとと帰れ」

「酷い!?うわーん!!リヨウくーん!!」

「……………元氣だしてください、お嬢」

「だいたい、何なんだよお前ら。学校に來いだの、下に就けだの。そういう厄介事をここに持ち込むんじゃないよ。一族郎党出禁にするぞ」

ジト目と言いたいことを散々にぶつけた昼也はコーヒーで喉を潤し再び本へと目を落としてしまう。

これだけで普通ならば憤慨しそうなものだが、アリスは頬を膨らませるに留まった。そもそも、嘘泣きなのだから特に咎めることでもない。

第一、昼也の口が悪く素っ気ない事など常連は皆周知の事実なのだ。毒舌の一つや二つでキレていては至高の一杯にはありつけない。

アリスは黙ると両手でカップを持ち上げチビチビと飲んでいく。その視線はユラユラと安楽椅子で揺れる昼也へと向けられたままだ。

暫く見つめていれば、店内に何やら良い匂いが漂ってくる。

料理人として嗅覚に優れた二人は直ぐ様どこから香っているのかを探しだしていた。

それは店の少し奥に設置され、中は見えないキッチンから。程なくして、タイマーの音が聞こえてくる。

その音を確認したのか昼也は一つため息をつくとチラリカウンター席の二人へと目をやり、やがて立ち上がった。

膝掛けを安楽椅子へと被せ、その上に本を置きキッチンへと向かう。

暫くゴソゴソと何か準備を行い、やがてその手に二枚の皿を持って戻ってきた。

「……………いつは……………」

「た、食べて良いの?」

眠たげな目を見開いた黒木場と常には見られない緊張をはらんだアリスの二人は件のマスターへと問う。その目はどちらも期待の色が見てとれた。

見られた昼也はやはり一瞥すること無く安楽椅子へと座り直し、膝掛けを乗せ本を開

く。言外に出したんだから食べ、と言われてるような気がする、そんな反応だ。

二人は一度唾を飲み込み、傍らにいつの間にか添えられていたフォークを手に取った。

そして皿の一品へとユツクリ、それを差し向ける。

サクリ、と生地が鳴り、中には絶妙に火の通ったリンゴがこれでもかと内包されている。

そう、これはアップルパイ。それもこの店で伝説とも言われる代物だ。噂ではこの一切れで美食の一族がすべからく骨抜きにされたとも言われている。

アリスも黒木場も一度だけ、このアップルパイを味わったことがあった。

その時の衝撃と感動は夢にまで出てくる程であり、何度も再現しようと試行錯誤を繰り返したが結局完成には至らなかつたという過去を持つ。

出されたのはそんな一切れ。三角の頂点をフォークの横で切り離し、口に運ぶ。

瞬間駆け抜ける、リンゴの豊潤な香りと甘さ。一口噛めばその都度果汁が溢れ、それでありながらその甘さは全くしつこくない。生地も薄いながら、その存在感を發揮しており正に完成されたアップルパイ。

だが、二人の衝撃の大元はそれだけではない。

(これは……………)

(ま、まさか……そんな……)

(上達している!?)

過去に一度食べたアップルパイを越える旨味を味わったことによる感動は容易に二人の思考を浚つていった。

無心にして無言、しかしその表情は幸せ其の物。ものの2分とかからずに二人の前に出された一切れは無くなってしまったのだ。その事に気づいたのはフォークと皿が空しくぶつかり合い軽い音をたててからだ。それほどまでに集中して二人はアップルパイへと向かつていた。

“必殺料理”というものがある。料理人がその一皿にすべてを乗せ、食べた客は作った料理人の顔が見え、老若男女問わず旨いという一皿のことだ。

昼也のアップルパイはそれに近い。違う点は、一口食べると有無を言わずにその味へと浸らせてしまうことだろう。それも食べ終わるまで食べている本人も気づかぬ程にその手が止まらなくなってしまう。

何も浮かばない。ただひたすらにその一皿へと向かわせる、そんな料理なのだ。

アリスは無言でその空になった皿を見つめ、次にコーヒーを啜ること口の中の幸せの余韻を押し流す。出来ることならばもう少し味わっていたのだが現物が味わえないならば幸せは毒と代わりない。

鬱屈なため息をついたアリスの隣では黒木場がフォークをくわえたまま腕を組み、肩間にシワを寄せて瞑目していた。

旨い。それがアツプルパイへの感想だった。食べ終わるまで箸を、今回はフォークだが、とにかく食べ終わるまで食べる手段を止めさせない旨味。

この一品に関しては遠月においても上位。いや、もしかしたら敵うものは居ないかもしれない。それが「十傑」最上位に位置する一席であつてもだ。

そも、再三言っているがこの店の店主がやる気がないのは周知の事実なのだ。しかし、極稀に彼は厨房に立つことがある。

それは今回のようにアツプルパイを焼くためであつたり、客の要望に珍しく答えるときであつたり、と理由は様々だがその際の腕は群を抜いている。

喫茶—mid night—にはメニューは本来一つしかない。
『本日の一杯』それだけ。

軽食のメニューに関しては客が頼み、尚且つ店主がやる気になれば出てくるというスタイルなのだ。

店として破綻しているようなものだが採算がとれているため当の店主がこの業務形態を変えることはない。

そうこうしている内に、店内の端に置かれた柱時計が時報を鳴らす。アリスが文字盤

を見ればかれこれ一時間程店にいたことが確認できた。

チラリと昼也へと視線を送り、やがてため息をついて鞆からお代とそして一通の封筒を取り出し、置いて黒木場を伴い店を出ていってしまうのだった。

挨拶もすること無く、ペラリペラリと一定の間隔でページを捲る音が店内に響いていたが、やがてため息をつくると昼也は代金を近くの引き出しへ、そして封筒を手に取ると、開けて中身へと目を通し、再び大きいため息をついた。

いつぞや、えりなが置いていったものと同じ内容の紙切れ。所謂、編入届け、といったものがそこにはあった。

既に学園長の判が圧してあり、入学許可の連名として確切の二人の名が書かれている。どうやら美食の一族は意地でも昼也を遠月学園へと引き込みたいことが第三者からも分かってしまう。

そんな誘いを受けている当の本人は体の奥底より止めどなく溢れてくる、鬱屈なため息を止めること無く、吐き尽くすしかなかった。

そして編入届けを前回のものと同じ場所へと放り込み、安楽椅子から立ち上がると厨房へと向かい、アップルパイが乗った大皿を持って戻ってきた。

カウンターに皿を乗せ、ついでに持ってきたフォークを切り分けてすらいないアップ

ルパイへと突き刺し、千切り、頬張る。

現実逃避に、彼は暫くの間、やけ食いに勤しむのだった。

三杯目

—喫茶 mid night—

美食の一族のみならず多数の著名人がお忍びで訪れる隠れた名店である。一説ではその味を盗むためだけに出入りした者も居たとか。そしてその悉くが圧倒的な技量の差の前で挫折を味わい店を閉めるものも多数出たとはもつぱらの噂だ。

今日も今日とて閑古鳥がシャウトしている店内ではカウンターの内で安楽椅子に揺られながらコーヒーを楽しむつつ本を読み進める昼也の姿があった。

そして、カウンター席、昼也の正面よりやや右斜めの位置に一人の男性が座っている。坊主頭にスーツ姿の大柄な男性、堂島銀。遠月リゾートの総料理長を務める男だ。

彼は出されていたカップをとり、薫りを一頻り楽しむと、口をつけて静かに傾ける。口を含むのは本の少し。ワインのテイステイングのように暫く口内で遊ばせて、やがて、飲み込む。

「やはり、良い香りだ。それに味わい深く、後を引かない」
「……………どうも」

堂島の賛辞に、しかし昼也はいつもの様子。見た目筋肉オバケの強面が相手でもその

スタンスは崩れないのだ。

堂島としてもそれは予想しており、既に何度と無く来店しているのだから慣れたもの。この物臭店主が相手では話も弾むことが殆ど無いことを知っているからかいつものように店内の観察を行う。

喫茶—mid night—は基本的に照明を少し暗めに設定してある。夏場に店内に入れば目が眩む程度には暗いのだ。

店内は東から西へと伸びる長方形。出入り口が南西の方角に在り、その正面にはトイレ、左側には目隠し用の生け垣。

数歩進めば直ぐに生け垣の端へと達し、そこから左へと曲がると直ぐにカウンター席と二人掛けの席がカウンターから離して二つ設置され、更に奥に進むと一段上がって、四人掛けの席が二つ並んで設置されている。

カウンター内には入り口に近い方に安楽椅子が設置され、その背後には壁一面の大きな棚。そこにはコーヒーを淹れる際に用いる、ハンドミル等の道具の他にハードカバーの本が大量に置かれていた。

安楽椅子の反対側には小さいながらも設備の整ったキッチンが設置され、その手前には扉が一つ。扉の奥はこの店の主の居住スペースへと続いている。

一人で営業するならば十分だろう。元より客数が少なく、当人も金儲けに興味のない

物臭ならばこれ以上は持ち腐れとなってしまう。

そしてこの店には古いレコードプリーヤーが設置されていた。時折音が飛んでしまふがそれもまた味を出しており、店内には耳を澄ませば微かに聞こえる名曲の数々が流れている。

「昼也君、君は遠月には行かないのか？」

「……………堂島さん。あんたも俺に面倒事を投げつけるのかよ」

「辟易していることは知っているさ。中村も君が色好い返事をしてくれないと、愚痴つていたぞ」

「……………チツ、あのオツサンめ。今度来たら顔面に塩ぶつけてやる」

「やはりアイツは此処には来るのか。美食の亡者もこの一杯には敵わないらしいな」

呵々大笑。機嫌良く笑う堂島に昼也は苦虫を五、六匹一気に嚙んだような苦々しい顔をしていた。

誰しも得手、不得手があるようにこの誰に対しても態度を変えないこの男にも苦手な相手は存在している。

堂島銀というこの筋肉オバケもその一人だ。

というのも幼い頃から、それこそえりなよりも更に昔から知っている相手であり、どうにもこの人柄を前にすると普段の毒舌が若干、それも誤差の範囲だが鈍ってしまう。

同じくらい付き合いの長い薊には異常に辛辣だがそこは目をつぶる。

やがてパタリと本を閉じた昼也は厨房へと引っ込んでしまった。

その背を見送った堂島はクツクツと軽く笑う。昔からこの少年はバツが悪くなると決まって動きだし、別のものへと注意を逸らそうとするのだ。

今回は良い匂いがすることから、どうやら菓子で気をそらそうとするらしい。

果たして、昼也が持つてきたのは大皿。その上に鎮座するのは爽やかな柑橘系の匂いを纏ったレモンパイ。

これはパイ皿の上にレモンの果汁や果皮を混ぜ込んだクリームを盛り付けたものだ。完成間際にクリームに若干の焼き色をつけるのも特徴の一つか。

一口食べればたちまち広がるレモンの爽やかな風味とクリームの甘く、一瞬で口の中で溶ける至福の時を味わえることは明白だ。

だが、見るものが見ればこの状況はお世辞にも誉められたものではない。

前述にもあるように昼也の目の前でおおらかに笑う筋肉オバケは遠月リゾートの総料理長を務めているのだ。

そして過去最高得点をもって遠月学園を卒業した傑物。生半可な料理を出した暁には酷評されることが目に見えている。そこに付き合いの長さは関係無い。

現に堂島の目元は鋭くなっており、その目は出されたレモンパイの一切れへと向けら

れている。同時にそのゴリゴリとした肉体から覇気のようなものさえ窺えるのだから恐ろしい。

が、その料理を出した本人は気にせずパイを乗せた大皿にフォークを突き立てていて。いつぞやのようにやけ食いを敢行するつもりのようなのだ。

それを尻目に堂島はゆっくりとレモンパイへとフォークを入れて小さく切り取る。パイ皿とクリームの共演。

一口、口に含めば突き抜けていく爽やかさと甘さ控えめなクリーム。パイ生地もやはり甘さ控え目だが食感が際立つ、そんな感想を持つ。

食べていた堂島の表情は和らぎ、雰囲気も元の状態へと戻っていった。むしろ空気が緩んで、それに併せて頬も緩んでいく。

オッサンの緩んだ顔など見たところで嬉しくもないが、とにかく昼也のレモンパイは合格らしい。

一切れなど瞬く間に無くなり堂島はコーヒーでその余韻を押し流して、ホツと息をついた。

今回のコーヒーはどちらかというと浅煎りだったからか、レモンパイとの相性は完璧だったのだ。逆に深煎りだった場合は甘い、例えばチョコやキャラメル等がよく合う。

「さて、本題なのだが。君はこのままで良いのか？」

「あんたまでそんな事言うのかよ。何だよ、俺がどうしようも勝手だろ」

「確かに勝手だ。しかし、店に閉じ籠るだけでは君の求める至高の一杯へは到達しないんじゃないか？」

「……………」

堂島の言葉を昼也はこれ以上は否定しない。確かに手詰まりであることには代わりないのだ。

料理の腕は明らかに向上した。コーヒーに関する知識も増しており、着実に自分の思う至高の一杯へと近づいている——筈なのだが、どうにも一定のラインから上へと昇れない。

何かが足りないことは分かる。しかしその「何か」が何なのか分からない。

「遠月の十傑については知っているだろう？」

「……………特権持ちだろ？」

「そう、食に関する研鑽。その全てを認められる。君のコーヒーに対する熱意も認められることだろう」

「……………堂島さんは俺のコーヒーに何が足りねえと思う？」

この問いに、しかし堂島は答えない。いや、正確には答えるモノを持っていない。

「『コーヒー』という一分野に関しては昼也、知識、技量併せて類を見ないレベルで兼

ね備えている。それこそ自分より上だと堂島が思うほどに。

それに

「君と俺では味覚が違う。コーヒーに傾けている情熱も含めて、な。料理に関しての問いを料理人は自分で答えなければ大成しないものさ」

「堂島さん、爺みたいなこと言うんだな」

「ふつ、そこまで老けてはいない。さて、良い時間だ、御暇しよう」

そう言つて堂島は立ち上り、会計の代金と一緒に封筒をカウンターに置いて店を出ていった。

常連は全員こうなのか？と内心で愚痴りつつ、封筒をそこらの棚にぶちこみ、代金を回収して安楽椅子へと腰掛ける。

脳裏に思い出されるのは堂島の言葉。

しかし、自分にその技術はないと昼也自身は考えている。いや、そんな事は全くないのだが、当の本人が料理に対する熱意が薄い点と食べるものたちが基本的に感想を述べる前に完食してしまう事に理由がある。

つまり、この男。少なくとも店で料理を出すようになってからマトモに感想を言われたことがなく、更に本人は他人の食事風景など興味がなかったため食事している者達の表情を面と向かつて見たことがない。結果、自身の腕を正確に知る機会が無かったのだ。

食べ比べれば分かる、と思われそうだが、出不精なこの男が外食などするはずもなく、そして今まで彼に料理を振る舞った料理人は居なかった。常連の大多数が料理人であるというのにこの始末とは質が悪い。

「遠月、かあ……………」

ギシリ、と安楽椅子が軋み昼也は目を閉じる。

利点はある。堂島の言う通りコーヒーに関する知識を更に深め技術を磨くことも出来るだろう。しかし、遠月学園にはそれらメリットを叩き潰して余りあるデメリットもある。

それを思い浮かべ自分がそれに向かうとなると、自然とゲンナリしてしまうのだ。

何より遠い。それこそ通うためには近くに新たに住居を構えるか、若しくは寮に入らねば通うのが億劫になってしまう。

実際、迷う理由の大半はそこにあるのだからこの男も救いようがない。

「どおーすっかなあ……………」

四杯目

—喫茶 mid night—

美食の一族をも魅了する軽食とコーヒーが売りの隠れた名店というやつだ。店内にはコーヒーの匂いが染み付き、苦手なものには耐えがたい空間だろう。

だが、今日は何やら様子が違った。

店の入り口の扉には“close”の札が下げられており、いつもただでさえ薄暗い店内は完全に灯りが消えてしまっているのだ。

出不精と散々揶揄された男。彼は今、——フランスに居た。

いや、これには園児の作る砂山よりも低く、そこらの道路に雨上がり後に晴れて残った水溜りよりも浅く、そして沖ノ鳥島よりも狭い理由があるのだ。

チッセエじやんとか言っではいけない。件の本人は何も納得していないし、する気もないのだから。

昼也の背にはある程度の大きさのバックバック。その手にあるのは一枚のメモだ。

暫く辺りを見渡すが、やがて諦めたようにため息をつき、その重い足取りのまま、近くの通行人へと歩み寄って行く。

前に書いたがここはフランスだ。当然、公用語は仏語であり、そこらの通行人が話せるモノなど仏語が殆どだ。

『すみません。お時間よろしいですか?』

が、この男、アツサリと仏語を話して見せた。いつもの気だるい様子はそのままだが流暢なフランス語に通行人も少し驚いた様子だが応える。

『え、ええ、構いませんよ』

『ありがとうございます。実は道を尋ねたいのです』

昼也が示すメモ。そこにはフランス語で書かれた住所が記されていた。

『この店に行きたいんです。分かりますか?』

『……………ああ、"SHINO, S"。お食事ですか?』

『いえ、この料理長と知合いなんですよ』

その発言に通行人は目を剥いた。彼、若しくは彼女から見れば昼也は未だ幼さの残る少年なのだ。疑うのも仕方ないというもの。

しかし、その程度の視線で昼也がキョドる事などあり得ない。何食わぬ顔で続きの言葉を待っている。

その姿に冷静さを取り戻したのか一つ咳払いをすると、道を指差し口を開く。

『この道を真っ直ぐ行って突き当たりを左に。更に進んでいくと見える筈だよ』

『ありがとうございます』

握手をして去っていく背中を見送りながら、ふと、彼又は彼女は気が付いた。芳ばしいコーヒートの香りが、ふわりと立ち上る。



“SHINO, S”。日本人初のプルスポール勲章を授与された『レギユムの魔術師』の異名をとる四宮小次郎がオーナーを務める店だ。

そんな、ある種の革命を成し遂げた名店は本日お休み。窓、入り口にはカーテンがかけられ、更に“close”の立て看板。

しかし、店内奥の厨房には二つの影があった。

「四宮さん、お久しぶりです」

「……………急にどうした?」

「いえ、堂島さんに頼まれて来たんすよ」

影の一つは昼也。冷蔵庫に凭れて話し相手に目を向ける。

黒縁眼鏡の神経質な印象を覚える彼こそ、四宮小次郎その人だ。

久しぶりに会ったその姿に、窶れた、と昼也はそんな感想を持った。

「……………痩せましたね」

「ハッ、激務何でな。お前の所みたいに暇じゃねえんだ」

「採算とれて学校行ってるんすから良いじゃないですか」

「……………そういうやそうだったな。お前の店はどうなってるんだよ、まったく」

呆れたような、それでいて楽しいな雰囲気の中宮は脇におかれていたカップをとって中身を啜る。これは昼也が厨房で拝借したコーヒーをブレンドして彼自らが淹れた一品だ。

その完成度は毒舌家でプライドの高い中宮ですら無条件で旨いという程のもの。

中宮はカップに口を付けつつ厨房内をキョロキョロと見渡し、正確にコーヒーの位置を導きだした昼也へと視線を送る。

二人の出会いはいは数年前。先代のマスターがまだ現役であり、昼也自身もコーヒーに砂糖とミルクを入れていた年齢の時だった。

『老けてるな、アンタ』

開口一番がそれだった。理解するまで数秒を要し、更に怒鳴るまで数秒を使うという間が空くほどにあんまりな言い方。

小学校低学年の子供にあそこまで本気で怒鳴ったのは最初で最後だろう、と中宮はそのときの事を思い出してため息をつく。因みにその時から既に昼也は揺り椅子に腰掛

け本を読み、コーヒーを味わうスタイルを確立していたりする。

そして腹の底から怒鳴った四宮は直ぐにでも店を出ようとしたが、件のマスターに説き伏せられて渋々、一杯のコーヒーを頼んだ。

暫く待つて、出されたのは一杯の何の変哲もないコーヒー。

だが、薫りがふわりと昇つて嗅覚で感じ取ったその瞬間、まるで電気が背筋を駆け抜けたのでは、と思えるような衝撃を彼は受けたのだ。

あまりにも、あまりにも芳醇な薫り。たったそれだけで、薫りを嗅ぐだけで腹が満たされてしまうような、そんな気分を四宮は味わった。

震える手でカップを掴み、静かに持ち上げ、再度薫りを楽しんで、口をつけて傾ける。その瞬間、薫りの時以上の衝撃を受け、思わずカップを取り落として、放心してしまひそうになるほどの一杯。

タレーランの名言である“悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純粹で、そして恋のように甘い”が姿をもって現実に現れたと錯覚するほどの衝撃。それ以来、店は忙しかったが、暇を見つけては帰国しその店に通っていた。

あれから数年、今現在、この瞬間自分のために淹れられたこの一杯はあの時と変わらない、いや、あの時以上の味と深みを四宮へと伝えてくる。

「目標、か……………」

ポツリと自嘲気味呟けば、空しさが胸のうちに巻き起こる。

プルスポール勲章を取ってから、自分は明らかな停滞の時期に居ることは自分自身で気がついていた。

仲間の離反、経営の傾き、自身が完成する前に得てしまった勲章。

その全てが精神を蝕んでいた。ガリガリと端の方から削られていき心が痩せ衰えていく。

それに併せるように目の下の隈も濃くなり、先程昼也に指摘されたように痩せていく一方だった。

「四宮さん」

「……………なんだよ」

不意にかけられた言葉、ついつい刺のある返答をしてしまう。

そんなつもりは本人に無くとも、ここ数年で染み付いてしまった疑心暗鬼はそう簡単に抜け出してはくれないのだ。

だが、昼也もひかない。今回のフランス渡航は何も堂島の頼みを聞く為だけではない。

この四宮も比較的長い付き合いなのだ。プライドが高く毒舌家で傲慢、だからこそ忌憚のない意見を聞くことができる。

「ちよつと、相談なんすよ。聞いてもらえませんか？」

「……………聞くだけならな」

「んじゃ、遠慮なく」

語られたのは、ここ数回の来店の際に毎度のごとく遠月に来ることを勧められること。そしてそこにいけば自分の求める至高の一杯に本当に近づけるのか、ということ。

他にも色々とおつたが、主にこの上記二つが主題だった。

聞き終えた四宮は眉間にシワを寄せ、空になつたカップを置くと鋭い目を昼也へと向ける。

「随分と人気者じゃねえか」

「別に人氣がほしくて店やつてる訳じゃないすよ。ついでに言うとな俺の期待した答えと若干違ふんすけど」

「行つちまえよ。堂島さんと同意見だが食に関して、遠月程整つてるところは早々ねえ。飲料に関してこそそれは同じだ。知識の量、集められる情報。どれも個人じゃ到底無理だな」

「……………四宮さんは肯定派、か。んじゃ、ついでに。俺のコーヒーに何が足りないと思えますか？」

最後の問いは、ある意味料理人究極の問いだ。当然、他人である四宮から明確な答え

が返ってくるとは期待していない。しかし、それでも、ちょっとしたヒントが欲しかった。

が、願い届かず四宮はため息をついて首を振る。

「生憎と、お前の求める答えは俺にはない。第一コーヒーに関して言えばお前は俺より上だろ」

「……………使えねえ」

ポツリと呟かれた毒舌。だが、ここに居るのは二人だけで厨房は意外に声が響く。

案の定蟬谷に青筋を浮かべた四宮は昼也の頭を鷲掴みしギリギリと力を込め始める。もやしっこの昼也に逃れる術はない。

「痛い!? 痛いっての、四宮さん!？」

「痛くしてんだから当然だろ。お前は相変わらずだな、全く」

やれやれ、と首を振って再度ため息をついた四宮。その表情は幾分か和らいでおり、顔色も少なからず良くなっていた。

やはり、この男——

「痛い! 痛い痛い痛いイイイイ!？」

「ハッハッハ」

ドSである。

五杯目

— 喫茶 mid night —

少し前の臨時休業を終えて、今日も薄暗い店内には微かに聞こえるレコードの音と安楽椅子の軋む音。そしてコーヒーの芳醇な薫りが充満していた。

「……………」

そんな店内。いつも通り本を読みながらコーヒーを嗜む昼也は何故だか視線に晒されていた。

ジーツ、とそれこそ視線で穴が開いて見通しがよくなりそうな程に見られている。

「……………」何すか、水原さん

「別に」

カウンター席の一つに靴を脱いで三角座りしているショートカットの女性。イタリア料理店「リストランテ エフ」オーナーシェフを務める水原冬美である。

この店の常連は料理人が多いのだが、こうも遠月学園関係者が立て続けに来ると妙な勘繰りをしてしまいそうになるのは、何故だろうか。

薙切薊から始まりえりな、アリスと黒木場、堂島、そして今回の水原。これで代金と一

緒に封筒が置かれれば、連名の増え続ける編入届けが四通目となる。さすがにそんなに要らない。

それに、彼自身もここ最近心境の変化が微粒子程にはおき始めているため可能性はゼロじゃない。

四宮や堂島に促されはしたもののやはりこの店を離れたくない、という根本はそう簡単に変わらないのだ。

「ねえ、昼也」

「……………何です?」

「四宮の店に行くって本当?」

「……………正確には行ってきた、ですね。この前の臨時休業でちよつとフランスの方に」

「そつちに行くの?」

「?まさか俺が四宮さんの店で働くとか思ってます?」

「違うの?」

「違いますよ。自分の店があつて何でそれを捨てなきゃならないんすか」

ちよつと用事があつたから行っただけなのだが勘違いされるのは甚だ遺憾であつた。

それにフランスで大成するならばコーヒーよりも紅茶だろう。この男、コーヒーは好きなくせに紅茶は微妙なのだ。

いや、淹れられない事もなく、むしろ結構美味しいと薊のお墨付きを貰える程度にはその腕を持っている。というのも昔、一時期だが鴛鴦茶に凝っていたときがあった。

旨いものと旨いものを足し合わせれば必ず更に旨いものが出来る、というわけではないのは理解できる事だろう。

鴛鴦茶とは中国香港においてポピュラーな飲み物である。これは紅茶とコーヒーを混ぜ合わせ、そこに大量の砂糖と無糖練乳を入れて更に混ぜて提供する飲料だ。割合は基本的に7:3。そして紅茶を多くする方が一般的。

さて、この鴛鴦茶。やりようによつては素人でも結構簡単に飲めるものを作れたりする。

問題はそれを極めようとする場合だ。旨いコーヒーと旨い紅茶。この二つを合わせれば必ずしも旨い鴛鴦茶にはならない。ようはバランス。

その過程で紅茶を淹れるスキルは自動的に上がっていった。本人の内心はともかくとして、未恐ろしいセンスの結果だ。

さて、話は戻るが昼也の返答は水原の心情を落ち着かせるには十分だった。彼女も例に漏れず彼が自分の店で腕を振るってくれる事を望んでいるのだ。

特にイタリアではコーヒーはフランスなどと比べて圧倒的に需要が多い。朝の一杯から始まり、平均凡そ六杯のコーヒーを一日の内に飲む。

そのお国柄からかイタリア国内には多数の日本にあるコンビニの約5倍の数のB A Rと呼ばれる喫茶店が存在している。

因みに一般的なのはエスプレッソ。流通しているアメリカンコーヒーはあまり見かけない。

何が言いたいか、というと。

「ねえ、昼夜。やっぱりうちで……………」

「それは前にも断つた筈ですよ。俺はこの店以外で金とつてコーヒーは淹れない」

「……………強情」

「いや、経営者に店捨てろって言うのはどうなんすかね？」

いつも通りの返答に水原はションボリと擬音が付きそうな雰囲気醸し出して落ち込んでしまう。彼女は来店する度にこの様に勧誘しているのだ。その度にすげなく断られていたが。そしてその度に膝を抱えた体勢のまま、カウンター席に小一時間程落ち込む。

いい歳した大人が、と思われそうだがそんなことを言えば某ちっこい常連に「調教」という名の折檻を食らうことは目に見えているため昼夜は無言で安楽椅子を軋ませて立ちあがり、キッチンへと引つ込んでいった。

暫くたって戻ってきた昼也。彼の手には小さめの黒い長方形のお盆があり、その上に

はマグカップとデミタスの二つが乗っている。

無言でお盆ごと項垂れる水原の前にそれを置き、傍らに一本のティースプーンを添え、自分は再び安楽椅子へと座り直して本を読み始めた。

出されたのはデザート。それもイタリア料理店を經營する水原には馴染みある一品。

「これって……………アフォガート？」

冷たいアイスやジェラートに飲料をかけて食べるイタリアのデザートの一形態だ。一般的にエスプレッソをかけるが、他にもコーヒーや紅茶、大人向けとしてリキュールをかける場合がある。

因みに「アフォガード」と最後が濁る発音は間違いであり、アフォガート、が正しい発音とされる。

この一品。もちろんこの物臭店主の気まぐれ手作りの一つだ。と言ってもそこまで面倒は踏んでいない。アイス自体も一時間やそこから出来るものであり、エスプレッソもまた、長年染み付いた動作で淹れるだけ。

たったそれだけで美食の一族を魅了するのだから正しく持つ者と言えるだろう。

「……………」

冷たいアイスにエスプレッソを回しかけ、スプーンで一口。口に入れた瞬間、冷たいアイスと温かいエスプレッソによるダブルパンチと更に甘味と苦味のコラボレーショ

ンによって、水原が纏っていたどんよりとした空気は空の彼方へと消し飛んでいた。静かな店内にはカチャカチャとティースプーンとカップがぶつかる音が鳴り、やがてそれも止まった。

そこにいたのは満足げに頬を緩ませて、笑みを浮かべる水原の姿。ここまでがいつものやり取りなのだ。

「そういえば、昼也はイタリアには行かないの？」

「今、勉強中」

「教えようか？」

「No grazie」

「……………流暢ね」

この間、一度だって昼也は顔をあげていない。

慣れているとはいえその様子はやはり気に入らない者が普通だろう。

水原もその頬をプツクリと膨らませて不満ですよ、のアピール。歳考えろ。とか言うてはいけない。美人は何をやっても許されるのだ。

しかし、向ける相手が悪かった。

この店主興味の有無で対応が天地の差を見せる。

読書、コーヒー、睡眠。この三つ以外には大したリアクションが望めないのだ。

少なくともハニートラップなんぞを仕掛けた暁には仕掛けた側が心に消えないレベルの傷を負いかねない。具体的には冷めた視線と無表情で、ジツと見つめ続けられる。相手は出荷される家畜の気持ちに味わう事だろう。

「昼もつて、ホモ？」

「出禁にしますよ？」

「ごめん」

ハニートラップすることもなく冷たい視線を向けられることとなった。眉間にシワが寄っているため余計に怖い。

暫く気不味い沈黙が流れ、水原は出されていたコーヒーを飲み干すと、代金と恒例の封筒をカウンターに置いて店を出ていった。

暫く沈黙、そしてカップとお盆を回収しキツチンの流しへと浸けた昼也は封筒へと目を向ける。中身は予想できるが一応の確認を行う。

編入届け、と「エフ」への招待状の二つだった。ある意味初の状況。

今までにも招待状を貰うことは何度かあった。その中には美食の帝王直々のものも幾つか。

昼也はその全てを黙殺してきた男だ。どっかの忠犬はその対応に嘯みついてきたが、その主共々アツプルパイとコーヒードで黙らせた。

だが、ここ最近彼は心境の変化が微粒子レベルで起きている。

自分以外が作った料理。自分以外が淹れたコーヒ―。

沸々とうつつすら興味が胸の奥底に湧き始めてくる。

だが、この店主の根底にあるのは物臭のめんどくさがりの部分であることは周知の事実。

つまり

「……………」

目を瞑って暫く思案して、結局招待状は編入届けと一緒に棚の中へと封印されることとなった。

この男、見て見ぬふりという現代日本にありふれた悪しき選択肢を採ったのだ。

薄暗い店内に椅子の軋む音と、古いレコードの音楽だけが響いていた。

六杯目

—喫茶 mid night—

ここ最近、来る客の大半が封筒を置いていくために若干うんざりしてきている店主が経営する隠れた名店だ。

来店するものは基本的に横の繋がりからだ。少し奥まった場所にあることも理由の一つだが、仮に見つけても初見では中々入りづらいということも主な理由となる。

何が言いたいかというと。

「久しぶりね、昼也君」

「お久しぶりです、昼也さん」

「……………」

割りと頻繁にローテが回りきるのだ。薊でないのは仕事に追われているためだ。

今回の来店はえりなと彼女の秘書を務める新戸緋沙子の美少女二人。

野郎ならば鼻の下を伸ばしそうだが物臭ダメ店主には色気は効果ない。

今日も今日とて安楽椅子を揺らし軋ませ、ハードカバーの本へと目を落としたままだ。

前まで、それこそ初対面の時の新戸だったならば主への不敬として嘯みついていただろう。いや、今とて認めてはいない。知らず知らずの内に口角がヒクリと震えたりしている。

だが、彼女も子供ではないのだ。年齢的に子供だが、とにかく昔よりは成長している。それに来年は高校生。この程度で目くじらなど

「あの、昼也君？」

「……………」

「ねえ、前にもこんなだったわよね？」

「……………」

「ちよつと……………」

「昼也さん！えりな様を無視されるとはどういう見ですか!!」

無理だった。それはもう、驚きで隣のえりながビクリと震える程の怒声を昼也へと叩きつけてしまっていた。

しかし、柳に風、豆腐に鏝、糠に釘、全くもって堪えた様子のない昼也は本に目を落としたまま、傍らのカップに手を伸ばして中味を飲み干す。

ホツと息をつくとき、ティーカップの隣に置いていたポッドから新たにコーヒーを注ぎ直した。とんだカフェイン中毒だ。

「緋沙子？」

「……………つ、申し訳ありませんえりな様。出すぎた真似を」

「いえ、良いのだけど……………」

謝られたえりなだったが、彼女も特に咎めるつもりはない。緋沙子の気質も、そして昼也の気質も長年の付き合いから分かつている。

それ故に基本的にえりなは一人でこの店を訪れるのだ。生真面目な緋沙子と怠惰な昼也では相性が悪すぎる。

と、これが表向き理由。その建前の裏側にはほんのり甘酸っぱい感情が有ったり……………無かったり。

前述の通り、えりなは美少女だ。そしてそれは緋沙子もなのだ。

憎からず思っている相手のそばに自分以外の女の影があるのは、何とか気に入らない。

昔から料理に囲まれ、人付き合いが少なかつた彼女には自分の感情を正確には把握していない。ただ、嫌なのだ。子供が駄々をこねるように、気を引きたくなくなってしまふ。

が、流石にそれは自重した。色々と先を見据えると恥ずかしい。

変わりにコーヒーに砂糖とミルクを入れてやった。この店は基本的にコーヒーはブラックで出てくる。店主の拘り、とまではいれないが基本的にブラックしか飲まないた

めだ。

故に席には一応、砂糖坪とミルクポットが置かれている。どちらもコーヒーを飲むことに關しては妥協しない昼也が拘ったモノであるため品質はどちらもお墨付き。神の舌を持つえりなでも満足できる。

しかし、置いてあるからとはいえ、自分のブレンドにケチつけられたような気がして昼也はコーヒーにそれらを入れられることをあまり好まないのだ。

怒鳴りはしない、咎めはしない、ただ、チラリと見る。

気付くか気付かないかのほんの刹那だが本から視線を外してその客を見る。

その事に気付いたのはずいぶん前だ。昼也が始めてコーヒーを振る舞ってくれた時にまだ小さかったえりなは思わず砂糖とミルクを入れてしまった。

他人に興味が無くともまだ子供、自分の一杯に今に比べれば露骨な反応をしたのだ。

それ以来、えりなが気を引きたい時には出されたコーヒーに砂糖とミルクをほんの少し入れるようになった。

「……………」

チラリとえりなへと視線を送り、再び本を読もうとした昼也だったが、一ページも進めることなく本を閉じると小さく息をついた。

顔をあげて柱時計を確認し、暫し考えると立ち上がってキッチンへと消えていく。

いつものパターン。案の定彼は両手にそれぞれ白い皿を持って戻ってきた。

その二つをそれぞれえりなど緋沙子の前に置き、そして新たなカップを二つ取り出すとどちらにも黒々とした液体を注ぎ込む。

「これは……………」

「フォンダン・オ・シヨコラ、ですね」

「……………こつちもな」

白い皿に鎮座するチョコレートケーキ。粉砂糖がまぶしてあり、その上にはミント、傍らにはデイツシャーで盛られたバナラアイス。

そして淹れ直されたコーヒーは先程出されたものよりも更に濃いめであり、苦味が強めのブレンドだ。

苦いものには甘いものを合わせる。ティータイムの基本の形と言えるだろう。因みに酸味が強い場合は口当たりのサツパリしたレモンパイやチェリーパイ等の果実を使った爽やかなデザートがよく合う。

さて、件のフォンダン・オ・シヨコラだがフォークをいれば中からトロリとチョコレートが溢れてくる。

その一口を頬張れば自然と頬が緩んで幸せの中へと誘われていく。

「ん……………」

幸せな笑顔を見せるえりな。隣の緋沙子も同じく夢見心地を味わっていた。

この店が客が少ないお陰で周りに気を使うことなく美味しさに浸ることができる。

甘さ控えめのアイス、甘いが同時にほろ苦さも若干感じられるシヨコラ、そしてそれらの甘さを完璧に調和して流してしまおうコーヒ―。

正に至福の時。

その傍ら、再び安楽椅子へと戻った昼也は一緒に持ってきた出来損ないのチョコレートケーキを片手にコーヒ―を味わっていた。が、その表情は特に変わらない。砂でも食べてるのかと思われるほどに無表情だ。

いや、何も味覚障害等ではない。単にこれが普通なのだ。

つまりは彼以外が食べて感動する味でも彼にとつては普通。いつもの味でしかない。彼が最後に他人の料理を食べたのは五、六年前、先代の店主がまだ生きていた時だ。因みに人付き合いが明確に悪くなったのもそれぐらいからだつた。

本性が出た、というよりは大切な部分が欠落した、といった感じか。

コーヒ―に情熱を注いで突き詰めていき至高の一杯——に至る直前での停滞。完成など無い、と言われてしまえばそれまでだ。それでも彼は止めることはない。

何せ、それこそが——

「昼也君、大丈夫かしら？顔が青いわよ？」

「……………おう、問題ない」

思考が迷走し埋没していた昼也の意識はえりなによって引き戻された。

なるべくいつも通りを心掛けてえりなへと視線を送れば心配そうにこちらを見てい
る。それは隣の緋沙子もだ。

彼女とて本気で昼也を嫌っているわけではない。何よりも主であるえりなを救つて
くれた恩人だ、嫌いになるはずもない。ただ、ちよつとだけ無視するその反応の無さが
癪に障るといっただけだ。

二人の心配にさすがの昼也もぼつの悪い表情となり顔をそらす。

らしくない。ここ最近この店を離れる選択肢を与えられているからだろうか。

「何でもないさ。風邪でもひいたかね」

「……………本当かしら」

「嘘ついてどうするんだよ。ほれ、店閉めるから帰りな」

シツシツと猫でも追い払うように手を振る昼也。

明らかにおかしいことは明白だが二人は突っ込めない。何か言おうと口を開き、結局
言葉は紡がれず、代金を置いて店を後にした。今回は封筒は無しだ。

カランカラン、と扉のベルが虚しく鳴り、店内には昼也一人。安楽椅子に深く腰掛け
て上を見上げたその表情は髪が目元にかかつて窺うことが出来ない。

ただ、ただ、静謐だけが耳に痛く、虚しさを表す。それだけだった。



数日後、—喫茶 mid night—の表には“close”のプレートが掛けられており、中の電気は消えていた。

七杯目

—喫茶 mid night—

隠れた名店としてその筋では有名な喫茶店だ。

だが、ここ数日は様子がおかしい。

二桁に到達するほどの間、一度として開かないのだ

界限では夜逃げやら何やらと真しやかに語られているが、真相が出回ることはない。

そんな話題の種であるとうの物臭ダメ店主はというところ——彼は今京都に居た。

何故、京都？と問われそうだが、理由も一応ある。

古都京都、寺社仏閣の京都、といったイメージが強いが、もう一つの側面として学生の町、というのもある。更にそこに併せてここはカフェが乱立する地帯でもあるのだ。

そして、その地帯ならではといつても良いのか、質の良いコーヒー豆の卸売り業者も幾つか店を構えている。

そう、昼也は豆の仕入れに出っていたのだ。

昨今はネットでも注文できるが、やはり自分の五感で選んだものが一番しっくりくる

という理由から時偶彼は京都を訪れる。

意味深な幕引きがあつた気もするがこれは必要なことだ。何よりコーヒー豆の買付だけが用ではない。

むしろそちらはついで。本命は別だ。

「おっさん、目が鈍つたな」

「ぐっ……………そんなに悪いか？」

「少なくとも、去年の奴よりは質が落ちてゐるな」

「そうか……………買うか？」

「おっさんが後ろに隠してゐる質の良い奴を、な」

「……………お前さん、犬みたいになつてゐるな。ほれ、伝票」

「代金は着払いな」

「分かつてゐるつての。まいどー」

京都にすんで30年でありながら、京言葉はおろか関西弁すら使わないおっさんが営む卸売り店を出てきた昼也は腕時計を確認すると空を見上げた。太陽が丁度真上にあり、眩しい。

いつもならここおっさん、異常なまでに渋つてくるのだが、今日はアッサリと彼を解放していた。

結果、時間がポツかりと空いてしまい暇、という有り様だ。

有名な観光地である京都だが、流石に二桁以上訪れていれば行く場所も特に無い。

仕方がない、と一つため息をついて彼は歩き出す。予定は早まったが、その分長居をすれば良い、という発想のままやって来たのは小さな花屋。

「あら、夜帳の坊ちゃん。いつものやつかい？」

「…………坊ちゃん呼びはやめねえ？」

「アツハハハ！坊ちゃんは坊ちゃんさ。まだまだお子さまじゃないか」

「一応これでも、店主なんだが？」

「あたしから見ればまだまだ子供さ！」

快活に笑う女将に昼也はゲンナリとした表情だ。

この花屋も先程の卸売店と同じく昔からの行き着けというもの。それこそ女将の言うように幼い頃からの知り合いだ。

当の本人にその事を問えば物凄い表情で睨まれることだろう。

女将は一頻り笑いながらもその手を止めることなく、やがて一つの大きな菊の花束を作って持ってきた。

白い菊の花束。受け渡す際の女将の憂いを含んだ表情は恐らく見間違いではないだろう。

その表情を見て見ぬふりして彼は代金を払うと店を出ていった。

次に目指す場所は少し遠いが、ちょうど時間も空いたと言うことで歩いてその場所へと向かう。

古都の街並、その中を花束を担いだ少年がフラフラと歩いている。平日の昼間に、だ。一応、人通りの少ない道を進んではいるがそれでも0ではない。道行く人は、差はあれども昼也へと不躰な目を向けてきていた。

だが、昼也は気にしない。一々他人の視線やら評価を気にするような気質ではないのだ。

むしろ逆に眠たげな表情で辺りを見渡し、見返す。生気の抜けた顔だ。夜道で会えば悲鳴をあげて逃げ出したくなるかもしれない。

幽鬼のように歩む昼也だが、その足取りは意外にも力強く確りしている。いや、いくらもやしつこでもそれ位は普通に可能か。

とにかく彼は一心にある場所を目指し、歩き、歩き、歩き、漸く辿り着く。

そこは、墓地。小高い丘に設けられたそこには多数の御影石が乱立していた。

昼也は入り口の近くにある流しに無造作におかれた木桶に水を注ぎ、柄杓と一緒にそれらを纏めて持つと、墓地へと足を踏み入れた。

平日、それもお盆などではないため辺りに人影はない。埋め込まれた石畳に、コツコ

ツと靴底がぶつかる音が定期的に響き、やがて止まる。

そこは墓地の最奥、隣接する林との境界線上に建てられた大きな墓だった。刻まれた文字は「夜帳」。

ここは夜帳一族の墓なのだ。因みにもつと言うならこの墓地の土地所有者は彼等だったりする。何でも昔、バカみたいに儲けた先祖が後世の世に金は残さん！と決めたらしく散財した結果なのとか。

最後には散財が過ぎてスツカラカンの一文無しになったようだが、この土地は今でも夜帳のものであり、管理のみを寺に任せている次第だ。

そんな場所で昼也は墓石に水をかけ、花を供えるとその眼前でドツカリと胡座をかいて座り込む。

何を言うでも、何をするでもなく。ただひたすらに墓石を見上げ、見つめ、その場から動かない。

サラサラと風が流れる音があるだけ、林が近いからか外の喧騒もここにはあまり届かないのだ。

どれ程の時間そこに居たのだろうか。既に太陽は没しかけており、彼の名字でもある夜の帳が降りてきていた。

「で？何か用かよ、爺さん」

「お主くらいであろうな。儂をそう呼ぶ者は」

胡座で片肘をつけて気怠い様子で呟かれた問いに返ってくる老練な声。いつの間にか昼也の背後には着物姿の老人が腕を組んで立っていた。右目に大きな傷があり、袖から覗く腕の筋肉が逞しいこの老人は雑切仙左衛門。食の魔王とも呼ばれる料理界の重鎮だ。

普通ならば仙左衛門にこの様な口の聞き方をすれば周りが黙っていないのだが、薊と同じく彼等のやり取りはこんな感じが当たり前となつている。

「旭が死んで何年になる」

「……………耄碌したかよ爺さん。確か5年だ」

「お主の時は止まったままか？」

「……………関係ねえだろ」

不貞腐れた様に呟き立ち上がった昼也は空になった木桶とその中に柄杓を突っ込んで仙左衛門の隣をすり抜けて去っていく。が、何故か足音がついてきていた。

「……………マジで何かあるのか？」

「ふっ、なあに儂も帰るだけの事よ。お主が気にすることなど何もないであろう」

「いや、爺のストーカーとかごめん被るって話だ」

「本当に肝が据わつとるのお、旭のバカを思いだすわい」

「そのままあの世に引つ張られちまえ」

墓地を出ればそこにあるのは黒塗りの高級車。運転手が出てくると後部座席を開けて恭しく一礼してくる。

仙左衛門が乗るのを見て、やつと解放される、と片を回していた昼也だったが、ここに気付いた。

車が発車しない。それどころか運転手も一礼したまま動かないのだ。嫌な予感が生まれるというもの。

暫く無言の抵抗を示したが、元来流される、というより流れに身を任せるタイプの昼也は諦めのため息をつくと車へと乗り込んだ。

バタリと扉は閉められ、運転手も乗り込み走り出す。車内は無言。

考えても見てほしい。ヤクザな見た目の爺さんの隣に座って車に乗る。この時点で辞退したくなるというものだ。

窓枠に肘をついて流れていく京の町並みを見ている昼也。その目は酷く虚ろだった。

出来れば降りたいと思っているが、もしここにスタントマンの真似事など出来る筈もない。視線を合わせないように外を見るのはちよつとした抵抗だ。

「……進学先は決めたのか？」

静寂を切り裂く仙左衛門。しかし昼也は答えない。

何故か？自分の店の店主という名のニートへの道を閉ざされなかったためだ。

適当な高校を挙げるのも手だが、雑切の家の情報網を駆使されれば数時間と掛からず看破される事が目に見えているため、不用意な発言も出来ない。

結果の沈黙だが、顔を逸らしていることで仙左衛門へと向けている後頭部にプレッシャーが突き刺さる。

一分、二分、と時間は過ぎて、やがて昼也は諦めたのか口を開いた。

「進学はしねえよ。俺はこのまま……………」

「遠月に来てい」

言い切る前に言葉を被せられた。

渋々、向き直れば、強い視線に射竦められる。

「お主の止まった時を動かすものが居るやもしれぬぞ？」

「……………それは、他所でも」

変わらないだろ、と続くことなく昼也は口をつぐんだ。

目を見て直ぐに分かった。自分の返答はyesしか求めていないのだと。

だが、某奇妙な冒険の漫画家ではないが簡単に頷くならば彼はこんな性格になつていない。むしろ、Noと言いたくなくなってしまう。

とはいえ単に拒否するのでは堂々めぐりというもの。そも、昼也は何故ここまで誘わ

れるのが分からないのだ。己の才を知らないが故の疑問だった。

「何で俺なんだ？」

「ふっ、知れたこと。儂は才有るものがこのまま野に埋もれるのが我慢ならんだ」

「才、ね……………はあ……………仮に行くとして、だ。辞めるのは自由か？」

「お主も遠月のシステムは知っておろう。才がなければ去る、それだけよ」

「返答になつてねえぞ、爺さん。辞めても良いんだな？」

「……………直ぐに辞められては儂らの面目丸潰れということを理解しておけ」

「……………」

仙左衛門の言葉に昼也は沈黙を返答として、目を閉じた。

車は止まることなく走り去り、やがて峠があつたのか、その先へと消えていくのだった。

八杯目

遠月茶寮料理學園。料理界においてのエリート、いや、超エリートを産み出すための学校であり、卒業到達率10%以下という地獄の砦である。

具体的数字を挙げるならば、1年から2年へと進級できたのは812名中の僅か76名。在籍するだけでも料理人としての箔が付き、卒業できれば引く手数多という化物校。

更に質が悪いことに腕さえあれば貧富の差など関係無いにも関わらず、エリート氣質のバカや選民思想を持つキチ、果ては同級生ですら見下しあうという世紀末も真つ青な魔境じみた一面も多分に持ち合わせている。

そんな魔窟に行くことになってしまった物臭ダメ店主、夜帳昼也は現在
「……………」

日当たりの良い縁側に安楽椅子を持ち込み、店ですると同じように、本を読みながらコーヒーを啜っていた。

キシキシと軋む音をたてながらユラユラと静かにゆっくりと揺れる安楽椅子とポカポカとした柔らかな太陽光と、眠くなる要素をふんだんに盛り込んだ定年退職後に趣味

もなく縁側で昼寝をする老人、のような時間。

因みにこの日本家屋は彼の家ではない。本と安楽椅子は自前だがそれ以外は全て他人のものだ。

あの日、京都での一幕から時は流れて数ヶ月、昼也は店を閉めてここに居る。

そも、彼は生来面倒くさがりであり、確かに編入することを何となく決めはしたが、前にも書いたように彼の店から遠月までは遠いのだ。中学での通学ですら億劫であったというのに、更に遠い場所が目的地なら足も鈍る。

常連客達はその事を知っている、ならばどうするか。

その措置として、昼也は難切の家へと招待されていたのだ。彼からすれば招待というよりも拉致の方がしつくりくるのだが、目を瞑ろう。

結果、自墮落の極みのような生活を彼は離れずることとなった。

平日は学校に送られ、休日は日がな一日離れで安楽椅子の上で本を読む。時々仙左衛門等に頼まれてコーヒーを淹れたり、軽食を作ったりするがそれ以外は明らかにニートのそれだ。というか中学生の時間の使い方ではない。

そんな枯れ果てた老人のような昼也はカップに注いだコーヒーを飲み干し、お代わりを注ぐとうと傍らに置かれた足の長い机の上に置かれたポットを取り、首を傾げた。

「……………無くなった、か。面倒だな」

ポットから吐き出されるのはたったの数滴。そういえば軽かった、とポットを元に戻しつつ、昼也は椅子に深く座り直した。ギシリと軋んで揺れる。

部屋の奥に設けられたキッチンへと向かえば直ぐにでも新たな一杯にありつけるのだが、如何せん店と比べて遠い。店なら4歩のところを、ここではその四倍は歩かねばならない。いや、それでも16歩なのだが。

その手間を彼は惜しんでいるのだ。経験ないだろうか？ゴミ箱に投げた紙屑が入らず、脇に落ちて結局拾って捨てたり、洗い物をしていて水をためていた桶を流したら桶の底と似た色合いの食器が出てきたりだとか。とにかく細かく地味であり、微妙にイラツとする手間。

昼也はそれらが嫌いなのだ。嫌いであり、面倒であるが故にコーヒーにありつけない、という悪循環に陥っていた。動けよダメ人間、と何処から聞こえてきそうな程の怠惰っぷりだ。

「……………どうしたもんかね」

「何がかしら？」

「ん？」

独り言に返ってきた呆れの声。そちらを見れば腕を組み高圧的様子のえりなの姿があった。

コックスーツの姿である事から推察すると、またどこぞの料理人のメンタルをブレイクしてきたのだろう。

彼女はスタスタと縁側に近付くと、昼也の座る安楽椅子の隣に腰を下ろした。

「それで？何を困っているのかしら？まさか、今さら編入をなしにするつもりじゃ……」

「いや、そうじゃねえよ。コーヒー取りに行きたいんだが………面倒だと思つてな」

「……………相変わらざるの物臭ね。そんなんじや、直ぐに學園を追い出されるわよ？」

「そりや、願つたり叶つたりだ。俺は好きで行くわけじゃないんでな。調べものさえ終わればおさらばさ」

コーヒーがなく、本もキリの良いところなのか淀みなく昼也は言葉を返していく。珍しいこともあるものだ。

「流石に、編入試験で手を抜くことは無いわよね？」

「モノによる。仮に鹿の解体とかやらされるなら、速攻で帰る。面倒だからな」
出来ないから、ではない。面倒だから。つまりやる気になれば鹿の解体も訳無いということだ。

高スペックの持ち主であることは知っているえりのだが、やはり慣れない。

そも、ジビエの解体は知識が無ければ旨いところを軒並み潰しかねない技術なのだ。

一介の喫茶店の店主が知っている方がおかしいだろう。

「今更だけど、昼也君は出来ない料理はあるのかしら？」

「知らねえモノは作れねえよ」

「知ってたら作れるのね？」

「あん？レシピが分かかってりや一定のモノは出来るだろ。みて、そのまま作る、料理なんてそんなもんだ」

明らかに料理人に喧嘩を売っている発言だ。しかし、ある意味それも真理だろう。だいたい、レシピとは料理を作るための謂わば指標、案内なのだ。

昼也としてはそんな示された道を進むだけのことで驚かれる方が驚きだ。

「……………本当に規格外ね……………」

故にボソリと呟かれたえりなの言葉は聞こえなかった。

彼女とて才能溢れる人材だ。しかし、今の地位に至るために努力は積み重ねてきたつもりだ。それをぼつと出の者に容易く抜かれるのは腹に据えかねるものがあった。

だが、同時に目標の1つともなる。特にスイーツ、そして飲料に関しては再現するこ
とすら出来ないからだ。

アリスや黒木場もそうだが、えりなも昼也のスイーツを再現しようとしたことがあつた。

しかし、出来ない。神の舌を持つえりなですら昼也の黄金比から産み出されるスイーツの組み合わせを把握しきれなかったのだ。

この技術は、ある意味唯一の彼の努力の成果。つまりは彼の目指す至高の一杯を作り上げる為の必須の技能だった。

黄金比。料理ならば主に調味料に使う言葉だろう。

昼也の場合はこの黄金比を食材から、調理時間にまで完璧に当て嵌めて作るのだ。その時の彼は手が離せるその時まで厨房内を動き続ける。三、四個の作業を同時に行うなど余裕のよっちゃんである。

話がそれだが、それらの技術の根底にあるのは、やはり才能。それも近年稀に見る巨大原石。

カットを施される前ですら群を抜いているのだ。やる気と最上の師さえ居れば世界屈指の料理人も目ではない——かもしれない。

絵に描いた餅に意味はなく、机上の空論をどれだけ捏ね繰り回しても無駄なのだ。

第一、昼也がコーヒーや本以外に精力的に動いていればそれだけで知り合い達は卒倒しかねないというもの。酷いものなど天変地異の前触れ、若しくは偽物と疑いかねないほどに、彼は怠惰で通っているのだ。

「結局、コーヒーは飲まないのかしら？」

「……………面倒だ」

「なら、私が持ってきたら淹れてくれる？」

「んー……………ま、良いぞ」

えらく間が空いたが一応了承の返事を確認したえりなはイソイソと靴を脱ぐと離れへと上り、奥へと向かっていった。

それを横目に見送った昼也は庭へと再び大きく欠伸をする。昼寝に最適なポカポカ陽気。コーヒーで誤魔化していた眠気も、抑えるカフェインが無ければ顔を出すというもの。

一応えりなを待ちながらも、その臉は徐々に徐々に下りてきはじめ、それに併せて呼吸も長くゆつくりとしたものへと変わっていく。

因みにコーヒーはブレンドしたものをある程度保管しているもの、お湯の温度から注ぐ量でも大きく味が変わるため彼以外は上手く淹れることが出来ない代物となっている。

つまり

「寝ている!？」

戻ってきたえりなはそんなキャラもかなぐり捨てた驚きの声をあげてしまう。

上述の通り、デリケートなこのコーヒー。昼也が淹れなければ持つてきた意味が無い

というもの。

「起きなさい、昼也くん。ほら、早く」

その後、彼が起きるまでの30分、えりなは只管に彼を起こす作業に苦しめられるのは全くの余談である

九杯目

遠月茶寮料理學園

料理界のエリートを産み出す弱肉強食の魔窟にして外道も蔓延る人外魔境。在籍するだけでも相当であり、大抵のモブ達は進級すらも出来ない事などザラである。逆に進級出来た者はモブであつても腕利きの強者となるのだ。

「進級試験落ちたアあああ……………」

「もうダメだ……………お仕舞いだ……………」

そして、この學園は無駄に広い。具体的には事務棟から編入試験を行う試験会場まで凡そ三キロ。直線距離で三キロだ。因みに直通の道はない。

「頼む！金なら幾らでも払う！だから息子の退学を取り消してくれえ!!」

……………先程から道を進むだけで阿鼻叫喚なのはと言うことだろうか。前者に至つては絶望感が半端なく、後者に至つてはすがられた職員は無視を決め込み取り合おうとしない。

「……………地獄かよ」

ズボンのポケットに手を突っ込んで死んだ目で呟いた彼は深々とため息をついた。

本日は編入試験が開催される日。彼、夜帳昼也もその試験を受ける一人だ。

薙切の離れに住み着いていたのだから、送ってもらうことも出来だろうに、態々歩いての登校。理由としてはやはりこの学園、延いては料理界において「薙切」という名前が効きすぎるといふことにある。

食の魔王、神の舌、その他諸々。ビックネーム過ぎる。編入生である昼也がそんな者達と共に学園に来たことを見られれば裏口などと余計な噂が立ちかねないのだ。

本来ならばあり得ない事でも、殺伐としたこの学園ならば噂を信じるものが大多数となるのは明白。居心地が悪ければ速攻で調べものを終えて学園を去りかねない。それは困る。

とはいえそんな思惑に関して露程も関知していない昼也からすれば鬱展開を回りで見せられてゲンナリしているところだ。正直帰りたいたい、というのが彼の心情である。

どこの世紀末だよ、と。

その内心を表すように彼の足取りは遅い。亀の歩みとどっこいどっこいの遅さだ。

「帰りてえ……………」

今更ながら彼の格好に言及しよう。白の長袖シャツに黒の薄手のベスト、赤のリボンタイに黒のズボンという出で立ちだ。店ではここに右大腿部にポケットのある黒のサロンエプロンを着けていた。イメージ的にはバーテンダーが近いだろうか。

そんな格好の眠たげな目付きの悪い三白眼の少年が猫背に歩いていけば、それは注目を少なからず集めるといふもの。

「よう！お前も編入試験を受けるのか？」

「……………ん？」

話しかけるは赤毛の少年。顔の左斜め上の眉尻付近に切り傷のある少年だった。

学ランの彼は仲間を見つけた、というような表情で片手をあげて昼也へと近付いてくる。

「誰だ……………？」

「俺か？俺は幸平創真だ。よろしく」

「……………夜帳昼也」

これが二人の最初の出会い。極々普通の対面なのであった。



「へえ、昼也は喫茶店やってるのか。オススメのメニューとかあったりするのか？」

「いや、うちはメニューとか出してないんだ。基本的にコーヒーだけだな」

ベンチに腰かける二人。意外にも話は弾んでいるらしく話題は各々の店のことであ

るらしかった。

無表情である昼也を見ていると本当に盛り上がっているのか甚だ疑問も出てしまうというものだが、そこは目を瞑る。

彼等の周りでは黒塗りの高級車やら、そこから下りてくるお坊ちゃんやら、それに付き従う護衛や執事やらで溢れかえっている。先程、昼也に話しかける前に創真が話しかけた相手もフランス料理店の御曹子であった。

つまりは金持ち揃いの中に異物が二人紛れ込んでいる形になっている。当の二人は全く気にしていないが。

そも、料理の腕に金持ちかどうかなど関係がない。どれだけの名店であろうともその跡取りが皆類稀な才覚を持つ事無く、高い食材が使えるから料理が上手くなるわけではない。

その点において二人は似ていた。料理に貴賤は無く、また、食材にも貴賤はなし。ただ、己の培ったモノで勝負する。そんなスタンスだ。

「そういうえば、編入試験って何するんだ？」

「えり……………俺の知り合いが言うには料理だよ。試験官が出すお題をクリアすれば良いんだと」

「お題かあ。ま、何が来ても問題はないか」

「自信あるんだな。定食屋はフランス料理とかも出すのか？」

「いや、出さねえよ？けど、お客の要望に答えないのは料理人失格じゃねえか」

快活に笑う創真。彼の論だと昼也は料理人失格になるのだが、そこは言われた当人も口には出さない。自覚はあるのだ。

似ている、と先程表現したが、それは料理に対するスタンスのみ。例えば客に対して要望にできる限り応える創真に対して昼也は客を無理矢理自分の土俵へとあげてしまふのだ。

味に浸らせ、味に没頭させ、他は何も感じさせない。完璧なバランスで作られる料理とコーヒーはそういう代物だった。

ふと、コーヒーが飲みたくなってしまふ昼也。しかし、周りには自販機などはない。暫く考え込んで、ピコンと豆電球が灯るような閃きが訪れた。

彼はベンチより徐に立ち上がると、そのまま試験会場へと足を向け、歩み出したのだ。

「あ、おい、どこ行くんだよ！」

「試験会場。コーヒー飲みたいんでな」

「ちよ、待てつてば！」

その背を追いかけ走る創真。波乱の編入試験、いつたいていどういう事になる事やら。



遠月十傑評議會。その名の通り十人で構成されており、生徒の憧れの的でもある。

彼等の、彼女等は料理の研鑽に対する様々な行為が許され、この學園の資金から、既に絶版したような古いレシピ、希少な食材等、それらの恩恵を優先的に受けられる者たちなのだ。

「本日の編入試験を一任されました、薙切えりなど申します」

編入生の集団の前でえりなはそう自己紹介した。

たったそれだけで編入生の大半は顔を青くして、冷や汗を流し、後ずさるものも居るほどだ。

そんな彼らを冷めた目でえりなは見つめていた。いつぞやの昼也が水原に向けた視線とも張り合えるほどに冷たい。彼女が美人であることも相俟ってみられた方はダメージがでかいというもの。

しかし、一瞬だけその視線は緩んだ。瞬きほどのほんの一瞬だったが。

(良かった、ちゃんと来てるわね)

その視線の先に居たのは、カップを片手にコーヒーにありつく昼也の姿。

この男、試験会場へと来るなり勝手にコーヒーを探しだしブレンドすると自分で淹れ

て飲み始めたのだ。周りでは今か今かとハラハラしている他の編入生を無視しての振舞い。

何人かはそんな昼也を鼻で笑っていたが、コーヒーの香りが鼻を擦るとその目を見開くものが後をたたなかつた。

香ばしく、それでいて上品な魅惑の香り。

自然と視線もそちらへと向いていき、いつの間にかシンツと静まり返る試験会場。その中で響くカップとソーサーがぶつかる儂い音。

そして今も試験官であるえりなが来たことにも気付かずにコーヒーを楽しんでいた。とんだ暴挙である。

だがしかし、えりなは満足そうにすると編入生達へとお題を投げ掛けた。

「作る品は卵使ったものよ。それから——」

そこで一度切り、不敵に笑む。

「これから一分だけ、受験の取り止めを行いましょう」

それが限界だった。

如何に傲慢不遜な態度とつていようと神の舌に対抗できる腕など持ち合わせていない編入生達は一気に逃げ出してしまふ。

残るのは未だにコーヒーに舌鼓を打つ、昼也とその隣で目を丸くして見ていた創真の

二人だけ。

えりなとしては残るのは昼也だけのつもりだった為に柔らかなの笑みを向けようとして、先に創真の姿を視認して表情筋を全力で動かして取り繕う。

幸いなことにどちらにも気付かれなかったが、えりなの耳は赤くなってしまうていた。

「何でもいいのか？」

「……………ええ、卵を使った一品であること。それが条件よ」

創真の問いに、返ってくるのはつつけんどんな返事。暗に、何故居るのか、と問うているのだが、もちろん彼はその裏には気づけない。頭に手拭いを巻くと、勇んで調理台へと向かっていった。

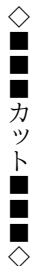
残るは面倒くさそうに顔をしかめた昼也のみ。

「目玉焼きとかで良いか？」

「……………言っておくけど満足でき無ければ私は笑顔で不合格にするわよ？」

「……………んじゃ、オムレツな」

ガリガリと数度頭を搔いて昼也は卵とバター、油、塩、その他調味料を手に調理台へと向かうのだった。



出されるのは白い皿。その中央に鎮座するはふわとろに仕上げられたプレーンオムレツ。ふわりと香るバター香り、卵の匂いが合わさり最強に見える。

調理過程？ バランスを極めただけで至ってノーマルな作り方をしたためにお蔵入りとなりました。

完成した一皿。それに注目するのはえりなと緋沙子、そして匂いを嗅ぎ付けた創真の3名。作った当人は興味が無いらしく欠伸をしながらそっぽ向いていた。

先ずは一口目。添えられたフォークを手にとつて、端から切り込んでいく。掬い上げ、一口。

卵の旨味と、バターの香り、そして完璧に計られた調味料による味覚への衝撃は計り知れない。

二口、三口と止まること無くフォークは動き続け、やがて空しく皿と擦れ合うことで終わりを告げた。

「……………合格よ」

「……………そうかい」

余韻に浸りつつも下された、合格。昼也は一言返すと、その足で試験会場を出ていっ

てしまった。

3人は誰一人として彼を留めようとしなかった。

えりなは未だに味に浸っており、その隣では緋沙子が涎を我慢しつつ皿を凝視し、創真は越えるべき壁を見せつけられたようで武者震いしていたためだ。

この日をもつて、物臭ダメ店主は望まぬ面倒ごとに巻き込まれ続けるのだが、それはまた後の話。

「そーいや、俺って何処から通うんだ？」

夕焼け空に眩かれたこの一言、カラスがバカにしたように鳴きながら彼の上を悠々と飛び去っていくのだった。

十杯目

遠月茶寮料理學園。

多数のエリート料理人を排出する魔窟にして下道の蔓延る人外魔境にして、弱肉強食の縮図を煮詰めて集めて詰め込んだ、そんな場所だ。

更にこの學園、無駄に広い。それはもう、歩き回るだけでも一苦勞な程に、広い。

「疲れた……………」

ゲンナリとした様子でベンチへと座り込みだらしく仰け反りながら、昼也は天を仰いでいた。

編入試験を終えて一時間。未だに彼は學園内に居た。

何も用事が有るわけではない。お忘れかもしれないが彼は出不精の面倒くさがりだ。

しかしその出不精の根底にあるのは昼也の方向音痴。そう、この物臭ダメ店主、道を覚えられないのだ。そして覚えるにしても最低十回は通らないと覚ええない。しかも、それは必要に駆られた時のみにはか發揮しないという条件付き。

京都の一件は幼少の頃より何度も通った花屋から墓地の道であるし、卸売りの店は自分で見付けた場所だからこそ行き着けた。

つまり、何が言いたいかといえは

「ハイ、何処？」

迷っていた。

地図を見るよ、と言われそうだが、彼は典型的な地図を有効活用できない人間なのだ。具体的には角を曲がる際に地図を回さなかつたり、そもそも北と南が逆だつたり、等だ。ならば、携帯で連絡を、と思いきうだが生憎と先程バッテリーがお亡くなりになってしまい、うんともすんとも言わない。

詰んでいた。当の本人も今日は野宿か、と諦めの境地だ。いや学校なのだから見回りの者も居るだろうと思うだろうが、言つてはなんだが広大な敷地の弊害か、若い職員ではこの學園全体を把握しているものは少ない。

暫く逡巡しやがて諦めたのか、昼也はベンチにゴロリと横になると、腕を枕に目を閉じた。未だ春先で寒いというのに、この男野宿する気である。

極論を言えば、夜帳昼也という男は基本的にどこでも眠れる。それこそ臥薪嘗胆のように薪を並べたその上ですら寝ようと思えば眠れるのだ。寝たら確実に風邪を引くと思ふのだが、気にしちやいけない。

程なくして腕を枕に膝を曲げて横向きにベンチに横になっていた昼也は寝息をたて始めた。

時間は刻一刻と過ぎていき、夕焼けの空は日も落ちて、夜闇に包まれようとしている。当然、数少ない日光が無くなれば気温もぐっと落ち込むというわけで――

「……………えつきし！」

プルリと体を震わせて縮こまらせながらもそれでも起きない昼也。怠惰の極みとも言えるだろう。

しかし、いい加減にしないと本格的に風邪を引き、下手すれば始業式に間に合わないという失態も犯しかねない。

果たして、神は彼を見放さなかつた。

「あの、大丈夫……………ですか？」

かけられたのは少女の声。三つ網のお下げのようにして前にたらし、花のピンで前髪を留めた少女だ。

見るからに人の良さそうな、それでいて気の弱そうな少女は恐る恐る手を伸ばして、指先がシャツの一部に掠ると慌てて引つ込める。

その動きを何度か繰り返しているうちに昼也は薄く目を開けた。ぼんやりと目の前の少女へと目を向けて、特に何を言うでもなく体を起こした。

体を捻ればゴキゴキと関節が鳴り、伸びをすれば大きなあくびが出る。どんな所でも寝られるとはいえ、疲労が抜けきるのかと言われればN oというものだ。

「……………えっと、大丈夫、です？」

「ん？……………ああ、問題ない」

おっかなびつくりといった様子の子の少女だが、もちろん昼也に彼女を思いやるような優しさを期待するだけ無駄である。素っ気なく返事を返して再度、伸びをして辺りを見渡した。

気温は更に下がっており、辺りも暗くなっている。

「どうしたもんか……………」

腕を組んで名案が浮かぶことを期待するが、寝起きの鈍りきった脳味噌に期待するだけ無駄というものだ。

「あの……………」

「……………ん？なに？」

「いえ、その……………何か困ったことでも？」

「……………これからどうしようかと思つてな。道に迷つて難儀してた所だ」

やれやれと首を振つて見せれば少女は引き攣った笑みを返すだけだ。パーテン服のような格好の彼のその動きなどシニールでしかない。

「えっと、ご案内しましょうか？」

「ん？良いのか？」

「は、はい！大丈夫です！」

「んじや、頼む……………あ、待った」

立ち上がった昼也を確認して案内しようと踏み出していた少女だったが、唐突な待てにつんのめる。

転げかける少女だったが、やはり昼也は気にしない。彼の頭の中はコーヒー一色に染め上げられていた。

中学生のときは学校へと魔法瓶に入れたコーヒーを持参して、休み時間でガブガブと飲み、帰れば店に入り浸つてのコーヒー三昧だったのだ。短い期間とはいえ、コーヒーを絶つていると途端に飲みたくなってしまう。

この待ったはそこから来ていた。

「なあ、えつと……………」

「た、たた田所、め、めめめ恵でしゅ!?」

「そうかい、田所さん。俺は夜帳昼也だ」

（うう……………舌が痛い……………！ついでに心も痛い……………！）

プルプルと舌と心の痛みにうち震える田所。その見た目は正に小動物の所作。

だが、やはりこの男は何の反応も示さない。むしろ噛んだ部分すら無視している。ホモなのではなからうか。

「それで、田所さんは寮暮らしか？」

「……………ふえ!?は、はい！」

「……………その厨房って使わせてもらえるのか？」

「えつと……………分かりません。管理人さんに聞いてみないと……………」

「そつか……………とりあえず案内頼めるか？」

「へ?あ、出口は……………」

「違う、違う」

再び止められ田所は首をかしげる。帰るのではないのか、と。彼女からすれば先程の厨房云々も明日以降の事だと思っていたのだ。

「寮の方に、な」

コーヒーのためなら真面目に動く男。その点に関してのみ、彼は手を抜かないのだ。た。



「うわあ……………」

「ここ、ここが極星寮です！」

珍しく感情のこもった声をあげた昼也。流石にこれは予想外だったらしい。

蔦が覆い尽くす洋館、雑草が生える庭、飛び交う鳥etc.

どこぞのB級ホラーのロケ地と言われても遜色ない薄気味悪さを感じさせる光景だ。

「な、中は綺麗ですから！厨房の設備も整ってますし……………」

ワタワタと慌てる田所だが、説明を受ける昼也としては初見のインパクトが薄れて既にいつも通り。

とりあえず、コーヒーが飲みたいところなのだ。

しかし、田所気付かない。そもそも、気の弱い彼女にとって三白眼のバーテン服着た男など未知の領域の存在に近い。

暫く大人しくしていたコーヒー中毒者だったが、いい加減に痺れを切らしたらしく一歩を寮へと踏み出した。

「あつ……………ま、待つてくださいい〜！」

その後を。パタパタと追いかける田所。

彼女の言う通り、踏み込んだ寮の中は意外に綺麗なものだった。

一回中央、玄関から入れれば直ぐに大きな中央階段があり、少し登れば壁に沿うように二股に別れて二階へ。外観が酷いだけで造りもしっかりしており、何より広い。部屋数も多いらしく、それを表すように幾つかの扉も目についた。

「で、厨房は？」

「あ、えつと……………」

「おや、302号漸く帰ってきたのかい。そつちの坊やは……………ん？」

「……………山姥？」

「誰が山姥だ、クソガキ！私はここの寮母の大御堂ふみ緒。『極星の聖母』ふみ緒さんと呼びな」

思わず口から出てしまった内心に返ってきたのは叩きつけるような怒声。いや山姥呼ばわりされれば誰でも怒るだろう。

名乗った大御堂は階段を降りてくるとしげしげと昼也の顔を覗き込む。まるで何かの面影を探すような、そんな見方だ。

「クソガキ、あんたの名前はなんだい？」

「……………夜帳昼也」

「！お前、旭のバカの血筋かい！」

「あん？爺を知ってるのか？」

「昔色々と、ね。そうかい夜帳の血は失せてないらしいね」

大御堂は何かを思い出すように何度も頷きながら少し離れる。その脳裏にあるのはどんな思いなのかは、本人以外には知りようもないことだ。

対して昼也としても少々驚いている。何せ自分の血縁である祖父の知り合いにこんなところで会えるとは思ってもみなかったからだ。

そう、彼の祖父の名こそ先代店主、夜帳旭（やとばり あさひ）なのである。

現遠月学園のトップである薙切仙左衛門の古馴染みであり、親しい仲だったらしい。昼也も深くは知らない。しかし、薙切一族と喫茶—mid night—の付き合いはそこから始まったものだった。

「それで？入寮希望の話は幸平創真しか聞いてないんだがね」

「……………ちよつと、厨房を借りたくて来たんすよ。ついでに携帯の充電もさせてもらえたらいいかなあ、と」

「なんだい、祖父が祖父なら孫も孫だね。揃ってコーヒー中毒かい。良いだろう、厨房は貸す。ただし——私の分も淹れてもらおうかね」

「まあ、借りる身分だしそれぐらいなら構わねえよ」

トントン拍子に話は進み、二人揃って厨房へ。ついていけなかった田所がオロオロしていたが大御堂が後ろ手に手招きしたことで、慌てて二人を追いかけるはめとなった。

さすがは料理学校の寮。設備は綺麗に整えられており、誇りの類いもなく、清潔感に溢れている。

そんな中で始めてきたはずの昼也は迷うこと無く進み、ある戸棚の前で立ち止まると

徐に戸をひらいた。中には市販のコーヒの粉が各社揃っていた。

一瞬、眉を潜めた昼也はそれらを全部取ると調理台に置き、スプーンは何処かと尋ねる。そして教えられた場所から一本持った。

見ている二人には何をするのか分からない。昼也は袋を全て開けると無造作にその中へとスプーンを突っ込んで中身を掬いドリツパーに広げたペーパーフィルターに落とししていく。その作業を何度か繰り返していた。

ここまで見れば分かるだろう。彼は市販のコーヒの粉をブレンドしているのだ。一度入れれば戻すことは困難であるために慎重に慎重を重ねるべき場面でありながら彼の手の動きに淀みは一切無い。

一分と経たずに準備は終わりを、いつの間にもやら用意していた適温の湯を薄く回し掛け、少し置き、そして周りから円を描くように静かにお湯を注いでいく。

するとどうだろうか。厨房には芳しい香りが充満するではないか。

嗅覚に直に訴え掛けてくるその匂いは高級アロマにも引けを取らないリラックス効果を嗅いだ者へと与えてくれていた。

田所も大御堂もはじめての経験だった。香りを嗅いだだけで涎が出そうになるコーヒー等出会ったこともない。

「ほれ、飲んでいいぞ。田所さんのもな」

そんな二人の現状など知らぬ存ぜぬ。昼也は一足早くコーヒーへとありついていた。一口傾け、吟味し、少し首をかしげて眉間にシワを寄せる。どうやら彼のお眼鏡には叶わなかったようだ。

不味くはないが、特別旨くもない、というのが彼の評価だった。しかし、そんなコーヒーに出会ったこと無い二人は違う。熱さも忘れて飲み尽くしてしまっている。

コーヒーの適正温度は60度から70度。上限を上回れば熱すぎ、下限を下回れば温い。今回の温度は61.4度。まあ、適温といった所の温度だった。

粉の分量、組み合わせ、お湯の温度、お湯の量、蒸らす時間、その他併せて彼の導きだした黄金比に則った上での1杯。

「まさか、旭以上の味に会えるとはね……………」
「美味しいです」

無くなつてしまったカップを見ながら大御堂は感慨深そうに、田所は嬉しそうな様子で感想をのべた。

そう、感想である。それも最も短く、端的にその1杯を言い表した感想。

昼也はそれを聞いて、徐にその場を動く。田所のカップにコーヒーを注ぎ直した。

驚く田所だったが、先程の美味しさをもう一度、と嬉々としてカップへと口をつける。

そして目を見開いた。

「味が違う……………」

先程も美味しかったが、こちらも美味しい。そして全く別のもののように味が変わってしまっていたのだ。

原因はお湯の温度の変化。今度は少し熱く、そして少な目に注いでいた。結果、味の変化が起きていた。

やはり嬉しそうに飲む田所。その姿を見つつ、昼也はコンセントに刺さった充電器に繋がれた携帯を見る。

夥しい量の着信履歴と、メールが表示されていた。

流星に状況の不味さを理解した彼はそそくさとコーヒーを飲み干して、着信履歴の一番上に出ている番号へと電話を掛ける。

一秒で出た相手にこっぴどく叱られたのは語るまでも無いことだった

十一杯目

遠月茶寮料理學園。

魔窟にして、弱肉強食の異世界。蹴落とすことなど当たり前。エリートの前頭でつかちが幅を利かせる狂気の世界。

「諸君ら99%は1%の玉を磨くための捨て石である」

本日は始業式という晴れの舞台なのだが——一発目から食の魔王が爆弾をかましている件について。

その言葉を顔を青褪めさせるもの、武者震いするもの、不敵に笑むもの等、様々だが、共通して皆がプレッシャーを感じていた。

さて、遠月の始業式は外で行われている。幔幕で周囲を囲いその中で開催されるのだが、非常に陽当たりが良い。周りに咲く桜からは柔らかな風に煽られ散った花卉が舞っており、ほんのりと甘い香りが漂っているように感じられた。

まあ、つまり

「……………」

眠気を誘う、ということだ。

案の定、睡魔にアツサリと敗北した昼也は幔幕の外に設けられた椅子に座り惰眠を貪っている。今更ではあるが、ある意味大物だ。

その隣の席に座るのは、ボケツとした表情の創真。彼がここに来たときにはけつこうえりなが荒れたものだ。

曰く、落としたのに何故居るのか、と。

堂々と見せられた合格通知に目を白黒させていたのも記憶に新しい。

ともかくにも時間も時間は進み、編入生の自己紹介——なのだが、そこで創真がやらかした。

「この学園の事は正直踏み台としか思っていないです。テツペンは俺がとるんでそこんところ、宜しくどうぞ」

後続の者の事も考えてほしいものだ。

案の定、返ってきたのは罵詈雑言のフルコース。まあ、プライドの高い相手に挑発を投げ掛ければこんなものである。

そんな爆弾をぶちかました当の本人はというと、罵詈雑言など、どこ吹く風と適当に聞き流していた。

そして次は昼也の番となる、のだがいまだに彼は夢の世界。コックリコックリ揺れながら目覚める気配はまるでない。

先程から何度も司会が読んでいるのだが、彼の耳には届かず起こすには至らない。流石に不味いと判断して、えりなと緋沙子の二人が彼を起こしにかかっていた。

どうにか最終手段の連続ビンタに至る前に昼也を起こすことに成功するのだった。

そうして、未だに半分寝惚けており、脳細胞の大半が休眠している昼也を舞台へと送り込んだ。

編入生の二人は自分達をなめているそれが在校生大半の感想である。

片方は大口を叩き、もう一方は半分以上寝ているのだから当たり前だろう。

「調べもんが終われば辞めるんで。それじゃ」

大欠伸をかまして、昼也は一礼すらすること無く軽く手を振ると、そのまま舞台から降りていってしまった。

数瞬の間が空き、そして先程の創真へと降りかかった罵詈雑言の非難の嵐に勝るとも劣らない嵐が吹き荒れるのだった。



料理学校の授業と言えば、やはり料理だろう。

「……………眠……………」

ヒソヒソと騒がれながら睨まれているにも関わらず、昼也は欠伸をかましながら眠たげに調理台へと寄り掛かっていた。

周りはコックスーツ等に身を包むなかで彼は一人、いつものバーテン姿だ。

その在り方がまた、エリート（笑）の彼らの神経を逆撫でしており、時間が進む毎にその悪感情は強くなり続けている。

「皆さん、揃ってますかー？」

険悪な空気漂う調理室。その空気を破るように入室してきた一人の女性教師。彼女が今回の授業の監督を務めており、専門はスイーツ。

そう、今回の授業は菓子作り。回りの生徒達もパティシエ志望の者が多くの割合を占めていた。

昼也がこの授業をとっているのは至極単純、相談したえりなや緋沙子、アリスに黒木場が薦めたためだ。

「本日は食後のデザートを一品作ってもらいます。調理時間は三時間程で良いでしょうかね。少し余裕をもって始めてください！」

教諭の言葉に一同調理へと取り掛かっていく。

そんな中で「一人」昼也はポケットとそんな様子を見ていた。

本来は二人一組になるところを彼が入ったお陰で、このクラスは奇数となってしまっ

た為に一人省かれた結果こうなった。

さて、三時間とは長いように思えてスイーツを作る際にはその括りには当てはまらない。

生地を寝かしたり、ジャムなどを煮詰める際、その他諸々、時間の掛かる行程が多数存在している。

さて、この物臭店主。はつきり言つて時間をかけることをあまり好まない。手早くできて、尚且つ手抜き感が出ないものを考え、動き始めた。

手に取つたのは、板ゼラチンとクリームチーズ。

チーズは常温に戻し、寒天は早めに並々と注がれた氷水に浸けておき芯までふやけさせる。

それと同時に、バターを湯煎にかけて溶かしつつ、その傍らで生クリームをかき混ぜ泡立て、きめ細かくなったら冷蔵庫へIN。

ここまでは下準備。次に取り出したのは厚手のビニールとビスケット。

ビスケットを袋へと突っこみ、口を閉めてガツガツと砕いていくのだ。

ここまででわかる人には分かるだろう、昼也の作るもの。

レアチーズケーキだ。材料その他、調理の時間を含めて、家庭でも簡単に作れる一品。そうこうしているうちに砕き終わったビスケットを型に敷き詰め、その上から湯煎し

ておいたバターを回し掛ける。そしてよく混ぜ合わせ、上からラップをかけて確りと固めればこちらでも冷蔵庫へIN。

後はチーズ生地。

先程常温に戻したチーズをボウルへ。よくかき混ぜたら、グラニュー糖、レモン果汁、サワークリームを入れて更によく混ぜる。

綺麗に混ぜたら、先程水戻しした板ゼラチンを湯煎で溶かして、そこに作ったチーズ生地を少量加えてよく混ぜて、元の生地へと落としこんで更に混ぜる。

むら無く混ぜたことを確認したら、最初に作った生クリームを、少量ずつ何度かに分けて加えつつ再び混ぜる。

綺麗に混ぜれば、生地を型へと流し込み、型の底を数度台に軽くぶつけて空気を抜く。暫く冷やせば完成となる。

本来、この冷やす時間は半日を目安とするのだが、如何せん今回は時間がない。故に冷凍庫にぶちこんだ。

冷えすぎる可能性もあるがそこは昼也の黄金比。最初のクリームチーズを出したタッピングから、混ぜる回数、入れるものの分量、温度、全てが予定通りに行われており、ここまでで凡そ40分で作業を終えていた。

周りでは未だにぱたぱたと動き回る生徒達が居るなかで、昼也は徐にコーヒーを淹れ

始める。

いっぞやの寮の一件のようにブレンドしたコーヒー。それを淹れる傍らで昼也はケーキに掛けるソースを片手間で作っていた。

イチゴ、グラニュー糖、レモン果汁の織り成すハーモニー。甘い香りが部屋に漂う。数分で完成したソースを器に移して、こちらは冷蔵庫へINして冷やす。

やつてゐることは市販のレシピと何ら変わらない。変わつてゐるのは、その割合を昼也の感覚で割り出したものを使つてゐることだ。

材料はそこらのスーパーで買い揃えられる。しかし、その味は彼しか出せない。

つまりは、誰でも作れる手順であるが、誰も作れない味を産み出す、ということだ。

そんなことは知らぬ存ぜぬの夜帳昼也。彼は暇潰しに淹れたコーヒーに舌鼓を打つていた。

◇ ■ ■ 実食 ■ ■ ◇

教諭の前に置かれた一枚の白い皿。中央にはレアチーズケーキの一切れが乗つており、その隣には小さめのミルクポット。中身は先程片手間で作つたイチゴソース。

そして皿の隣にはソーサーにのつたカップ。中身はコーヒー。それもサツパリとし

た味のケーキに合わせた特注のブレンドだ。

教諭の喉が自然と鳴った。この学園で教鞭をとってきた彼女だが、匂いでここまで期待させてくれる一品はそうそう御目にかかったことがない。

微妙に震える手で、フォークを取り、ケーキへと切り込み、三角の先の部分を切り取った。

柔らかな、しかし同時に確りとした感触。まずは一口。

数度噛み、そしてフォークを落としてしまった。同時に彼女の目から溢れる涙。

はじめて味わった言い様の無い旨味は、あまりにも鮮烈すぎたのだ。突然の事態に、生徒達も動揺が走る。

教諭は一度落ち着こうと、添えられたカップを手に取り、ブラックのまま、煽ると再び目を見開いた。

この教室に用意されていたのは、コーヒーマシンの粉だ。お高いやつだがやはり挽きたてには劣る品。

何種か常備してあるが好んで飲むようなものでもない。

だが、この一杯はどうだろうか。

コクと深み、しかし尾を引かない、少し酸味のある味。

一口で止めようとしていた筈が体が拒否してゴクゴクと飲み干してしまった。

ホツと息をつきカップを置き、今度は添えられたミルクポットからソースをケーキへと掛け、落としてしまったフォークを手にとつて、切り取り、頬張る。

幸せ。表情を見れば一目了然の幸せの表情を浮かべた教諭は瞬く間にペロリと一切れ平らげてしまったのだ。

気づけばフォークと皿が空しくぶつかる音が響くのみ。

お代わりが注がれたカップを再び手に取り、中身を味わい、人心地のついた教諭は目の前で気だるそうに立っている昼也に対して

「合格です。私がA以上の評価を下せるならば間違いないようにしている一皿でした」

「……………そりやどうも」

教諭の絶賛、昼也は肩を一度竦めると、自身の作業台へと戻つて片付けを行ない教室を出ていってしまった。

注目を集めるのは教諭の前に置かれた大皿に乗ったケーキの残り。

生徒の一人が許可を貰い、一口切り取る。それが呼び水となって結局、全員がケーキを味わうこととなった。

待ち受けるのは一時の幸せ、そして覆しようの無い圧倒的なまでの実力差。

全員が等しくそれを味わった一皿となってしまった。

その日、一年のパティシエ志望の生徒の一部が学園を去っていった。

彼らは知ってしまったのだ、圧倒的な旨味を持ったスイーツというものが存在するという事を。そしてその事実は自分達が何かを作る度に目の前に立ちはだかり決して越えることの出来ない壁として存在し続ける。

図らずも昼也は若い芽を叩き潰した結果を出してしまった。

しかし、本人はその事を知らない。知る気もない。彼の一番は自身の研鑽のみ。結果他人の心をへし折ろうとも、何の感慨もない。

そのせいで余計に面倒事が大挙して襲ってくるという事を昼也はまだ知らない。

十二杯目

遠月茶寮料理學園。

料理人以外から見れば、何もそこまでしなくても、と思われることもアツサリと行われる、まさしく魔窟。

そんな魔窟において行われる食の決闘と言つて良いものが存在する。

“食戟”

前述の暴挙が許可される根底にあるのが、これだ。この学園での対立は基本的に食戟によつて治めらる。

守るべきは3つ。

“正式な勝負であることを証明する認定員”

“奇数名の判定者”

“対戦者両名の勝負条件に関する合意”

上記を守った上で行われる食の決闘。気に入らなければ振じ伏せろ、である。

そして敗者に権利はない。食戟ではそれぞれが条件を提示しており、待ったは無し。

例えば、退学を懸けて負ければ学園を去らねばならないのだ。

『勝負あり！勝者、薙切えりな!!』

会場に響く、興奮と熱狂。彼等が注目する舞台ではえりなと巨漢の男が食戟を行つていたのだ。

アナウンスの通り、勝者はえりな。彼女は勝利が決まると直ぐ様どこかに電話を掛ける。

巨漢の絶叫。今回の食戟、懸けられていたのは遠月創設からあるちゃんこ研究会の部屋取り壊しとえりなの十傑からの辞退。

結果、ちゃんこ研究会の部屋は取り壊しとなった。

その一部始終を見ながら昼也は冷めた目でそれらを見下ろす。傍らには自前のコーヒーを入れた魔法瓶。

隣には緋沙子が居り、嬉々とした表情となっている。

「で？これを俺にしろつてののか？」

面倒という空気を隠そうともしない昼也はジトツとした目を緋沙子へと向ける。

これは明らかな面倒事だ。見ることですら面倒なのに、自分がその渦中に巻き込まれるなどたまつたものではない。

緋沙子はそんな彼へと一瞬目をやり、すぐに前に戻すと口を開く。

「えりな様のご指示です。遅かれ早かれ貴方は食戟を挑まれるだろう、と」

「はあ？何でだよ。俺が何かしたか？」

「……………昼也さん、貴方、スイーツの授業を受けましたか？」

「あん？お前らが勧めたしな。それが？」

「貴方の受けた授業では共に受けた生徒が少なからず再起不能に陥るといふ事態が多発しているんですよ。学園を去った者も居ますね」

流石に身に覚えがない。

そんな表情の昼也。

彼からすれば寝耳に水だが、学園内には水が地面に染み込むように、ジワリジワリとこの話題は広まっていた。

曰く、夜帳昼也と同じ授業を受けると心が折られる。

最初こそ鼻で笑うものが殆んどだったが、その噂を笑った何人かが実際に学園を去った事によりその噂は現実味を帯びて学園を席卷していた。

当然、エリート（笑）揃いの学園でそんな話が罷り通るなど彼等が許さない、が現実味があるために大つぴらに批判できない。

それでも我慢ならない一部が彼を排斥しようとする食戟を挑む可能性がある。

この説明に昼也は露骨に顔をしかめた。言わせてもらえば恨まれる筋合いなど無いのだ。ついでに言うなら、折れるなら勝手に折れる、俺を巻き込むな、と内心で毒つい

ていたりする。

「それに食戟には利点もありますよ？」

「いや、面倒事の時点で俺からすればマイナスなんだが？」

「貴方が勝てば自分が提示した条件に見合った対価がえられます」

「聞けよ」

いつも話を聞かない事への腹いせか、緋沙子は昼也の言葉をガン無視している。

少し不貞腐れるが、そこでふと、彼は思い至った。食戟をして勝てば一人部屋位なら確保できるのではなからうか、と。

ある意味間違いいはないが、確実に更なる火種を呼び込むのは明白なのだが、今の昼也はその事に気付かない。

思い付いたのは適当な研究会の部室をぶん取ること。今回のえりなのようにぶつ壊さずとも設備があれば良いため、後は部室を奪い取るのみ。

面倒事はごめんと言いながら、自分から火の粉を被りに行くスタイル。常日頃から頭を使わないから、安易な道へと踏み込んでしまい、リスクリターンを勘定できないのだ。

物臭ダメ店主がそんな悪巧みをしているとえりなが戻ってきた。彼女は眉間にシワを寄せて瞑目する昼也を見て首をかしげる。

「彼、どうしたの？」

「食戟の話をしてからこの調子ですな」

「そう……………昼也君？」

「……………ん？」

「いえ、どうだったかしら。食戟を見たのは初めてでしょう？」

「まあな。情け容赦ねえな、と思ったぐらいか。何つうか悪い顔してたぜ？」

「貴方に言われたくないわ。いつも悪い顔してるじゃない」

「してねえよ。素の顔がこれだ」

眉間を揉みほぐしながらため息をつく昼也。眠たげな三白眼と猫背、伸びた髪の影響で不良と間違われることが多々あるのだ。

「髪ぐらい切れば良いじゃない。それか、黒木場君みたいにバンダナか何かで髪を纏めなさいよ」

「似合わんだろ……………切るか」

「待つてください、昼也さん。まさか自分で切るつもりですか？」

「あん？ハサミでバツサリ切ればいい感じに……………」

「却下」

にべもなかった。近年稀に見る二人の凄みに流石の昼也も身を引く程度には驚く。因みに彼の人生のなかで散髪をしに床屋や美容室に行く、という選択肢は無かったりす

る。今までは祖父が切ったり、自分でバツサリが当たり前だった。

結果、超適当なザンバラ髪が基本なのだ。

しかし、しかしだ。料理人とはただ料理が作れば良いわけではない。創真の様に客の要望に答えることも必要であり、他にも衛生面も考慮せねばならない。

ここで昼也の身嗜みに戻るが、彼は基本的にパーテン姿。これは、まあ似合っているために問題ない。が、その頭はいただけなのだ。どれだけ綺麗に洗っているとさえどもザンバラ髪では不潔感が出てしまう。

「とりあえず、美容室ですね。予約しますか？」

「そうね……………いえ、薙切の専属を使いましょう」

「待て、本当に待て。髪の毛なんて……………」

「昼也君、貴方も高校生でしょう？料理をするものとして身嗜みはきちんとするべきよ」

「いや、俺は……………」

「こちら、カタログです」

既に悪巧み所ではない。頬が引き攣って、冷や汗が伝う。まさか料理以外でここまでこの二人が食い付いてくるなど昼也には予想も出来ていなかった。この事態に対処する方法など知るよしもない。

どうしたものか、と頭を捻っていると視界の端に何かが映った。

そちらへと目を向ければ、一人の男子生徒がこちらへとやって来るのが見えた。

「夜帳昼也！君に食戟を申し込む！」

男子生徒は昼也の目の前で止まると指を突きつけてそう宣言した。

突然の事態。キョトンと彼を見る三人。

ここでこの男子学生の説明を少しばかり。彼の名前は森武、アダ名はモブである。典型的なエリート（笑）であるがなまじ実力が中途半端にあり増長していた。

彼は始業式での昼也、そして創真のナメた態度を腹に据えかねていた。ついでに先程までの三人のやり取りを影から見えており、嫉妬していたのだ。

「まさか嫌とは言わないだろうな」

「……………んじゃ、嫌だつて言わせてもらおう」

「逃げるのか？」

「生憎と何処の馬の骨とも分からん奴に割く時間は、無い」

森の蟬谷に青筋が浮かび顔は赤く染まる。誰の目からも明らかに怒りの様相だ。

しかし、昼也は慣れたもの。というより先程までのえりなや緋沙子のお節介等に比べれば負の感情は向けられなれているのだ。

口が悪く、相手が傷つくことでも平気で宣い、地雷を踏み抜く。それが夜帳昼也という男。

「だいたい、何なんだ？俺お前の名前も知らねえんだけど」

「僕は森武！森グループの御曹司だ!!」

「へー」

鼻くそでもほじってそんなほどに気の無い返事。

そも、どこぞの財閥関係者など昼也からすれば見慣れた相手だ。彼の後ろでは緋沙子が小声で森グループに関しての説明を行っているが、聞けば聞くほどお粗末なものだ。典型的な成り上がりの、成金。プライドばかりが先行するタイプの、人に嫌われる人種。

既に昼也の目からは、疑問の色も失せ、冷めきつた冬空のよりも冷たいものとなっている。

それに気付かず、森は再度叫んだ。

「僕の全てを懸けて君を叩き潰してみせよう！」

「全て？」

「ああ！そうだ！僕がこの学園で得てきた設備を全てだ！代わりに君は退学を懸ける！」

森は致命的なミスを犯してしまふ。気付かなかったのだ。昼也の表情が歪に歪んだその瞬間を、見逃してしまっていた。

(鴨が葱背負ってやって来やがった……………!)

口元を片手で覆って隠した昼也の内心はこんな感じである。

少し後ろからその表情を見てしまった二人はその背に冷たいものが走る感触を覚えていた。そして、目の前の森に心の底から同情していた。

狼の前で肥太った角の無い羊など最早餌でしかない。骨まで齧り尽くされる事が確定してしまっている。

「因みに聞くが、設備つてのは調理室か？」

「ふつ、僕がその程度で満足するはず無いだろう？ 宿泊施設完備の調理棟さ！」

「そうか」

終わった。先程まで悪巧みをしていた昼也はこの千載一遇のチャンスを逃すほどアホではない。調理室と宿泊施設が同時に手に入れば安泰と言えるもの。彼の頭には既に勝った後の計画がうち上がっていた。

「良いぜ。その食戟受けよう」

「勝負は明後日。君はスイーツが得意らしいからね。今回はその土俵で戦ってあげるよ」

「……………で？ なに作るんだ？」

「ふつ……………林檎を使ったデザート！ これで決めようじゃないか！」

そう言って去っていく森。彼は自殺志願者か何かなのだろうか。真綿どころか極太の鎖で自分の首を盛大に絞めていったのだ。

林檎。そしてデザート。

作るものは決まっている。

「んじゃ、帰るか」



あれから時の流れとは、早いもので二日後、舞台の上では森と昼也の二人が向かい合っていた。

会場も満員御礼。彼等の目当ては昼也の実力の程と敗北の姿。一部を除いて、オッズをつければ森の圧勝という予想が出ていた。

残った一部、観戦しているえりなや緋沙子、更に二人から話を聞いたアリス、黒木場はひたすらに森へと同情や哀れみを向けていた。下手すれば料理人としての森武という男を殺しかねないのだ。殺られる側に同情するのは当たり前である。

二人の間に司会が立った。

『えー、本日の食戟。夜帳君が懸けるのは自身の退学！対して森君が懸けるのはこれま

で彼が得てきた設備の全ての委譲となります！」

歓声が上ががる。森は不敵に笑みを浮かべ、昼也は垂れ下がった長い前髪を掻き上げ、えりなから渡された黒のカチューシャで髪を留める。珍しく目がマジだ。

『それでは！双方調理台の前へ！』

歓声が収まり、二人はそれぞれの調理台へと立った。言い様の無い緊張感が漂っており、誰ともなく唾を飲み込む音がする。

『敗ければ全てを失う、食の決闘——開戦です!!!』

合図と同時に森は作業へと取り掛かった。彼が今回作るのは、林檎を用いたロールケーキ。用意した食材は全て高級品であり、自身の実家の力をフル活用して臨んでいた。

対して昼也は少しのんびりとした滑り出し。彼の食材は至って普通のそこらのスーパーで買えるモノばかり。主役的林檎ですら袋詰めで売られていたモノだ。

作るのはアップルパイ。生地は既に用意しているため、林檎の調理を行っていく。

まるで川の水が流れるようなサラサラとした音が響いた。

『な、なんとという手捌きでしょうか!?夜帳君的林檎を剥いて切り分ける速度が半端ではな—い!』

3分とかからずに林檎4つの処理を終えてしまい、後は煮込むのみ。食感を残しつ

つ、味は確り染み込ませて焦がさない。

会場に漂う甘く、芳醇な香りはそれだけで口のなかに涎を溢れさせる魔力を持っている。

既に野次は飛ばない、飛ばせない。この香りを嗅いでしまえば、確かな実力が垣間見えるからだ。

これに焦るのは対面で調理する森。彼の内心は言い様の無い焦燥と自覚していない後悔が渦巻いていた。せめて自分の得意な土俵ならば、と。そう考える。

だが、もう遅い。自分から吹っ掛けたのだ。時計の針は戻ることはなく淡々と進むのみ。それに合わせて調理も進んでいき、やがて、終わる。

『時間です！両者皿を前へ！』

出されるのはそれぞれ、見た目整い、綺麗なロールケーキと至って普通のそれこそどこその洋菓子店の店頭に並んでいそうな普通のホール型アップルパイ。

それぞれ三切れずつ切り取られ皿へと盛り付けられた。

『では！先ずは森君の、江刺りんごを使ったロールケーキから、実・食・です！』

ロールケーキはやはり重要なのは切り分けた際の断面だろう。味が良くともそこが崩れていると品として他人に出せたものではない。

今回の一品は均一に揃っており美しいモノだった。生地やクリームにも林檎を余す

ことなく用いており、判定員たちの評価も上々。

そこで漸く森にも余裕が戻ってきた。確かにあの匂いを嗅いだ際には焦ったが、出てきたのは普通のアップルパイ。用いた材料も比べるのが烏滸がましいと言えるほどの差がある。

勝った、と内心で昼也を嘲笑う始末だ。

判定員達も先程のロールケーキから一転、フツの一品に失笑気味。

それでも仕事だから、と嫌々ながら一口食べ、3人が3人、同時に目を見開いた。

先程ロールケーキを評していた時とは打って変わって、無言で一気に食べ進めていつてしまう。

シンツと静まり返る会場にフォークがぶつかると音だけが断続的に響き続ける。

一切れなど瞬く間に無くなってしまった。

「あー……………夜帳君」

「……………はい？」

判定員の一人がぼつが悪そうに昼也に声をかける。声をかけられた当人はいつ用意したのかコーヒを啜っていた。

「お代わりを、戴けると嬉しいのだが……………」

「勝手にそこから持ってって良いですよ。食ってもらうために作ったんで」

その一言が皮切りとなり、判定員達は一齐にアップルパイへと殺到した。既にその隣のロールケーキには見向きもしない。

あつという間にアップルパイは完売し、皿にはパイ生地屑の屑が辛うじて残るのみ。結果は誰の目にも明らかだ。森の顔色は蒼を通り越して既に白い。

『そ、それでは投票をお願いします！』

判定員の判定は——————。昼也。図上の画面に彼の勝利が映し出された。勝った当人がその事に興味が無さげなのは、らしい反応と言える。

コーヒーを楽しむ、それだけ。これで目的に没頭できる、という感想が辛うじてあるのみだ。

項垂れた森。だが、次の瞬間大声を上げて立ち上がると昼也の胸ぐらを掴み上げる。

「認められるか！この……この……この僕がお前なんぞに……！！」

「放せよ、負け犬」

「ッ！」

「お前が俺に挑んだんじゃねえか。勝てる見込みが有ったんだろ？ 負けたのは単にお前が下手くそだっただけじゃねえか」

見事にバツサリ。手を離されると昼也は歪んだ襟を正して首を回し、先程使っていた調理台へと近寄り二枚の皿を冷蔵庫から取り出した。乗っているのは先程出されたモ

ノと同じ普通のアップルパイ。

これは、えりなからのアドバイスだった。曰く、食って掛かられたときに黙らせる為に多めに作れ。三皿あるのは黙らせる用と自分が食べるための分が含まれているからだ。

「食えよ。それでも気にいらなけりや、次はお前の土俵で戦つてやる」

調理台に寄りかかり一切れ頬張る昼也は、もう一枚の皿を森へと押し出した。

少しの逡巡、そして森は食べてしまう。彼の中で何かが音をたてて崩れる気がした。

脳が、体が、この旨味を求めて止まらない。それ以外を放棄してしまう。

食べる量は増していき三分の一を食べ終わる頃には、森武という料理人は完全に根っこから壊されていた。

手掴みで食べるまで至り、そのまま糸の切れた人形のように、踞つて項垂れる。

それらを見ることなく昼也は片手に自分用のアップルパイを乗せた皿を持ち舞台を後にするのだった。

この日、この勝利は瞬く間に学園中を駆け抜け、多くの者が夜帳昼也という男に危機感を持ち、より一層強い敵意を抱かせる事となつてしまった。

その事を本人のみが知らない。

十三杯目

遠月茶寮料理學園。

一般人には理解の及ばぬ魔窟にして魔境。生徒間の蹴落とし合い等、日常茶飯事であり、殺伐とした名門お料理学校だ。

さて、そんな風に書いてはみたがやはり学び舎であることには代わり無い。普通の高校のようにイベントも多数存在している。

その一つに「宿泊研修」がある。

友情とふれあいの宿泊研修、改め無情のふるい落とし宿泊研修。その本質は玉の選別だ。石ころの大半がここで散る事になる。過去の宿泊研修では半分以上が退学となっているのだ。

そんな人によっては地獄の片道キップとも言える研修のしおりを傍らに、昼也は調理台へと向かっていた。彼の目の前には14種の世界のコーヒー豆が一同に介している。

大まかな種別として、コーヒー豆はアラビカとロブスタの二つに分けられ、その他にも在来種のティピカやブルボンと呼ばれる種も存在していた。

そこからさらに、産地で分かれ14種類。これらはそれぞれに差があり、巧く組み合

わせることが出来れば美味しいコーヒーとなるのだ。

「んー……………ダメか」

一口啜り、首かしげてノートへと書き込む。いつもなら気の赴くままに組み合わせメモなどとしたことの無い昼也にしては珍しい。

既にページは四ページ目。どのページにもビッシリとブレンドについて事細かに書かれている。

割合のミリグラム単位、お湯の温度、軟水硬水、お湯の量、蒸らす時間、そして淹れ方。

自分の中の黄金比を記したことの無い昼也からすれば面倒であり、そして新鮮なやり方だった。

因みにこのノート。彼からすれば単なるメモ書きだが、世の料理人に知れ渡れば大金を積み上げてでも手に入れたいと考えるものが出かねない程のモノだったりする。

そも、昼也にとつて微妙であるなだけで十分、いや、十二分に美味しいコーヒーなのだ。先程の用件を全てクリアせねばならないが、それさえ出来れば美味しい一杯を味わえるのだ。

彼がやっているのは魔法でも何でもない、単なる技術。技術は才覚にもある程度左右されるが、根底にあるのは本人の積み上げた経験にある。例えば、昼也の黄金比は幼少

からの長年の経験から来ている。例えば、えりなの神の舌は元より鋭敏だったが、その後の薊による虐待擬きの教育によって極限まで研ぎ澄まされたものだ。

どちらも長年の積み重なりから、今の結果を叩き出している。

「……………つと、トイレトイレ」

最後まで書き込んだことを確認し、ノートを閉じて昼也は軽い足取りで厨房を出ていった。コーヒーには利尿作用を促進させる効果がある。ついでに水分過多にもなるためトイレが近くなるのだ。

かれこれ四時間はブレンドに時間を割いている。そろそろ休むか、とトイレから厨房に戻り、そしてピタリと立ち止まった。

「……………中学生？」

「……………」

そこにいたのはぬいぐるみを抱き抱えた、少女。彼女は興味深そうに昼也の書いていたノートの中身を眺めていた。

集中しているらしく、昼也の呟きも、存在にも気づくことなく、ただただ無言でノートを読み進めている。

「……………お、」

「……………」

「おい、そこどけ」

「……………ッ!？」

漸く気づいたのか少女は口許まで抱き抱えたぬいぐるみを持ち上げるとノートを片手にズザザツツと後ろに飛び下がった。その目には猜疑の色が浮かんでいる。

少女の様子に面倒事の匂いを嗅ぎとった昼也は突っ込むことなく、出していた器具の洗浄と後片付けを行っていく。全て手洗いだ。

面倒ではあるが洗浄機などにかけて破損する方が更に面倒であるため粛々と洗っていく。十年以上はやって来た作業だ慣れたものである。

それに、洗浄よりも更に気を使わねばならない作業がある。

それはコーヒーの保管。密閉容器に入れねばならないのだが、他にも臭いが強いものの側には置いてはいけない、冷暗所であらねばならない、等色々条件があるのだ。

それらを守らなければ、酸化してしまい味が劣化、香りも弱まり、ニンニクなどの横に置いてしまえば、淹れた時にひどい目に合う。実際昼也はその禁を一度破っており、それ以来保存に関しては神経質に行っていた。

「うっし……………終わり」

手際よく全て片付けた昼也はサロンエプロンを外して伸びをする。バキバキと鳴る関節が長い間動いていなかった事を表していた。

ついでに響く腹の音。時刻はお八時。昼も抜いていた為に小腹が空く時間帯だ。作るのには面倒、しかし腹は空いている。

どうしたものかと考えるも、名案は浮かばない。いや、作れよ料理人とか突っ込まれそうだが、生憎と彼に料理人としての矜持は、無い。これっぽっちもありはしない。無い無い尽くしである。

「……………ねえ……………」

その声を掛けられて漸く昼也はここにもう一人が居たことを思い出す。

少女へと目を向ければ、彼女はぬいぐるみとノートを胸に抱いて昼也へと目を向けていた。

「これ、君が書いたの？」

「……………ああそうだが？」

「お菓子のレシピは？」

「俺はコーヒー極めに来てんだ、料理は二の次なんでね。菓子も同じくだ」
「……………変なの」

パサリとノートが調理台へと置かれ、少女はジト目を昼也へと向ける。心なしか頬が膨れており、見た目と相俟って幼児にしか見えない。

「つーか、アンタ誰だ？」

今更の質問。そも、ここは昼也が勝ち取った設備だ。所有者は彼となっており、少女は不法侵入となる。

「知らないの？」

「中等部に知り合いは居ないもんでね」

「……………」

「何だよ。ちよ、痛いっての！」

無言の脛ローキック。連打されれば誰だつて痛い。

案の定、声を荒げて昼也は脛を抑えて踞ってしまった。

そんな彼の前に少女はぬいぐるみを抱き抱えて仁王立ちし

「ももは高3よ、バカ」

「うっそだろ、おい」

「次はその股からぶら下がってるものを蹴り飛ばすわよ」

「鬼かよ……………！で、結局アンタ誰なんだ？」

「……………茜ヶ久保もも」

「俺は……………」

「知ってる。夜帳昼也。ももとおんなじパティシエだと思つてたけど」

「俺はバリスタだ。強いて上げるなら、だがな」

「何で遠月に来たの？」

「しつこい勧誘を受けたから、だな。面倒この上ない」

「でも、この前食戟をした」

「喧嘩売られたからな。ついでにこの設備もくれるって話なら乗らないわけねえだろ」

「……………変なの」

茜ヶ久保は一頻り昼也をジト目で見ると、踵を返して厨房を出ていってしまふ。

「何なんだ？」

ポツリと残ったのは昼也のみ。腹の虫が空しく鳴いていた。



「つて、事があつたんだが……………」

「昼也君、貴方茜ヶ久保先輩と知り合いだったの？」

「いや、初対面だ」

冷蔵庫に凭れる昼也と、日夜研鑽に努め、腕を磨くために調理台へと向かうえりな。

ここは調理棟（五棟目）の厨房。つい先日、ちゃん研の部室を潰して新たな調理棟の建設を始めているが、完成していないため二人は、ここに居た。

「茜ヶ久保先輩は遠月十傑、第四席に座る先輩よ。当代きつてのパティシエとして有名なのだけれど」

「……………十傑、ね。そんなお偉いさんが俺の厨房に何のようだったんかねえ」

「茜ヶ久保先輩はパティシエと言ったでしょ？ 貴方のアップルパイに興味があったんじゃないかしら？」

「レシピ通りに作ってるだけなんだがなあ」

ため息をつくその姿に、えりなはほんの少し苦笑いを浮かべる。

自身とて才能があり努力を重ねている。だが、この場のこの男はその更の上。

やっていることは基本中の基本。その基本に彼独自の黄金比を併せることで結果を出す。

勿体無い点は当の本人がコーヒーにしか興味を示さず、熱意をもって料理に向かわないところだ。同時にありがたいのかもしれない。

「……………今度の」

「ん？」

「今度の宿泊研修、昼也君は何か用意してるのかしら？」

「用意……………いや、特にはしてねえな」

「そう……………」

「あ、でも。研修って遠月リゾートだったろ？」

「ええ」

「なら、堂島さんに話し通して厨房を使えるようにしてもらうか」

「貴方の交遊関係って、変わってるわよね。同年代の友達は何人居るのかしら？」

「そりゃブーメランだ。えりなも友達居ねえだろ？」

「い、居るわよ」

「ダウト、目が泳いでるぞ」

暫しの沈黙、同時に二人はくつくつと笑い始める。

地獄のふるい落としはもう間も無く。

十四杯目

遠月茶寮料理學園。

魔境にして魔窟。蹴り落とすことなど日常茶飯事の世紀末の様相を呈する学園だ。

そんな学園だが、学校らしい行事も一応ある。

「……………」

バスの席にて顔面蒼白になりながらぐったりしているのは、コーヒー中毒の夜帳屋也。彼は乗り物に弱かった。

京都には新幹線で向かっていたが、その時は全力で寝る体勢を整えて、京都駅に着くまで爆睡することで凌いでいたのだ。

しかし今回はそれが出来ない。いつもの安眠セットを忘れてしまい、寝ようにも周りのピリピリとした空気が気になり、更に隣が——

「ちよつと寝ないでよ、昼也君。私が暇になっちゃうじやない」

「……………」頼むから寝かせてくれ……………」きぼち悪い……………」

「もぉー、この薙切アリスが隣に座ってあげてるのよ！少しは反応しなさいよ！」

隣が五月蠅いのだ。薄目を開けて確認すれば、ニヤニヤと悪戯っ子の笑みを浮かべた

アリスの姿。

彼女としては乗り物酔いが辛いのは分かるが、やはり構ってほしいというのが本心。それを伝えるのは気恥ずかしく、結局こうなってしまうている。天の邪鬼にも程があるというもの。

とはいえ、普通ならば好感度が急転直下で落ちていくところをこの男、アリスに対する負の感情は特になかったりする。強いて言うなら少々鬱陶しいという位か。

別にドMというわけでも、酔いが回復している訳でもない。

好きの反対は無関心とはよく言ったもの。基本的に昼也は他人に興味を示さない。故のこの対応だった。

補足するならば、昼也は別にアリスを嫌っていない。喧しいとは思っているが、昔からの付き合いだ。今更、気に入らないことの1つや2つで邪険にすることはない。

ただ、今だけは寝かせてほしいと思うのみ。

彼らの後ろの席はえりなと緋沙子、前は黒木場が一人で使っており助けはない。

昼也の預かり知らぬところだが、この席順はじゃん拳の結果。特にえりなとアリスのあいこは二桁をアツサリと越えるほどに白熱した展開をみせていた。

最後はやって来た昼也に気をとられたえりなが出し間違ひ、アリスの勝利という形で幕を閉じた。

「ねえ、ねえってばー！」

「……………ん……………」

腕を組んで、頭を窓ガラスに預けた昼也を揺さぶるも、色好い返事は返ってこない。乗り物酔いは経験者なら分かるが、かなり辛い。それこそ二日酔いに勝るとも劣らない辛さがある。程無くして魘されつつも眠ってしまった昼也。当然アリスは起こそうとするもその魘されっぷりに流石に自重せざるを得なかった。

しかし、これで終わっては苦労した甲斐がないというもの。

というわけでも、眠る昼也の頭を引っ張り自分へと寄り掛からせる。

一瞬むざがられたが、直ぐに青い顔で魘され、唸るその様子を見つつ、アリスも目を閉じるのだった。



遠月リゾート。富士山芦ノ湖を望む、絶景が楽しめる避暑地に建てられたリゾート施設であり。十数の宿泊施設を遠月リゾートというブランド名で纏めて運営している。

「おえっぷ……………うえ……………」

「……………大丈夫か？」

「……………無理」

そんなバカデカイホテルの前で、昼也は黒木場に肩を借りながら、空いた手で口許を抑えて蒼い顔をしていた。

二人から少しはなれた場所では美少女3人が横並びでその光景を見ている。

「昼也君、あんなに乗り物に弱かったのね」

「慣れれば大丈夫らしいですよ。慣れるまでが時間がかかるみたいですけど」

「家の車なら大丈夫なのはそのせいね」

話題は知っているようで知らない、幼馴染の話し。

「良くも悪くも夜帳昼也という男は大きく表情が変わることは殆んど無い。無愛想の仏頂面がデフォルトなのだ。当然、弱りきった姿など滅多に見せない。

だからこそ今回のこの姿は珍しく、それ故、話題にも上っていた。

「とりあえず、中に入りますよう。涼しい場所で休めば、昼也君も少しは回復するでしょう」

えりなが言い出し、5人は遠月離宮と呼ばれる施設へと入っていった。

中は遠月の名に恥じない、豪華絢爛。踏み心地の良いカーペット、豪華なシャンデリア、高い天井。

その中で大宴会場に生徒達は集められていた。そして、会場の隅に椅子を持ち込んだ

昼也はそこで某ボクサーのように真つ白に燃え尽きて項垂れているのだった。合宿の字も始まっていないというのに既に満身創痍、これを笑わずに居られるだろうか。

とはいえ、常時ならまだしも今は自身の首が賭けられたデッドレースの直前だ。余程の自信家、若しくはバカでなければプレッシャーに潰され周囲に気を配る余裕など無い。

だが、同時にこの男にも余裕はない。

今正に、ゲロるかゲロらないかの瀬戸際に、境界線上に立っているのだ。

お陰で会場奥のステージに立つ、教師の言葉も、そして今回のゲスト達の言葉も右から左に流れるどころか、入る前にシャットアウトされてしまう始末。

故に気付かなかった。DS眼鏡がすぐ目の前まで来ていることに。

「……………いった!？」

脳天に振り下ろされた一撃によって戻ってきた昼也。顔をあげれば顔馴染みが蟬谷に青筋を浮かべて立っていた。

「さっさと行け。お前一人だぞ、残ってるの」

「はっ……………あ、マジだ」

四宮に示されて辺りを見渡せば、残っているのは燃え尽きていた昼也と今回のゲスト講師達のみ。同級生達は皆、移動のバスへと向かってしまったのだ。

「この合宿前に居眠りとは余裕だな、てめえ」

「そう言う、四宮さんは元氣つすね。何か良いことでもありましたか？」

「んな訳ねえだろ。今回は……………」

「お久しぶりですね昼也くーん！」

「邪魔すんな日向子！俺が話してるだろうが！」

「そう言わずに、四宮先輩。ヒナコも彼と会えるのを楽しみしてたんですから」

「四宮、小さい男は嫌われるよ？」

「ルツセエぞ、水原ア！」

卒業生の集合絵。それだけで感無量とも言える図だが、その中で昼也は着物姿の女性に抱き締められて窒息しかけていた。タップするが拘束が緩む気配はない。むしろ女性喜んで更に抱き締める始末だ。

「もー、昼也くん。店を閉めるなら閉めるって言ってくださいよー。お陰で私、店の前で三時間ぐらい待つてたんですよ？」

「……………ッ！……………ッ……………」

「おい、日向子。昼也を今すぐ放しやがれ。窒息してるぞ。課題の前に殺す気か？」

「あれ？……………あー！ちゅ、昼也君が！」

ぐったりと白目を向く昼也をガクガクと揺らすのは乾日向子。日本料理屋 // 霧のや

“を営む女将。そして彼女の後ろで苦笑いするのはケツ顎が印象的なオーベルジュ”
テゾーロ”のシエフ、ドナート梧桐田。

少し離れれば、寿司 “銀座ひのわ”の板長、関守平。更にその隣には堂島の姿もある。
因みに四宮は水原との毒舌合戦に精を出していた。

「昼也君、早く君も行きなさい」

「……………ゲホッ……………関守さん、容赦ないっすね」

「君一人を特別扱いするわけにはいかないだろう？」

「関守の言う通りだ。君の武運を祈っておこう」

「……………うーす」

フラフラと覚束無い足取りで去っていく背中を見送る卒業生達。

彼ら彼女らは、喫茶店の常連なのだ。何より、彼が幼い頃より知る面々である。

その目は弟を見るようであり、子供を見るようでもある、そんな目。

何より、

『(アイツ、体力ないからなあ……………)]』

一同の内心が重なる瞬間だった。



『それでは、皆さん。揃いましたね?』

乾のその言葉に場はピシリと引き締まる。

一同の視線を集めるなかで、彼女は朗らかに微笑むと近くの椅子に腰掛け、お茶とお茶請けの柿の種を開けていた。

「私からの課題は、ここにある食材から作る日本料理のメインとなる一品を作ること。そうですね、シャペル先生の授業のペアでこの課題には向かつてもらいましょるか」

ざわめく生徒達。当然だ。食材や目指す料理が決まっているとはいえ、これは所謂ジビエ。いきなりそんなことを言われれば誰でも少なからず動揺するに決まっている。

細目にそれを見つつ乾は両のてを打ち合わせて開始を宣言した。

バタバタと出ていく生徒達。そんな中で

「ボツチの俺は一人でいいすかね、乾さん」

「まあ、仕方ありませんね。それから日向子お姉ちゃんと昔みたいに」

「呼んだことねえよ、乾さん。てか、メインに成って、尚且つ日本料理なら何でも良いんすよね?」

「その通り。あ、昼也君はコーヒーも出してくれると、私は嬉しいですねえ」

「……………」

無言で出ていく昼也。鼻を鳴らして辺りを見渡し、一点を見詰める。数度顎を撫でると、欠伸を噛み殺しながらそちらへと歩みを進めていった。

少し離れた小川では他の生徒達が釣りに四苦八苦している声が聞こえてくる。

それらを無視して進んでいけば、酷く面の凶悪な鶏が居る一帯が見えてきた。

鶏側からすれば昼也は敵として認識される。故に一齐に飛びかかるのだが、その尽くを彼は躲して進んでいく。

体力は無い。ならば補うには効率を上げれば良い。

最低限度動きながら、目当てのモノを奪取し、そのままその場を離脱する。理由としてはそれさえあれば昼也の思い浮かべる料理は完成するからだ。

ある意味面倒くさがりの彼らしい品。

調理場に戻つてくると、何やら二人組と創真、田所のペアが揉めている場に出くわした。

「何やってんだ？」

「よお！昼也か久しぶりー」

「あ、夜帳君」

「！夜帳、昼也……………！」

「誰だ？」

声をかければ、何故だか金髪に睨まれる昼也。彼には睨まれる覚えがないのだ。ついでにあることにも気づいた。

「その鴨、捨てるのか？」

「ん？うん。僕たちは終わっちゃったしね」

「んじゃ、もらって良いか？」

「別にいいよー」

譲り受けた鴨の残りど先程採ってきたブツ、更に調味料を幾つか持つて調理台へ。

いつものサロンのポケットから取り出すのは産みたての卵二つ。それを丁寧に布巾で吹き上げ、脇に置く。鶏の卵は総排泄腔という機能、字のごとく直腸と卵管の二つが繋り、ケツから出てくるのだ。表面には雑菌が付着していることもあるため拭かねばならない。

直ぐ様石鹸で手を洗い、次に取りかかるのは鴨の残りの後処理。これからする事には注意をせねば生臭さが後のものに多分に出てしまうのだ。

念入りに調べるのは血合と呼ばれる、死骸などの骨などにこびりついて残った血の塊。内臓に関しては元の持ち主である二人組、アルディーニ兄弟がソースで用いた為に最低限で済んだが、やはり血合残っており少なからず手が汚れた。

再び手を洗って、今度は寸胴鍋に水を入れて、処理した鴨をぶちこむ。後は時おり出

てくる灰汁を救いとりつつ、他の準備を進めていく。

用意するのは目の細かい複数の布巾。それからザルを幾つか。それらを組み合わせ、更に取り替えるのだ。

ここまで来れば分かると思うが、昼也がやっているのは出汁を取る行程、更に勘が良ければ何を作るのかも分かることだろう。

調理の最中、彼が止まることはない。今は何故だか何処から持ってきたのかサイフォンを用意してコーヒーの準備をしていた。

「いや、何でだよ!？」

「ん?何が?」

思わず創真が突っ込みをいれるも梨の礫。突っ込まれた昼也はキョトンと首をかしげて逆に不思議そうに彼とその回りで似た表情の面々に目を向けていた。

そうこうしているうちに、調理場に芳ばしい出汁の香りが漂い始める。

少し間をおいて、昼也は流しにボウルとザルを組み合わせたモノを用意してそこに鍋の中身を注いでいく。

そしてガラの残ったザルをとり、ボウルを先程組み立てた即席濾し器に通していく。

段を少しずつ進む毎に、出汁の色合いは明るくなっていき、一番したのボウルに到達することには黄金の色となっていた。

次に取りかかるのは卵。両手に一つずつ持って同時にボウルへと割りいれ、塩やその他調味料で味を整え少し混ぜながら、濾過した出汁を数回に分けて投入していく。

混ざり終えたことを確認し、今度は油をひいたフライパンを熱して、十分に温まった事を確認してから少しずつ、卵を流し込んでいく。

流して、巻いて、また流して、巻いて。これを複数回繰り返していけば、徐々に大きくなっていき、最後には綺麗な玉子焼きの完成だ。

そう、彼が作っていたのは玉子焼き。それもだし巻き玉子と呼ばれるもの。

出来上がった一品を皿へと盛り付けて乾のもとへと持っていく。

匂いを嗅ぐだけでもゴクリと唾を飲み込んでしまうほどの魅力的な一品に、乾含めて5人はその皿へと一心に目を向けていた。

「では、一口……………」

数個に切り分けられた玉子焼き。その一切れを更に箸で半分に分けて乾は口へと運び、数度の咀嚼、目を輝かせた。

嚙む度に溢れる鴨出汁の旨味と卵が織り成すハーモニー。臭みに関しても最初に血合等を取ったことと、濾したことにより殆んど解決しており、逆にうっすらと残った臭みは香りへと昇華していた。

一切れは直ぐになくなり、二切れ、三切れ、と箸は止まらない。

全部で五切れだったが、その五切れ目の半分を残して漸く箸が止まった。

「ちゅ……………夜帳君、合格です！」

「……………どうも」

既に興味が失せていたのか、合格通知を聞きながら彼はコーヒーを飲んでいた。その傍らには別皿に盛られた玉子焼きの切れっ端。それを茶請けにコーヒーを飲んでいたので。

ここでソワソワしているのはアルディーニ兄弟の弟と田所。特に田所は一度昼也のコーヒーを味わっている。彼が煽るカップをチラチラと何度も見ていた。

二人の様子に気付かない筈もなく、昼也は首を捻って、音を鳴らし調理台へと向き直ると、新たなカップにコーヒーを、空いた小皿に玉子焼きの切れっ端を乗せてそれぞれへと差し出した。

「いい、良いの?」

「チラチラ見られてりや、コーヒーも飲みづらいんでな。そっちの、えつと……………」

「イサミ・アルディーニだよ。それより良いの?僕も食べて」

「ま、あんたらのお陰で俺はジビエしなくて済んだしな。要らなきや別にいいが」

「いただきますーす！」

「わ、私もいただきます」

二人揃ってそれぞれ出されたコーヒートと玉子焼きに舌鼓を打つ。

創真はまだしも、これにはアルディーニ兄弟の兄、タクミ・アルディーニが苦言を呈していた。

「イサミ！敵からの施しを受けるのか!？」

「でも、兄ちゃん。お礼つてことだし。兄ちゃんも食べる？旨いよ、これ」

「な、いや、その……………夜帳昼也!」

「……………何だよ。言っとくがおかわりはもうねえぞ？作りたけりや卵とつてこいよ」

「な……………僕はそんなこ」

「昼也、卵つてどこにあつたんだ？」

「あん？どこつて……………そこ出て左曲がつて暫く行つたとこだ。鶏もいたぞ」

「そつか……………うっし、田所」

「……………ほっ……………!な、何、創真君」

「このメモの奴探つてきてくれ」

「え?……………うん、大丈夫だけど……………これつて?」

「とにかく頼むぜ!待つてろよ、昼也!アルディーニ!」

そう言つて、創真と田所の二人は大自然に飛び出していった。

二人を見送りつつ

「嵐みたいな奴っすね」

「そうですねえ。それよりも昼也君、私もコーヒー欲しいなーって……………」

「……………玉子焼き、食ったでしょ?」

「ケチー!」

二人並んで座る、乾と昼也はそんな緊張感の無いやり取りをしているのだった。

十五杯目

友情とふれあいの宿泊研修、改め、無情とふるい落としの宿泊研修。

気力、体力を根刮ぎ削るどころか決りとっていく、まさに地獄の五泊六日。

「あーあ、怠い……………」

目が死に、表情が死に、言葉が死に。半ばゾンビのようになりながらも、昼也は驚くべき速度で両手を動かして、5つのフライパンと一つの寸胴鍋を使って調理を行っていた。

これも課題の一つである。というのも、夜にへロへロになって帰ってきた生徒達を待っていたのはゴリマッチョの大集団。上腕大学のボディビル部と更にはアメフト部、レスリング部と食べ盛り筆頭の様な彼等の夕食を提供することが今回の課題。

「ステーキ御膳50食」それが課題の内容だ。しかも60分という制限時間つき。越えれば当然、退学である。

利点は50食同じ品を作り続ける点と既に何を作るか決まっており、レシピも提示されている所だろうか。

つまりは慣れさえすれば出来るものにはあつという間に終わらせることが出来る

いうこと。

昼也は効率的で尚且つ味を劣化させることなく、後は楽に終わらせる方法をとつていた。それがこの同時進行×6。

ステーキを焼くタイミングは態とズラス事で盛り付け時間も含めて間断無く焼き続け、味噌汁は所々混ぜることさえ忘れなければ量でカバーし付け合わせのサラダに関しては既に50食分盛り付け終えていた。

ズガガガガガガガツと音がなりそうな勢いで彼は機械的に作業を推し進めていき、開始から僅か15分。

「夜帳昼也！50食達成！」

会場最速で達成してしまつていた。

複数人からギョツとした目を向けられたが、黙殺。そんなことよりも、先ずは風呂である。

ここ、遠月離宮はリゾート銘打ち、更に富士山も近いことから温泉が沸いているのだ。昼也としても温泉は興味ある。何より夕食前に汗臭いのはどうにかしたいと思うのが人情というものだろう。

着替えの類いとタオルを突っ込んだ鞆を下げて風呂場へと向かう。

「昼也君！」

「……………ん？よお、えりな。風呂か？」

「ええ、人が集まる前に入ってしまおうかと……………昼也君もかしら？」

「まあな。ついでに汗臭い中で飯は食いたくない」

「……………私も一緒に良いかしら？」

「何が？」

「その……………晩御飯を一緒に……………」

頬に赤みを差させモジモジとしおらしいえりな。野郎ならば誰しもどもってでも、その申し出を受け入れる仕草だ。

しかし、昼也は動じない。並んで歩きながら、死んだ目を前に向けたまま暫く黙りこみ

「……………まあ、良いぞ。後で堂島さんに厨房借りる気だったし。自分で作るなら、尚良し」

そこは俺が作る、位言う所ではなからうか。

だが、えりなは嬉しそうな様子だ。彼女としては断られる可能性の方が高かったのだから、自分で作るとはいえ食事を一緒にできるだけで僥倖なのだろう。

暫く、合宿の事で話は盛り上がり、楽しく話していれば距離など無いようなもの。いつの間にか温泉の前に来ていた。

「それじゃあ、後で」

「おう」

それぞれの暖簾を潜って中へ。脱衣所の箆の一つに着替えやらを入れ、そして着なれたバーデン服も脱いで、畳んで箆の中へ。風呂の入り方は性格が出るといだが、このズボラ男、意外にも几帳面らしく。折り目正しくシワに成らないように丁寧にシャツなどを畳んでいた。

そしていよいよ、メインの風呂へ。引き戸を開ければ、立ち込める湯煙、温泉独特の臭いが立ち込めている。

だが、昼也の視線はそこには向かない。珍しく目を見開いて凝視するのは浴槽に腰掛けてストレッチをする筋肉達磨。下手したら先程のボディビル部の面々たちよりもゴリゴリだ。

「む？早いな、もう一人目が来たのか」

「……………何やってんすか、堂島さん」

「その声は昼也君か。ふっ、入浴中のメンテナンスは日課でね。そんなところにボーツと立ってないで、体を洗って入ったらどうだ？」

「……………そつすね」

促され、適当な洗面台の前に陣取り頭と体を一気に洗っていく。野郎のシャワーシー

ンなど需要無いためカットである。

濡れて垂れ下がった前髪を掻き上げて、昼也は湯船にドップリと浸かった。

「はあ……………ふう……………」

筋肉を弛緩させながら手足を伸ばし大きく息をつく。深呼吸と温泉の合わせ技の陰でだいぶリラックス出来ているようだ。

その隣に、もとの場所から少し移動した堂島もやって来る。

筋肉達磨ともやしっこ。並ぶとその差がより一層際立つというもの。

「もう少し体を鍛えたらどうだ？料理人は体が資本だぞ？」

「いや、俺はバリスタですし。それにコーヒーを淹れるのに筋肉はあんまし関係ないですよ」

「相変わらず、か。そういえば聞いたぞ、食戟をしたってな」

「……………誰から聞くんすか」

「総帥からさ」

「あの妖怪爺め……………余計なことを」

「はっはっは！あのお方をそう呼ぶのは君ぐらいだろうな！」

呵々大笑。堂島の声は風呂場の中で反響していく。

笑われた当人である昼也は若干顔をしかめるも堂島からすればそれすらも幼い頃か

らの馴染みの顔だ。頭をガシガシと乱暴に撫で、上機嫌。

撫でられた方の昼也は再び垂れ下がってきた前髪を掻きあげ直して、鼻まで湯船に沈んでブクブクと気泡をあげる。

再び笑う堂島。

その後、暫く沈黙が下りていたがそれは再び開かれた引き戸の音によって破られた。

「よっしゃ、風呂——お？」

「ふむ、今年の一年は優秀だな。もう二人目か」

「よう、幸平」

「昼也？俺より早かったのか？」

「話は後だ少年よ。そんな格好では風邪を引いてしまうぞ」

「う、うっす！」

やって来たのは創真だった。定食屋の倅として手早く作ることに慣れている彼にとつては50食作ることとは比較的やり慣れた作業なのだ。

そんな彼からして、昼也が自分よりも早く課題を終えていたことは予想外だったらしい。

手早く体や髪を洗って湯船に浸かると先客二人へと話しかけていた。

「いやー、一番風呂だと勇んで来たんすけどねえ。まさか二人も先に居るとは思わな

かったつすよ」

「はっはっは！悪い悪い。とはいえ昼也君は少々別枠と考えるべきかな」

「別枠？」

「難切えりなを知っているかな？」

「ああ、あのいけすかない……………」

「現遠月十傑第十席に座るあの少女と五分、あるいはそれ以上が彼だ。料理に傾倒していない事が残念でならない」

「……………堂島さん本人いること忘れてねえつすか？あと、幸平真に受けんなよ。この人見た目に反して人からかうのが好きな嫌な趣味してっから」

「にしたって早かったよな。どれくらいで作ったんだ？」

「……………15分？あ、そうだ堂島さん。厨房借て良いすか？コーヒーついでに晩飯作りたいんですけど」

「ふむ、ならば地下の厨房を使うと良い。人もあまり来ないからな。片付けさえ確りとしてくれれば使ってくれて構わない」

「ありがとうございます。んじや、人を待たせてるんで俺は上がりますね」

湯船から立ち上がった昼也。その背、腰の辺りに手の平程の大きさの切り傷があることに創真は気が付いた。

「その傷……………」

「ん？これか？ガキの時に少し、な。んじや、上がるぜ。逆上せるなよ、幸平」

説明する気は無いのか、後ろ手に手を振って昼也は風呂場を出ていった。

創真は堂島にも視線を送ったが首を振るだけ。

天井から降ってきた滴が水面を揺らすのみ、だ。



コポコポと湯が沸きたつ音を聞きながら小刻みに揺れるサイフォン見つ、昼也は椅子に腰掛け息をついていた。

風呂上がり、髪を掻きあげヘアバンドで留め服装は黒のジャージにTシャツ姿。

その近くには湯上がりで頬を上気させた浴衣姿のえりなや緋沙子の姿もある。

既に夕食は終えた。これから食後のティータイム、もとい昼也にとつての研鑽の時間となるのだ。

とはいえ、彼を除けば、えりなと緋沙子はこれから寝る時間。あまりカフェインを摂取してしまうと寝られる無くなってしまう。

そこで昼也が準備しているのもう一つの鍋の方。中身は牛乳。じっくりコトコト

温められている。寝やすくするならばやはりこれだろう。

程無くしてコーヒーは完成、ついでにホットミルクも出来上がった。

それぞれをカップへと注ぎ、更にホットミルクには蜂蜜とシナモンを加えて二人へと差し出す。

くいつと一口、ホツと一息。自然と息が零れる穏やかな時間。

「……………」

そんな時間のなかで昼也は眉間にシワを寄せた。どうやら納得の一杯では無かったらしい。とりあえず残りを飲み干して、サイフォンを洗っていく。

コーヒーには淹れる手段が幾つも存在しているのはご存知だろうか。先程のサイフォンしかり、その他にもネルドリツプ、ペーパードリツプ、パーコレーターに水出しコーヒー、馴染みのないものならばトルココーヒーに用いるジャズベ、どちらかという和紅茶に用いるイメージのあるフレンチプレス等もある。

どの淹れ方も一長一短。基本は粗挽き、細挽き等の粉の大きさによつて使い分けるところがベストである。

さて、次に昼也が取り掛かったのはネルドリツプ。

これは現在流通しているペーパードリツプの前からある淹れ方だ。

ネルとは羊毛織物を事であり、現在は綿のフィルターが用いられている。

このフィルターの利点はお湯との接地時間が長く、蒸らし時間を活かすことが出来、旨味や風味を上手く引き出す事が出来る事だろう。

欠点は手入れの面倒くささ。このネルは直ぐに臭いを吸収してしまうのだ。お陰で保管の際には水につけて冷蔵庫に入れ、定期的な煮出し洗いが必要になる。

しかし、その手間に見あった味を出せるため、紙の臭いがコーヒーに移るペーパーフィルターを敬遠してネルを使うコーヒー愛好家は多いのだ。

他のサイフォン等と比べて手軽に淹れられることも、魅力の一つだろう。

直ぐに薰り高い一杯は完成した。

飲む前に隣にノートとペンを用意していることを確認、そして口をつける。

ワインのテイステイングのように先ずは香りを、そしてほんの少しだけ口に含み、口内で回していく。そしてノートへとコーヒーのブレンドから感想、改善点まで含めて事細かに書き連ねていく。

アイランド式の調理台であるため、反対に回ったえりなと緋沙子はその内容を見せてもらうためにノートを覗き込み、驚いたように目を見開いた。

彼女等も研鑽のためにメモを取ることはあるが、コーヒー一杯にここまで書けと言われれば、無理だと言わざるを得ないほどにノート一ページにビッチリ書かれていればそれも仕方ないというもの。

「スゴいわね……………少し見せてもらっても？」

「……………ん」

最後まで書き上げ、昼也はノートをえりな達へと差し出す。

受け取った二人は穴でも空かんばかりに最初のページからじつくりと目を通し始めた。

ノートは書き始めたばかりであるため、十ページ程だがそこに詰め込まれた内容は価千金にも匹敵するかもしれない。仮に手順すべてをこなすことが出来たならば同じものを淹れることが出来るだろう。

これは昼也の持論である、レシピがあれば作れる、というものに起因する。

つまりはレシピ通りに作ってその味が誰でも表現できない、というのはおかしい、と彼は本気で思っているのだ。

だからこそ、このノートには事細かに、それこそ、お湯の温度や時間は小数点以下まで、混ぜる回数は正確に、分量に関して言えば小数点の第三位まで細かに記されている。コーヒーに関しては最早変態の領域に片足突っ込んでいる。

「昼也君、これはコーヒーの事しか無いのかしら？」

「ん？まあな。なんで？」

「いえ、貴方の料理のレシピも纏めているのかと思っただけよ」

「料理？いや、纏めるようなことはやってねえぞ。既存のレシピをなぞってるだけなんぞでな。まあ、アレンジが所々入ってるのは否定しないけどよ」

カップの中身を飲み干して、昼也は肩を竦めてみせた。何度も書いてあるが、彼の目的は至高の一杯を味わうこと。料理は二の次、三の次なのだ。当然、そんなもののために時間を割くことは限り無くゼロと言える。勿体無いというものだ。

「貴方がレシピ本を出せば料理界がひっくり返るかもしれないね」

「俺がそんなものに手を出すわけねえだろ。それより寝なくて良いのか？そろそろ10時だぞ」

「貴方は寝ないの？」

「せっかく、こんな良い場所で色々試せるんだ。暫く居るさ」

「そう……………また、明日ね」

「おう、おやすみ。緋沙子もな」

「疲労が溜まっている筈ですから早く休んでくださいね？」

「分かっているっての」

厨房を出ていく二人を見送り、昼也は更なる研鑽に勤しむ。

明け方近くまで、灯りが消えることはなかったのだった。

十六杯目

友情とふれあいの宿泊研修、改め無情とふるい落としの宿泊研修。未だに二日目でありながら雰囲気死んでいる生徒が多々居る。既に3桁にも至るような数の生徒達が退学になっていた。

夜遅くどころか明け方までコーヒー漬けとなっていた昼也も例に漏れず死んだ目で、濃い隈を作っている。いや、自業自得なのだが。辛いものは辛い。

「くあ……………眠……………」

大あくびをしている昼也。その隣ではいつものようにポケットとした様子の黒木場の姿もあつた。

この二人が並ぶと緊張感が休んでしまうから困りものだ。

アリスやえりな、緋沙子が居れば違うのだろうが、生憎と彼女等は別会場。突っ込みはない。

「ラツキーだったぜ、黒木場となら大抵なんとかかなりそうだし」

「……………だからって手え抜きすぎるなよ」

「分かって……………眠……………」

仕事しろ、緊張感。周りとの温度差が半端ない。

周りの同級生達は大人り小なり二人へと視線を送っており、殆んどが負の感情。

黒木場は中学時代はアリスの指示で実力を伏せており、昼也はやはり編入生ということとと食戟と授業で何人もメンタルをへし折った事から恨まれているせいだ。

二人はナメられている。そしてその事を二人は気にしない。外野の声では揺らがない。

暫く気の抜けるような会話を繰り返していた二人。すると、調理場の前の扉が開き、ショートカットの女性が入ってきた。

「水原冬美。お題は魚。ペアで一人一品作って持ってきて。制限時間は二時間ね。食材は前においてるのから持って行って」

それだけ言うくと水原は椅子に腰掛け体育座りの体勢をとった。

魚はやはり鮮度が命。何を作るにしてもそこが重要だ。一同それは分かっているため、押し合い圧し合い前へと殺到して魚を掠め取っていく。

ちやつかりボケコンビも食材の奪取に成功していたりする。

「何作る？」

「…………… 鮭は新鮮だからカルパッチョ。残りは」

「ペスカトーレか？」

「……………妥当だな」

まさかのこの二人、イタリアン専門の水原にイタリアンをぶつけるつもりらしい。因みに本来カルパッチョは生の牛ヒレの薄切りにチーズやソースを掛けたものであり、魚介系のカルパッチョは日本発祥だったりする。

二人にそれ以上の会話はなかった。黒木場はカルパッチョに昼也はペスカトーレへと取り掛かる。

どちらも目が死んでいるが、その手際は流石と言える。

水洗いされた鮭はあつという間に捌かれ、切り分けられ、その後ろでは鍋に敷き詰めるように魚介類がところせましと並べられていた。

「タッチ」

「……………おう」

昼也が手を挙げ、黒木場がそれに答えて叩き合わせて場所を入れ替わる。ついでに二人はそれぞれに見た目を変えた。

黒木場はファイアパターンのバンダナを。昼也はカチューシャを。

それぞれが着けることで雰囲気が変わり、目にも生気が戻ってくる。

今回の調理は黒木場がメインであり、昼也がサブだ。こと、魚を扱わせれば黒木場の技量はかなりのもの。少なくとも昼也より上。

故に魚介類を本格的に扱うときは黒木場、ソースなどを作る場面は昼也、といった風に自然と動いていたのだ。

「ソース！」

「あいよ、そつちのスプーンパス」

「そら。もつと速くやれよ」

「十分やつてんだろ。これも計算に入れてんだからよ」

言い合いながらも手は止まらない。もとより処理速度の高い二人だ調理をしながら、片付けを行うことなど雑作もない。

酸味のあるソースを手首のスナツプを利かせて振り掛け、カルパッチョは完成。ペスカトーレもほんの少し煮たたせれば出来上がるだろう。

ここまで凡そ一時間未満で到達していた。周りでは未だに四苦八苦しているもの達が居るといふのに、二人は後は皿に盛り付けて出せば終わりである。

「……………」

カチューシャとバンダナをとった二人は空気が抜けて萎んだ風船のように覇気が何処かへと霧散してしまっていた。さつきまで、それこそ調理中はかなりかつこ良かったというのにひどく残念だ。

仮にこの場にえりなやアリスが居れば惚れ直していたであろう。そして、同時に覇気

が抜けた二人に苦笑いしていたこと請け合いである。

そうこうしている内に料理は完成。それぞれが皿をもって前へと進み、水原の前に提示した。

「鮭のカルパッチョにペスカトーレ。私にイタリアンで来るとはね」

そう言いながらフォークを手に取り、先ずはカルパッチョから。

一口。フワリと爽やかな風が吹き抜けるような爽快感が水原を包み込む。魚、特に生魚だとその生臭さに敬遠するする者も多いだろう。

だが、このカルパッチョにそれは無い。絶妙に配合されたレモンとオリーブオイル、黒胡椒にケツパーによって生臭を感じさせぬようにカモフラージュしているのだ。

飲みこみ、次はペスカトーレ。

こちらは所謂漁師飯というものだ。日本で言うところのあら煮。タツプリの魚介類をトマトベースのスープで煮込むことによって完成し味付けも至極シンプルだ。

それ故に作り手の技量が諸に出る。おいそれと出せる品ではない。

水原は切り身を一口とり、口にはこんだ。

ホロリと解けるように崩れ、口のなかは旨味の濁流によって蹂躪される錯覚を覚えるほどの旨味の嵐。トマトベース特有の酸味を殺さず、トマトの甘味や魚介の旨味と解け合わせた一皿は見事と言うしかないほどのものだった。

下されるは

「合格」

二人は拳を打ち合わせた。



宿泊研修二日目、午後6時。本日の課題はこれで終わり。

各々が自由時間となるなかで、一人昼也は目と表情が死にながら目の前の光景を見ていた。

ここは遠月離宮の地下調理室。昨日昼也がコーヒーの為に借りた場所だ。

そして今、目の前では台を挟んで四宮と創真、田所のペアが向かい合っていた。

(どうしてこうなった……………)

彼の内心はそれ一色である。チラリと振り返れば堂島が、ニヤリとしてやつたりな笑顔を返してくる。

何の事はない。今日も昨日と同じように厨房を借りようとしたら、そのままここまで拉致られたのだ。

全身から解せぬ、というオーラがたらたらと流れ出していた。

「そして、今回は彼らに判定員を務めてもらう」

堂島が示す先には卒業生たち。そして何故か乾が椅子に縛り付けられ、首から「ただの観客」と即席で作られた札を下げていた。

「乾と昼也君の二人にはそれぞれ観客として居てもらおう」

(いや、要らねえだろ……………)

思つても口には出さない昼也は下がると乾の隣に椅子を持ってきて腰掛けた。

「何で俺も観客なんすかね」

「堂島さんも考えがあつての事ですよ、きつと」

「ここに連れてこられる迄の過程を思い出すと嵌められた気しないんすけど」

身も蓋もない会話をしていれば、目の前では調理が始まつていた。

やはり四宮の方が取り掛かるのも早く、作業効率も良い。

対して田所は緊張からか震えが止まらず、未だに調理に手をつけられていない。が、

そこは創真がフォローに入つて事なきをえていた。

メインは田所、創真は補助のみだが彼の経験に基づいた補助は目を見張るものがある。常に先の動向を見据えており全神経を張り詰めさせているのだ。

他人の調理風景をマジマジと見たことなど片手で足りるほどにしか見たことの無い昼也にとってのそれは新鮮なもの。得られるものも有無を抜きにしても面白い、といっ

た感想を持った。

補足をする、と、昼間の課題でみせた昼也と黒木場のコンピプレーも似たようなものだったのだが、知らぬは当人のみ。

「料理、ねえ……………」

前のめりになり膝に肘をつけて手を組んだ昼也の眩き。目敏く聞いていた堂島はその様子にバレないようにニヤリと笑っていた。

彼の狙いはここにあった。

少し前に昼也のコーヒーに足りないものは分からない、と回答した堂島だったが、彼自身に足りないものはハッキリと理解していたのだ。

「出す相手への思い」そして「一品にかける熱意」

なまじ才覚があるせい、若しくは本来の気質か、堂島から見ると昼也のそれは欠如していると言っても良いほどに欠けているものに感じていたのだ。

何より、やはりその才覚をこのまま潰すのは惜しい。

未だに合宿は二日目だが、乾、関守、水原の3人はそれぞれが監督した生徒の中でも昼也の事を高く買っていた。そこに顔馴染、というフィルターは存在しない。

気づくべきなのだ。自分がどんな立ち位置であり、どれ程非凡であるのかを。

「……………」

無言の中で昼也の手は所々ピクリと動いていた。視線の先には田所と創真の二人。

もし、自分があの場に立っていればどう動くか。らしくない、と思いつながらも、その思考は止まらない。

(手が遅い、俺なら……………いや、何を、あ、そこに火入れは二秒早い)

今までに思ったこともない、他人の調理風景への口出し。内心でのみだが、コーヒー以外に興味を示さなかった彼からすれば異常事態と言えた。

幼少期より知り合いの卒業生たちも彼の目に鈍くだが鋭利な光が宿るのを確認して、各々が薄く笑みを浮かべた。

そして、時は経ちそれぞれの料理が完成へと至る。

四宮が出したのはフランスの家庭料理、シユー・ファルシ。キャベツで肉や野菜の細かく刻んだ詰め物を包み蒸した一品。

それぞれの判定員の前に皿が出され、堂島、昼也の前にも出されたが、何故だか乾の前には皿はなかった。

「あれ?!私の分は……………」

「ねえよ。水原のでも分けてもらえ」

「いや、判定員の食っちゃダメでしょ。乾さん、こつちに。半分に分けましょう」

「流石、昼也くん!鬼の四宮先輩とは雲泥之差ですね!」

「……………乾さんって自分で首閉めていきますね。自滅に俺を巻き込まんでくださいよ？」

昼也は見ている。四宮の蟬谷に青筋が浮かび、少し持ち上げた手がゴキリときしんでいた瞬間を。

あれはアイアンクローの前段階。今は分からないが遅かれ早かれ頭を締め上げられること請け合いだ。

内心で戦々恐々としつつ、料理にナイフを切込み、半分へと分かつ。フワツと凝縮されていた香りが舞い上がった。

切り分けた半分を乾へと差し出し、昼也は更に切り分けた一切れをフォークで突き立てて持ち上げ、ふと、あることを思い出した。

「……………そう言えば、誰かの料理食うのは久しぶりだな」

彼は内心で思ったただけのつもりだったが確りと声に出していた。

周りが若干ながらの動揺をしていたが、それには気付かず、一口放り込んだ。

咀嚼、咀嚼、咀嚼、咀嚼、飲み込む。

他の面々も舌鼓を打ち、魔法にかけられたような味わいを堪能していた。

その中で、昼也の無表情は崩れない。調理が終えた時点で宿っていた鋭い光も失せていた。

完食する程度には氣に入ったらしく既に皿は空。咀嚼しながら思うのは食後のコーヒーが飲みたい、というもの。さつきまでの変化が消え失せいつも通りである。

次は田所。彼女が出したのはテリーヌ。七色に振り分けられ組み合わされたそれは虹を思わせる華やかな見た目だ。

今度は全員分の皿が用意されており、分ける必要はない。

そして昼也はフォークを入れる直前に薫ったある匂いに、少し驚いた表情を見せて、頬をほんの少しだが持ち上げた。些細な変化だ、誰も気づかない。

判定員の評価も概ね良好。七種のテリーヌの層と二種のソースの食べ合わせは客を飽きさせない。

実食を終えて判定。

田所と四宮それぞれの前に皿が置かれ、その上に判定員がコインを置くというもの。

結果は——三対零。四宮の勝利で幕を閉じた。

卒業生、それも元一席と進級すらも危うかった在校生ではやはり力の差は歴然。しかし、お開きになる直前、カチャリと田所の皿に乗せられる一枚のコイン。

置いた主は堂島。彼はチャリと昼也、乾の二人へと視線を送る。

カチャリと置かれる五百円玉。それが二枚、田所の皿へと乗せられた。

「何のつもりだ？ 昼也、ヒナコ」

思わずたじろぐような威圧感。しかし、向けられた二人は揺らがない。

先に口を開いたのは昼也。

「食べたい方に金を払うんすよね？ 久々に他人の作ったもの食いましてけど、俺はこっちを推しますよ」

「理由は？」

「気遣いを感じたんで。田所さんらしい一皿だと思いました」

「四宮も食べてみれば良い。俺もこちらの品を評価するからこそ投じたまでだ」

「……………」

皿を差し出され、渋い顔をしていた四宮だったが、渋々一部を切り取りテリーヌを口へと運ぶ。

感想として、指摘する部分は多々ある。技術も拙く、まだまだ発展途上もいいところ。だが、

「……………」

二口目に手が伸びる。思い出されるのは故郷的一幕。拙さの中にある確かな食べる相手に対する思いやりを感じ取れる。

「これは……………オールスパイス？」

オールスパイスは様々な種のスパイスの香りを代替できるためそう呼ばれる。

効果は臭み消し、その他にも

「消化促進の効果もあるから……………す、少しでもお腹にやさしい品を出せたら、と思つて……………」

消え入りそうな声ではあるが、確かな思いやりを伝えるには十分すぎるものだった。置かれるコイン。結果は四対三。逆転である。

もとより非公式の食戟だ、勝敗などあつて無いようなもの。

今度こそ解散となつて皆が厨房を出るなか、一人昼也は残つていた。

見るのは一枚の皿。それは田所が作ったテリーヌの乗つていた皿だ。

手を伸ばし、指先が触れ、少し撫でる。

彼は凡夫ではない、むしろ勘の鋭い方だ。それ故に堂島が何故自分をここに連れてきたのかも何となく察することが出来ていた。

「俺に、足りないもの……………」

何となく、指標は見えた気がした。

十七杯目

友情とふれあいの宿泊研修、改め無情とふるい落としの宿泊研修。

現在三日目。疲労も溜まってそこら中にゾンビ擬きが大量に出現してくる頃合いだ。

「……………」

『おい、マジかよ……………』

『あの手作業で、精密すぎる……………』

『早っ!?!』

そんな中で、注目を集めるのは二日目に見せた気だるさを完全に払拭して、マジモードとなった昼也。いつものバーデン姿にサロンエプロン、更にカチューシャをつけた彼は今もフルーツカービングを瞬く間に終えてスイカをバラの花束へと変貌させていた。

今回の課題は結婚式での果物を使ったデザート。

周りが一皿で悩むなか、彼は場から整えることにしたらしい。

テーマは“薔薇”。取っしておいた様々な果物を切り、場に添えてフルーツ盛り。

そして本題のデザートだが、三層構造のベリーケーキを用意していた。

クリームで一片の綻びもないように整え、その上にはチョコレートを使って作った薔

薇を添えていく。葉も同じくチョコレート。

更に側面にも絞り袋を使って薔薇を丁寧を描いていき一周、それを三段繰り返して完成となる。

今まで一度も気を配らなかつた見た目と、味に今回は細心の注意を払つてこのホールケーキとフルーツ盛り合わせは作り上げられていた。

「……………出来ました」

差し出された二つの皿と器。この課題を出した教諭としてはここまでの完成度の代物を出されるとは思っていなかった。

出すとすれば薙切えりなや薙切アリスといったエリートの二人。少なくとも目の前の夜帳昼也という少年がここまでのモノを出すとは予想外。

包丁を入れることすら躊躇わせる薔薇のアート。しかし、昼也は躊躇う教諭を尻目にアツサリと包丁を突き刺した。そのまま無造作に切り分けていく。

突然の事態だったが、食べるためには仕方がない、と納得させ切り分けられた一切れが乗った皿へと目を向けて、更に教諭は目を見開くこととなった。

何と薔薇の花処か葉の一枚すら傷ひとつつくことなく綺麗に一切れに収まっていたのだ。

無造作に見えての全て計算づく。側面の薔薇すらも傷ついてはいない。

切り分けた断面から甘酸っぱいベリーの香りが漂ってきていた。

切り分けられた一切れすらもフオークを入れることを躊躇わせる魅力が放っているが、教諭は意を決して切り込んだ。

ふんわり、シットリ、されど崩れず、ちようど良い塩梅。

一口含めば、3種のベリーの甘さと香り、酸味を感じ、更にケーキそのものをコーティングしていたクリームにはマスカルポーネが混ぜ込まれていたらしくしつこくない甘さをよりいつそう引き立てている。

至福の一時。次は薔薇のチョコレート。花卉の一枚一枚が丁寧に作り込まれており、芸術品にも見える。かじれば、ホロリと口の中でほどけ、やさしい甘さが口一杯に広がった。

「こちらでお口直しを」

更に出されたのはカップ。中身は香り高いコーヒー。今回は見た目に比べてさっぱりしているケーキに合わせて少し酸味を感じるものとなっている。

ズズツと嚼れば口に残っていた僅かな余韻も流され完全に口の中がリセットされた事が感じられた。

「合格です」

「……………どうも」

合格を貰い、しかし、昼也は満足な様子はない。慣れないことはするものじゃない、と内心で愚痴っていた。

というのも昨日の、ほんのちよっぴり起きた心境の変化に従って相手の事を考えて色々をやってみたのだ。

イメージの原型は創真の客の要望にできるだけ応える姿勢と田所の相手を思いやる動き。

合格は貰ったがなれないことをしているために肩が凝る。腕を回せばゴキリと鈍い音が鳴った。

余談だが、この課題昼也の後に提出した生徒達は上がってしまったハードルによって悉く不合格を食らい、彼は更に恨まれることとなった。



「夜帳昼也、80食達成!!」

宣言にどよめく会場。昼也は「8つ」のフライパンと大きな寸胴鍋の前で一息を吐いていた。

前回と同じく15分。今回の80食にかかった時間だ。

手際によさもさることながら今回は盛り付けや応対にも気を配っていたためにその表情はかなり疲れている。というのも今回の相手は来日して合宿していたインナーマツスルユニバーシティの人々だった。

彼自身の物臭に反して語学が堪能な昼也の元には長蛇の列が出来てしまい、ゴリマツチヨと面白くもないアメリカンジョークを立て続けに聞かされ見せられれば精神がズタボロになるというものだ。むしろ途中で顔面に鉄板をぶちこまなかつただけ良しとするべきだろう。

昼也は片付けを手早く済ませ、直ぐに会場を出ていった。目指すのは、風呂。といっても長々と浸かる気はない、他にも行く場所があるのだ。

その足取りはどこか楽しげなものだった。



夜10時。三日目の今日は何故か生き残っている一同揃って初日のように大宴会場へと集合させられていた。

皆が制服姿、勿論昼也もここにいた。

壁際に椅子を置き、その手に持つのは一冊のノート。所々、二色ボールペンを使って

色分けしつゝ何かを書き込んでいる。

「あ、あの……夜帳、君」

「……………ん？ああ、田所さんか。何か用か？」

いつの間にやら目の前に来ていた田所。彼女は何故だかオロオロとしており、昼也は首をかしげる。

「どした？」

「え、えつと……………昨日のことで」

「昨日？ああ、あれか。旨かつたぜ、久々に他人の作ったもの食ったけど、たまには良いもんだな」

「そっか……………それ、何書いてるの？」

「見るならどうぞ」

キリが良かったのか昼也は田所へとノートを差し出す。オズオズと受取り中へと眼を通していけば、そこに書かれているのはスパイスが混ぜ込まれたコーヒーのレシピだった。

それは飲む直前で入れたり、豆を挽く段階で加えたり、と多種多様。中には数種類のスパイスを配合したコーヒーのレシピも書かれている。

「す、凄い……………こんなに細かいところまで……………」

「まだ、試作品だけだな。スパイスなんて始めたばっかであんなに粗い。カレーならまだしもコーヒーだと配分が面倒だな」

スパイスが多すぎればブレンドが崩れ、逆に少なすぎればコーヒーの味と香りに負けてスパイスが死ぬ。

シナモン等の甘い系統ならまだしも、香辛料の類いまで混ぜ混もうとするとその難易度は跳ね上がるのだ。

現に昼也ですら最初の一杯は失敗して酷いものとなっていた。具体的には苦味と辛味、混ざりまくった二つの香り、合計四つのクアトロパンチで思わず頭を抱えてしまった。

あの味を思い出して、顔をしかめる。その時のレシピも確りとノートには記載されていた。

「山椒はダメだ」

「あ、あはは………」

ゲンナリと項垂れた昼也に田所は渴いた笑みを返しながらもその視線はノートに向いている。

昼也も咎めることなく天井を見上げて息をついた。

さすがに疲れている。自分に足りないものは何となく分かったが、それを確りと掴み

きれっていないのだ。

どうにも他人のために調理をしたりコーヒーを淹れたりすることに慣れない。元々、コーヒーを極めようと思ったのも自分のためだ。心境の変化が多少あれども、急に他人のために何かをすることには抵抗がある。

だからこそ出来る所から慣れるようにやっていた。このスパイスを入れたコーヒーもその一つ。つまり味のレパートリーを増やそう、ということだ。

確かにひとつの味を極めることは、昼也という個人を満たせるかもしれない。しかし、人の味覚は十人十色、好む味が違うように、感じ方にも差がある。どれだけ彼が太鼓判を押そうとも、嫌いな者は少なからず出るということ。

故の味の多様化。料理が発展してきた道を彼は辿ろうとしていた。

『全員注目。これから課題の発表を行う』

思考が重なりすぎて、船を漕いでいた昼也はその言葉によって現実へと戻ってきた。

そちらを見ればステージの上で、堂島が卵片手に課題を伝えている真つ最中。

『今回の課題はズバリ、“朝食の新メニュー作り”だ。ビュッフェ方式の提供、そして明日の午前6時より審査開始だ』

声にならない悲鳴。ひきつる表情。

ただでさえ辛いというのに、下手すれば今日は眠れないという死刑宣告。

皆が一斉にバタバタと宴会場を飛び出していった。

その中で昼也は彼らを見送り、大きく欠伸をして飛び出す前に田所に渡されたノートを片手で開き立ち上がる。

「随分と余裕ね」

「あん？………そうでもないさ。ただ、眠い」

「余裕じゃない。それより貴方は何を作るのかしら？」

「まあ、そこは追々な。えりなどうすんだ？」

「私も、追々、よ」

隣り合って歩きながら二人は厨房へと進んでいく。



「良い香りね」

「このところ、チョイと心境の変化があつてな。この合宿は真面目に終わろうと思つてる」

「そう………一口良いかしら？」

「ん。そつちも一口貰うぜ」

互いに朝の一品を交換して一口食べる。

先程から何度も繰り返してきたものだ。

「完成かしら？」

「完成だ」

「先に休ませてもらうわよ、緋沙子」

「は、はい！私はまだ、なかばですから………」

「んじや、明日の朝………いや、今日の朝？ん？んん？」

えりなに背を押され、昼也は首をかしげて厨房を出ていった。因みに今は12時を少し過ぎた頃。未だに周りは四苦八苦する中で余裕の二人だ。

「ねえ、昼也君。これから暇かしら？」

「いや、休もうぜ？明日6時開始なら………三時間つて所か？」

「用意に関してなら問題ないでしょう？少しで良いのよ」

「………何すんだ？」

「ふふつ——オセロ、よ」

「ええ………」

十八杯目

友情とふれあいの宿泊研修、改め無情とふるい落としの宿泊研修。

地獄の四日目の朝は————やっぱり地獄だった。

それぞれが複数の会場に割り振られそこで各自が考案した朝食をお客へと振る舞うのだ。

「……………最ッ悪だ……………」

その中で割り振られた調理台に突っ伏して昼也は項垂れていた。彼の回りの空気はドンヨリと歪んでいる。

ここはD会場、知り合いが居ないため思いっきり彼は羽を伸ばしていた。というのも、昨晚、というか朝食のメニューを作り終え、昼也はえりなに引き摺られてオセロから始まり、ボードゲーム各種に付き合わされていたのだ。

勝率は7：3で昼也の勝ち越し。当然負けず嫌いのえりなは再戦を何度も挑み、そして最終的には寝落ちした。

直ぐに寝ようと思っていた昼也は少々勝負に応えるためにコーヒーを飲んでいたのだが、カフェインの影響で寝るに寝られず、結果寝不足となってしまうていた。

試験の合格基準はこれから二時間以内に二百食を達成すること。

審査員は、食材の提供者とその家族。そして遠月リゾートのサービス部門と調理部門のスタッフたちだ。

ビュッフェスタイル、そして老若男女。更に「驚きのある卵料理」。先程の合格基準を含めてクリアするべき関門は5つ。

始まりの時間は徐々に近付き、そして、その幕は切つて落とされた。



どの会場も地獄（生徒の）と化しているなかで、やはり際立った者達が多数いた。

雑切えりな。彼女の品は「エッグベネディクト」。ポーチドエッグとオランダーズソース、カリカリのベーコンと仄かに甘く、口当たりの良いマフィン。

それらをバランスよく纏め、更に味に深みを与えてくれるカラスミパウダー。周りの客も根刮ぎ奪つていく、魅力ある一皿。

雑切アリス。奇抜な見た目の3つの形状の卵を象るもの。その独特な見た目と味により客が集り300食を越えようとしていた。

そして

「はい、追加です。押さないです」

D会場も波乱だった。

会場に満ちるのは出汁の香り、そしてそれと混ざり香ばしく漂うチーズの香り。

そして、一つの調理台の前に出来た長蛇の列。

昼也が作ったのは卵雑炊。それを二種類用意していた。

“キノコとチーズの卵雑炊”そして“梅卵の冷雑炊”

べちやべちやとしたイメージがありそうな雑炊だが、今回はサラリと食べられる。

出汁は基本的な鰹の出汁を利用してそこから調味料の味付けと、野菜から刻んだ人参、大根等を加え、水洗いした米を加えて一煮たちさせ、チーズを出来上がる直前で加え蓋をして暫く置けば完成だ。

冷雑炊は冷だしを使い、温かなご飯へと掛けて頂く一品。梅と紫蘇のサツパリとした風味が食を進ませる。

不幸なのは彼と同じ会場の生徒達だ。

この会場に入った瞬間から香る出汁の香りに誘われて客の大半を持ってかれていた。

今回の雑炊選択はここ数日で彼に訪れた変化の最も出ている答えだ。

ホテルのお客は老若男女であることは誰しも予想できる。そして朝には食欲がなく、少なめ、若しくは軽くて済ませるものが多いと彼は読んでいた。

しかしだ。余りにも軽く、腹持ちが悪ければ昼までもたない事も多い。

そこを考え、腹持ちがよく、尚且つ栄養バランス、そしてサラリと食べられる料理を考え、こうなった。

出汁の香りで客を集め、選べる、という点で客を逃さず、味で虜にする。

更に雑炊は狙い通り腹に溜まる。そしてネットの口コミで美味しい料理の情報が広まり、店に行列が出来るように口コミでどんどん広がっていく。

つまりは

「夜帳昼也。380食達成！」

列が途切れない、むしろ伸びている。本人の内心としてはいい加減途切れろよ、客！とか思っていたりするが、顔には出さない。

笑顔で蟬谷にオコマークが見えたりしているが気のせいだ。目が死に始めているが気のせいなのだ。

客が途切れない！食材が切れるまで調理台から逃げられない、ということになる。そして雑炊は一度に大量に食材を入れたりしない。

導き出される解、食材が切れない。

(し、死ぬ……………)

表現するなら、そう、息が限界で息継ぎをしようと水面から顔をあげた瞬間顔面に水

をかけられ、殆んど息が継げず、再び水に引きずり込まれる感覚に似ていた。

調理時間も殆んどないため、気が休まらない。他人のために選んだ調理はここまで自分の首を絞めるのか、と内心で昼也は戦慄し、悪態をつき、嘆いていた。

そして、田所や創真がかなり凄いことをしていた、と理解し同時に自分じゃ無理だ、と覚った。仮にこの人数が店に来たら、数年は閉める事態になりかねない。

厨房は戦場、ハッキリわかんかね。



『終了!!そこまでだ!!』

地獄の二時間は終わりを告げた。各会場でホツとした表情の者や、絶望した表情の者等多く、居るなかで完全に魂が抜けかけている昼也は椅子に座って天井を見上げ白目を剥いていた。

肉体、精神共に撃沈。もう一步も動けない。

燃え尽きた彼の背後にはお椀の塔。

“473”それがこの椀の数だ。温雑炊が251杯、冷雑炊が222杯。

こんなに出るとは本人すらも思っていなかった。実質、二つの朝食メニューを作って

どちらも課題クリアをした形になるのだ。

「片方で良かったかあ……………」

口から出た人魂がそんなことを呟いているが、少し減ったにしろ、この数に近い量が出さねばならなかった事には気付いていないようだ。

このまま寝てしまいたい所だが次の課題は四時間後。今寝てしまえば遅れること必至だろう。

「と、とりあえず……………風呂」

魂が戻ってきて、半ば死んだ目で立ち上がった昼也は厨房を出て自分の部屋へと向かう。その歩みはふらふらとしており幽鬼の如し。

そんなゾンビ擬きがホテル内を徘徊している時、堂島を筆頭とした監督官達は一室に集まって今朝の課題に関しての論を交わしていた。

「今年の一年は粒揃いだな」

「ええ、計407食を達成させた薙切えりな。大幅に時間を残しながらも380食を達成した薙切アリス」

「残り30分強で自身の技術により、魅せる事で200食を達成した幸平創真」

「他にも各会場で光る才能を見せつけたものはまあまあ居ましたね」

「後は、夜帳昼也。彼もスゴかった。卵雑炊でしたか？」

「あの会場は彼の独壇場だったな。香りが外まで流れていた」

各々が目をつけた生徒たちを挙げていく中でもやはり難切の二人や創真、昼也は中々の評価を得ていた。

「これは、今から選抜が楽しみになるものですね」

誰かが呟き、同意するように全員が頷きを返すのだった。



1日は突き抜ける矢のように過ぎていく。

四日目の朝に起きた地獄を抜けて生徒達は、一日を駆け抜け、泥のように眠り、そして今に至っている。

現在5日目の午後四時。ロビー集合を言い渡された生徒達は椅子に腰掛け燃え尽きて居るものもちらほら居た。

「……………はぁ……………旨い……………」

腰に下げたタイプの魔法瓶を片手に昼也はオリジナルブレンドに舌つづみを打ってリラックスしていた。あの朝食の一件から彼はスタイルを元に戻したのだ。

理由は単純に、合わなかつたから。慣れないことに頭を捻り、無駄に気を使い、他人

に合わせて料理を提供する。

ここまで神経を磨り減らしてまで何かをするぐらいならば、自己満足を叩きつける方が良いと判断していた。

そう決めてからは、ストレスの元も緩和され疲労も著しくは溜まらなくなった。むしろ、調子が良いほどのだ。

何より、結果が変わらないならば疲れない方が良いに決まっている。無駄に疲労が溜まらないお陰で夜の自分の目的を推し進めることも出来る。

確かに他人のために作ることも料理の根幹だろうが、自分が旨いと思うものを突き詰め求める事もまた根幹の一つということ。

昼也がとったのは後者だった。元より協調性など絞り出さねば出ない男だ。その道をとることは誰の目にも明らかな事だった。

周りへの被害は眼中になく、客には自分の味を叩きつける。長年染み付いたスタイルに戻るだけのこと。そして前までと違うのは、それを故意に押さえ付けて相手の要望を聞き入れる余地が有るところか。

つまりは柔軟に相手の言葉を聞きつつも、最初から無視をするのではなく、必要部分のみを切り取り自身の中へと取り込むということだ。

その結果の一つとして、今回のコーヒーが挙げられる。最初にアホみたいな失敗をし

たスパイス入りのコーヒーだ。

胡椒、シナモン、ナツメグ、カルダモン、生姜などを昼也本人が独自に組み合わせ淹れた一杯。モロツコや中近東ではポピュラーな飲み方なのだ。

これを昼也は日本人好みの味へと変えようとしていた。これはその一歩。完成形の味を知った上での改良をここから加えていくのだ。

ノートを目の前のテーブルへと置いて開き、スパイスの候補を一気に羅列していく。専門ではないため数はそれほどでもないが凡そ十数種類の名前が並ぶ。

辛味をつけるもの、香りをつけるもの、色をつけるもの。香辛料は大まかに分けてこの三つ。

今回使うのは前者2つだ。色をつける必要はない。

試行錯誤は前途多難だ。既存のレシピは既に完成されているものが大半であり、そこに何かを崩れると不安定な積み木の塔が崩れるようにアツサリと味が壊れてしまう。

そして、昼也はその困難を面白いと思っていた。少なくとも店に籠っていた時ならば変わり種のコーヒーに手を出そうとは思わなかった筈であり、仮に思ってもそれはもつと後になっていたかもしれない。

それは一種の余裕とも言えるもの。更に余裕が出来たことにより視野も広がる。視野が広がれば見落としにも気付くようになる。

「面白い……………」

ペンを持った手を口許に運びニヤリと笑う昼也。ハッキリ言つて不審者のそれである。だが、周りの目など気にしてはいられない。

元々他人に対して無関心なのだ。面と向かつて罵詈雑言を言われても響かない昼也が陰口ごときで知的好奇心を止める可能性など皆無である。

周りが見えていない。視線が追うのはノートの文字。思考するのはスパイスの組み合わせ。ガリガリと受験生の様にペンを走らせ

「……………イツデッ!？」

脳天に拳骨を落とされた。崩れる文字とジクジク痛む脳天。とにかく頭を抑えて上を見上げれば、頬がひくついた。

目の前に修羅が居た。

「ど、堂島さん」

「君のそういうところは暮にそっくりだな。少しは周りを見ることも重要だぞ？」

言われて見渡せば、既にロビーには昼也以外の生徒は殆んど居ない。首をかしげて探してみれば、皆が宴会場の方へ向かう後ろ姿を確認できた。

「これから、デイナーだ。卒業生達のフルコースを君達に提供する」

「成る程……………コース料理はさすがに経験無いですね」

「君ぐらいだろうな、そんな感想は。さて、早く行きなさい。直ぐにでも始まるだろうからな」

「うっす……………すんません、ノート預かって貰っても良いですかね」

「ほお、俺は構わないが、良いのか？これは君のレシピだろう？」

「別に疚しいことは何も書いてないんで。見られても困りやしないっすよ」

それじゃ、と小走りで駆けていく背中を見送り、堂島は暫くの逡巡の後、ノートを開くのだった。

十九杯目

友情とふれあいの宿泊研修、改め、無情とふるい落としの宿泊研修。

本日六日目、つまりは地獄は漸く終わつたのだ。

それぞれが思い思いに安堵の息をつくなかで一人難しい顔で昼也はコツコツとペンの頭でノートを叩いていた。

昨晚、フルコースを食べ終えて入浴、就寝と生徒達が休息に勤しむなかで彼は開放された厨房の一つでコーヒーの研鑽を行っていたのだ。

とりあえず十種を無作為に5つ取り出し、調査、そこからコーヒーを淹れて、味見、一種変えて淹れて、味見と何度も繰り返していた。

合計252通り。そこから更に分量を変えて調査する。

昨晚はその内、7通りを検証していた。少ないとも思われるかもしれないが、分量を細かく調整しなおしているとどうしても一つの組み合わせに時間を割かねばならなくなる。

一つの組み合わせで最低三杯は飲んでいたためもう、トイレで調査した方が良いんじゃないか?とか思ったりしていた。流石にそんなシユールなこととはしたくないため、

速攻で却下したが。

今悩んでいるのは次の組み合わせだ。ついでに胃に優しいレシピも考えていた。コーヒーのように刺激のあるものを飲みすぎると内臓が疲れてしまうための措置だ。

「流石にこの歳で粥生活は、なあ？」

嫌すぎる。今更ながら知り合いに料理人が多いこともあり、見聞を広めるためにも様々な味を知りたいと思っても粥しか胃が受け付けないとか、泣けてきてしまう。

因みに、胃に優しいコーヒーというのも考えたが、コーヒーの時点でダメだろ、という判断のもと取り消しとなった。

一般的に胃に優しいものは、味が薄く、柔らかいもの。そして食べ方は、焦らず、ゆっくり、少しずつ食べるのが前提となる。

「薬……………薬？薬……………薬、薬膳、か」

まさかの新ルート開拓フラグである。

薬膳は医療知識、取り分け漢方に関する知識が必須であるため昼也はこれまで手を出してはいなかった。単純に面倒だからだ。

知識を詰め込むには手間がかかり、その詰め込んだ知識を活用するには、それ相応の技術が要り、その技術を身に付けるには練習が必要となる。

都合三つに加えて時間がかかる為、ものぐさな彼は基本的には新技術の取り入れは行

わなない。それが停滞の一助ともなっているのだが、彼は目をそらし続けてきた。

「……………緋沙子に調合してもらうか」

そういえば薬膳のスペシャリストが居たわ、と思い至りうん、と首肯く。いや、何も解決していないのだが、とりあえず彼は胃腸を労ることに關して考えることをやめた。

再び考えるのはスパイスの調合。更にコーヒー豆の品種から選り直している。

コクがあるもの、苦味の強いもの、酸味が強いもの、その他に多種多様のコーヒー豆をブレンドし昼也の一杯は出来るのだが、日によつて混ぜる量が変わるのだ。

二、三種類のときもあれば、幼い頃は全種混ぜたこともある。因みにその時は先代店主に脳天を拳骨で殴られた。

他にも変り種ならばコピ・ルアク等も有名か。これはジャコウネコの糞からコーヒー豆を採取して、洗浄、精製して作られるものだ。希少であるためとてつもなく高い。少なくともそこらのコーヒー豆よりは高い。

とにかく、コーヒーのブレンドは奥が深い。数こそスパイスには劣れども様々な要因で味を変えてしまう為にその難易度はかなりのもの。

その奥深さが面白い。

どれ程経ったか、ガリガリと一頻りペンを走らせ、一息つくために魔法瓶を取つてそこで漸く彼は気がついた。静かすぎやしないだろうか。

辺りを見渡し、絶句した。

「デジャ・ビュ？」

無駄に発音が良かった。

誰も居なかった。人っ子一人居なかった。何てこつたい、天井である。

一人ぐらい声を、と思うかもしれないが一人ニヤニヤしながらペンを走らせる男に誰が声をかけようと思うだろうか。

何より、彼は学園きつての嫌われもの。元より狭い交友関係も相俟ってポツチなのだ。

結論、置いていかれた。本人は特に焦ること無く、ここから学園まで幾ら掛かるか程度しか考えていなかったりする。ついでに、乗り物酔いに関しても思い出し、歩いて帰るか、等とバカなことを考えてもいた。

何はさておき、先ずは帰る準備だ。ノートを鞆へと突っ込んで、ペンをポケットに差し、後は肩掛けの旅行鞆を下げ、鞆を持ってこれで終了。外に出る。

広々とした駐車場には一代の車も止まっていなかった。むしろ、清しい程にガラガラだった。空が眩しいほどに晴れていることが腹立たしい。

フロントに電話でも、借りるか、と踵を返し

「昼也君？」

「よう、昼也」

「……………何で居るんだ、お前ら」

雍切えりな、幸平創真、夜帳昼也。

この合宿でなにかと話題を集めた3人が一同に介していた。

「手拭い取りに行つたら乗り遅れてさ」

「私は……………忘れ物よ」

「そうか……………で、どう帰るんだ？」

「それなら……………」

「えりなお嬢さま、お出しできる車がちょうど一台……………そちらのお二人も乗り遅れた学生さんでしょうか？」

やって来た、スタッフの問いに創真は直ぐに頷き、昼也は若干頬をひきつらせて頷いた。



「……………」

車内は沈黙が支配していた。前は運転席に運転手が座り、助手席は創真。後部座席に

はえりなと顔面蒼白で眠る昼也。

最初こそ新しいブランドを考えていたのだが、車が動き出して5分とかからずにダウンした昼也はそのまま沈黙、寝落ちしていた。ここにはアリスが居ないため起こされる心配もない。

だが、隣のえりなは若干の不満顔だ。

創真が居ることもそうだが、昼也も沈黙しているために暇なのだ。

「昼也、寝てんのか？」

「……………起こさないでくださいね。彼、乗り物に弱いみたいなので」

「難切って昼也と知り合いなんだな」

「……………色々あったのよ」

「ふーん。にしたってスゲエよな。初日だし巻き玉子とか見てるだけでよだれ出そうだったし」

「彼と張り合うなら、直ぐにでも学園を追い出されるわよ」

「あ？何でだよ」

えりなの強い言葉に創真も振り返りつつ問う。彼は自身の父との経験からか自分よりも上の相手にも物怖じしない面があった。

そのせいか、正確に相手の力量を量り、汲み取る能力に欠けている。

つまりは昼也がスゴいことは分かるがそれ以上は分からない、ということだ。

「……………彼は言つてしまえば天才よ。それも類を見ないレベルの、ね」

「なんだよ、お前より上なのか？」

「……………否定はしないわ」

そう、否定はしない。神の舌を持ち、自身も研鑽と才能により実力者であるという自負があるにも関わらず、だ。

料理人の誰もが羨むような才を持ち、しかし誰もが求める道を進まない昼也。

彼が進むのは正道ではない。邪道とまでは言わないが、自分の前の壁を蹴り壊して無理矢理進むような強引さがあった。

「ほぼ確実に、彼は選抜に選ばれるわ。君とは大違いね」

「選抜？」

「そんなことも知らないのかしら。『秋の選抜』と呼ばれるものよ。一年の選ばれた生徒達が食の重鎮たちに腕を振るう、美食の祭典」

「……………あ、あの黒スーツとかか？」

「既に選定は始まっているの。合宿はふるい落としの他にもこつちの意味あいがあったのよ」

選抜に選ばれるのは60名。全体の凡そ十分の一という所だ。望む望まないに関わ

らず、実力の有るものは選ばれる。

「……………ぐぬ……………」

「ツ!？」

車が揺れた。その反動で昼也は横に倒れ、えりなの揃えられた膝へと頭が乗った。

先程までのキリッとした空気はどこへやら。頬を染めて慌てるえりなは何度も自分の膝と、彼の頭が元々あつた位置とを交互に何度も見やる。

ハッと気づいて前を見るが、既に創真は夢の中、運転手も特に言及はしてこない。ゴクリと喉がなった。

恐る恐る、手を伸ばし彼の髪へと触れる。

「……………柔らかい」

思ったよりも柔らかかった。若干癖毛なのか手櫛を通せば少し引つ掛かるがそれもあるりと解ける程度。未だに顔は蒼いが、撫ではじめてから艶されなくなったのか唸り声は収まっていた。

「……………」

小さな呟き。それは寝言だったが、えりなは確かに聞いた。表情はほんの少しだけ暗くなった。

二十杯目

喫茶—mid night—

ここ最近店主が離れた高校に行ってしまい、休業していた隠れた名店。

本日、久方ぶりに店内に明かりが灯っていた。

入店して出迎えるのは、店内に染み付いたコーヒーの香りと、ほんのり聞こえる蓄音器からの飛び飛びのクラシック。

カウンターの内では休業前と同じく揺れる安楽椅子に腰掛け、膝掛けを掛け、本を読みながらコーヒーを啜る物臭店主の姿があった。

いつもの姿、いつもの光景。しかし、いつもと違うものがあった。

コーヒーカップの傍らに置かれたノートとペンだ。そして読んでいる本も漢方やスパイスに関するものばかり。

更に、厨房からは何やら独特な薫りも漂ってきていた。嗅ぐものが料理人なら直ぐにわかる香り。

カレーの香り、それも葉膳カレーの香りだ。

本日の喫茶—mid night—にはいつもの『本日一杯』の他に『気紛れの—

品』が加えられていた。

というのも、遠月に通うようになってから足りない何かを探すために、ちよくちよく、コーヒー以外にも手を出し始めており、今回の試みもその一部。

悪く言えば、常連に毒味……いや、味見させようということだ。そう、薊とかなら食べさせていいだろう、とか考えていない。

そろそろ、かき混ぜるか、と昼也がぼんやりと考えていると、入り口に申し訳程度につけられた鐘が鳴った。

入ってきたのは黒ずくめの男。病的に白いはだと、死んだ目が印象的な酷薄な雰囲気。の彼はツカツカと店内を進み、昼也の斜め前のカウンター席へと腰を下ろした。

そして、空気が抜けた風船のようにカウンターへと突っ伏する。

「……………生憎と葬儀サービスはやってねえぞ」

「……………毎度思うけど、君は僕に辛辣すぎないかな？客だよ？」

「客なら何か注文しろよ。さもなくて去ね」

「そこまで嫌いなのかい!？」

「好きか、嫌いかなら……………」

「……………娘には嫌われるし、息子のような子にはなじられるし、厄日だ」

突っ伏した薊は深々とため息をついてカウンターにのの字を書いている。キャラド

うした、おっさん。

昼也は薊の前にソーサーとその上にコーヒーを満たしたカップを置いてキッチンへと向かう。

遠月で得た設備に比べればネコの額程の厨房だが、設備は十分。そしてコンロの一つにラーメン屋にありそうな寸胴鍋が設置されており、蓋の隙間から漏れ出す湯気と一緒に芳しい香りが漂っていた。

鍋に近付き、ふたを開ければ、モワツと湯気が立ち上ぼり、先程とは比べ物にならない香りが厨房に満ち、溢れた分が店内へと流れ出す。

当然、コーヒーを啜っていた薊の元にもその香りは届いていた。

程なくして、昼也は麦飯と葉膳カレーが半々に乗った皿を「一枚」持って戻ってきた。そのまま、安楽椅子に腰掛けると持ってきたスプーンでそれを食べ始める。

「ちゆ、昼也くん？」

「……………」

「あの、僕のぶんは……………ろ、露骨に嫌そうな顔をしないでくれよ!」

「おっさん、金」

「ま、前払いなのか。因みに幾ら……………」

「……………1500」

「ぼったくりじゃないか!」

がたりと立ち上がった薊だったがその目はカレーへと注がれている。美食至上主義の彼だが、その彼の目から見てもこの皿はかなりの完成度に見えたのだ。味わいたいと思うのは人の性。

暫くのにらみ合いの末、薊は懐から財布を取り出して1500円をカウンターの upper と置いた。

「ハ、これでいいんだね?」

「……………」

返事としてスプーンで厨房を指す。

「ま、まさか自分で注げ、と?」

「……………」

「僕客だよ?え、マジ?」

「キャラ壊れてるぞおっさん。それが嫌なら金回収して帰れ」

「ぐ、普通料理人なら他人に厨房に入られる事を嫌うんじゃないのかい?」

「生憎と俺はバリスタだ。料理人の教示なんぞ知らん」

「ぐぬぬぬ……………」

この店ではいつもは見られない薊切薊を見ることができ。しかもどこぞのコメ

ディアンのような反応を見せてくれるのだ。

薊はやがてため息をつくくと、足拭きマットで靴の汚れを拭い、上着その他を脱いでシヤツ姿になると、厨房をへと向かった。

小綺麗な厨房だ。むしろ、汚い厨房など足を踏み入れたくもないが、とにかく綺麗に掃除され、食器やその他調理器具も決まった位置へと直されている。

いい香りのする寸胴鍋とそのとなりでうつすら湯気をあげるお釜へと薊は近付きふたを開けた。

彼も遠月の卒業生だ。その香りのなかに数十のスパイスや漢方が混ぜ込まれている事を嗅ぎとった。

隣のお釜にはつやつやに炊きあげられた麦飯。

本来面倒臭がりの昼也ならば炊飯器に頼るところなのだが、今回は手間のかかるカレーを作っていた為に、ついでお釜を引っ張り出してきた次第だ。

実はこの店舗兼自宅であるこの建物には多数の掘り出し物があったりする。

前に一度、夜帳の家は金持ちから没落したと書いたが、その際にご先祖は借金があるくせに幾つかの家宝を手放さずに残していた。このお釜もその一つで、かなりの年代物だ。

普通はコンロ対応では無いのだが、そこは特に気にしない。穴が開けば捨てるだけ。

だいたい、このお釜、家宝などと書いたが、丈夫なだけの二束三文の品なのだ。

他にも全く切れない刀や雨に濡れたのか、墨が流れてしまっている墨画、端の欠けた皿やら。

本当に家宝かよ、と言われそうなものが多数あった。

捨てられないのは先祖の血のせいか、それとも単に面倒だからか。まあ、昼也がその事を知り合いに問えば九分九厘後者だと断定されるのは明らかなのだが。

とにかく力作？を皿によそって薊は厨房から席へと戻り、スプーンで切り込んだ。

麦飯と薬膳カレーの丁度境目を掬い取り、少し冷まして頬張る。

「これは……………」

バランスという不確かな足場の上に立つ旨味という柱。具材の大半が見えないと思っていたが、このカレー、水を加えずに野菜の水分で作られているらしい。

結果的に具材の大半が溶けてしまつて殆んど原型を留めていないが、カレーの旨味や深みを増しており、なんとか飲み込むのが惜しくなつてしまふ、そんな一口。

いや、まだあるから良いだろうと言われそうだが、飲み込み次の一口を含むまでの間が辛いのだ。

そんな薊の内心など毛ほども興味はない昼也は既に完食しており、ノートにスパイスの配合や漢方の組み合わせを書き連ねていた。

弊害と言つてもいいのか、昼也の普通はレベルが高すぎる。

この薬膳カレーも薊が「餌」と評さない時点で相当のものであり、そこらのカレー屋に持つていけば、店主のメンタルをへし折りかねない一品。

それを無表情で何の感慨もなく食せるのだ。そして彼は自称バリスタ。相手が料理人ならば自分と同格、若しくは上の味を求めてしまう。

つまり、お前ら料理人だろ？何で俺より不味いんだ？ということ。へし折る所か粉碎しに來ている。しかも当の本人は無自覚。質が悪い。

「……………」

食べ終えた皿を見下ろし、そして薊は昼也を見る。

惜しい。本気で料理に打ち込むならば、今後の計画に加わつてほしいほどの逸材。

しかし、だ。真面目に、それこそ土下座して頼もうが、有り金全部を積み上げようが、にべもなく断られ、コーヒー顔面に叩きつけられ、店を出禁にされ、キャラをかなぐり捨てて泣き叫ぶ自分が見えるのは何故だろうか。

長年の付き合いからの経験則による未来予想なのだが、さすがに泣きたくなる。自分分つて結構高い地位持つてる筈なのに、一喫茶店の物臭店主に頭が上がりないというのは情けない、というか空しいというか、うん。

「……………」何だよ

「……………いや、僕って人望無いなあ、と」

「ああ、おっさん、性格悪いもんな」

「……………君に言われたくないよ」

「言われたくないってことは自覚ありだろ」

昼世のカウンターに薙は沈められた。舌戦で勝てた試しが無いくせに挑むからこうなる。

因みに昼世も自分の性格は悪いことを自覚している。その上で直す気は無い。通算76回目の敗北を薙は刻むこととなるのだった。

二十一 杯目

秋の選抜。

それは選出された60名での料理の祭典。A、B二つの組に別れ、そこから更に勝ち上がった者達が本戦へと出場となる。

選ばれるだけでも相当だが、選ばれた上で粗末な品を出せば、その時点で料理人として終わった、ということになってしまう。むしろ、選ばれない方が気楽であるのだ。

「というわけで、選抜出場おめでとう、昼也君」

「……………断つて良いか？」

えりなからの言葉に、しかし昼也は難しい顔だ。いや、難しいというか、面倒臭い、という顔だろうか。

既にコーヒーの匂いが染み付き始めている、遠月の厨房が彼の試飲の数を物語る。ついでに臭う、強い漢方の香り。

ここ最近、カフェイン中毒をpushさえ付ける、漢方スープにも手を出していた。

一般的に、カフェインを取りすぎた場合は水などを多く摂取して体外への排出を促すことが前提となるが、昼也は漢方の組み合わせでそれを補おうと言うのだ。

「だいたい、選抜とか興味無いんだが？何だつて俺がそんなのに選ばれんだよ」

「選抜は実績による決定よ。貴方の今までの事を思い出してみれば良いじゃない」
「今まで？」

オムレツ、迷子、コーヒー、編入、ケーキ、食戟、合宿。

思い返せば、濃かったなあと思わないでもない。そしてやはり自分が呼ばれる理由がわからない昼也。首をかしげて、新たなブレンドに手をつけている。

「……………はあ……………貴方の授業成績と、食戟での結果、そして合宿での高評価。それだけあれば実績として十分でしょう？」

「……………え、マジ？」

合宿は分からないでもないが、他には身に覚えがない。食戟はあの一回以外はやっておらず、授業もちやっちゃと終わらせて、教室を出た記憶しかなかったからだ。

だが、彼は知らないことだが授業は大半A判定、食戟も完勝。そんな結果を残していた。結果としては十分だろう。

「面倒臭い……………」

単純に面倒臭い。昼也の内心はそれ一色。ブツチしても良いのではと思わないでもないが、したらしたで面倒臭い事に巻き込まれそうな気がする。

既に脳内では面倒臭いが、ゲシユタルト崩壊しそうな勢いだ。

そんな死に目の彼だが、手は止まらず新たな一杯を完成させていた。そこに投入するのは、バター。所謂、バターコーヒーというやつだ。別にダイエットをする気は無い。昼也はもやしつこだが、贅肉の類いは付いていないのだ。

程よく溶けたことを確認して、一口啜る。

バターの香りとコーヒーの香り。深みが増す、というかマイルドというか。

少なくとも、昼也としては苦手な味だった。眉間にシワを寄せて一気に飲み干す。彼にコーヒーを捨てるという選択肢は存在しない。

「珍しいわね。昼也君がブラック以外を飲むなんて」

「そういや、えりなには飲ませなかったな」

飲むか?と問えば頷きが返ってきた。

新たなカップに注がれたコーヒーがえりなの前へと差し出される。バターコーヒーは実験の意味合いがあつた為彼女には出さない。店と同じようにブラックで出し、砂糖壺とミルクポットを傍らに添えるのみだ。

クイツと一杯、ホツと一息。チラリと視線を向ければ、彼は新たな調査へと取り掛かっている。

真剣な表情だ。ピリツと引き締まった雰囲気と、チリチリと感じられる集中力。その状態で、慣れた手付きだが最大限の注意を払って、挽く豆の種類より始り、量、荒さの

調整、挽き終わった後は手早くネルに掛けていく。

更にそこにスパイスを一摘まみ。適温の湯を回し掛けて、後はカップにコーヒーが満たされるのを待つのみ。

「……………何だよ」

「いえ、慣れたものだと思って」

「何年やってると思ってたんだよ。十年はやってるぞ？」

「そう……………ねえ、昼也君」

「ん？」

「その……………」

歯切れの悪いえりな。何かを言おうとするが、言葉は紡がれない。

暫く、昼也は待っていたのだが何を言いたいのかわからないため首をかしげて、新たな一杯へと口をつけメモをつけていく。

「……………いえ、何でもないわ」

「ええー……………」

溜めて言わない、というモヤツとする言葉に非難するような目になるのも致し方ないだろう。

少しの間、沈黙が流れる。

それを破つたのはえりなだった。

「ねえ、昼也君。貴方は幸平君をどう思ってるのかしら？」

「どうって？別にどうとも思つてないが………急にどした？」

「……………私は彼が気に入らないわ」

「むしろ、お前が気に入る相手の方が少ないんじゃないかね？孤高（笑）じゃねえか」

「茶化さないで、今は真面目な話よ。彼、貴方と同じで選抜入りしてるのよ」

「へえー、ま、納得だがな。幸平の腕は中々だろ？アイツの料理は面白そうだ」

「料理に面白さはいわ！美食はテーブルに乗る前から美しいものよ！彼の作る料理なんて認められません！」

「んなもん、好みの問題だろ。料理人のスタンスなんて人それぞれだし、俺みたいな擬きも居る。問題なのは旨いか不味いか、それだけじゃねえか」

やれやれ、と首を振つた昼也は一杯を飲み干して片付けを始める。

えりなや薊のように見た目すらも気にして、尚且つ旨いものを目指す料理人。創真のように限り無く客の要望に応える料理人。

他にも様々な料理人が居る。同時に客の求める料理も千差万別だ。

その内、大別するならば質より量、あるいは量より質。つまりは腹に溜まれば良いのか、若しくは味を楽しみたいのか、のどちらか。

昼也はどちらかというと前者であるため、味の追求はコーヒー以外にはあまりしない。それ以前に自分で作るため自然と味は彼好みのものが出来上がる。腕も良いため、美味しく、尚且つ量の多いものが出来上がるのだ。

彼の言い分に納得したのか、してないのか、えりなは不貞腐れてプクリと頬を膨らませて、チビチビとコーヒーを啜る。

いつもは凜としているのだが、自分が心許した相手だけしか居ないときにはこんな風

に幼い仕草をしてしまうのも彼女の魅力なのだろう。
ガキかよ、と昼也は呆れつつも空いた小腹を満たすために片付けを終え、軽食の準備へと取りかかっていた。

卵にグラニュー糖、薄力粉、ベーキングパウダー、牛乳を取り出し、それぞれの分量を計って用意する。

それら材料をかき混ぜつつ、フライパンをジツクリと暖め、そのとなりではお湯を沸かしていく。みそは卵を分けて混ぜるところか。

卵黄の方を混ぜ終えたら、次は卵白を混ぜ途中でグラニュー糖を加えながら固めのメレンゲを作り、その後卵黄の方と混ぜ合わせて生地をふんわりとさせていく。

熱したフライパンに薄く油を引いて、その上にこんもりと一定の大ききで混ぜた生地を乗せ、隣で沸騰させた熱湯を加えて暫く蒸し焼きに。

表面に触れて生地がつかなくなったら、形を崩さないようにひっくり返し、再びお湯を加えて蒸し焼き。

少しすれば完成である。

スフレパンケーキ。見た目に反して可愛らしいモノを作る奴である。

「……………」

目付きの悪い昼也が食べると、何を食べても不味そうに見える不思議。無表情、無感動で食べるせいだろう。

スフレパンケーキはその名の通り、スフレだ。口のなかでフワリと弾みながらも、シユワリ消える舌触りを味わうことができる。生地自体を甘めに作つてあるため、何も掛けずともパクパク食べられる。

生地はまだまだ余つているため、食べながら焼いていくことで途切れることなく皿にはパンケーキの山が作られていた。

大きさはまちまちであり、一口大のものもあればナイフとフォークが無ければ食べづらいものもある。

昼也はそれらを見無視して片手でフライパンを操りながら、もう片方の手でフライ返しとお玉を使って生地を焼きつつ、少し冷めたモノから器用に指でつまんでパンケーキを貪っていた。

そんな曲芸擬きを目の前で見せられているえりなはというと、パンケーキをじっと見ている。それはもう、ジーツと見ていた。

いやいや、考えてもみればわかるがフワフワのパンケーキが山をなしているのだ。しかも焼きたて。甘くも香ばしい香りが厨房内には満ち満ちている。

「……………食いたいなら勝手に取れよ」

「ツ、そんなことは……………」

「……………あつそ」

「あつ……………」

パンケーキは残り十枚前後。既に生地は無くなった為にこの後補充されることはない。

昼也はいつもは食べないが、食べようと思えばチャレンジメニューすらも平らげることが出来る胃の持ち主だ。パンケーキ、それもスフレ状のモノなど直ぐに無くなる。

1枚、2枚と瞬く間に無くなっていくパンケーキ達。

えりなは少しの間逡巡していたが、減っていくパンケーキにいても経つても居られず、皿とナイフとフォークを取ってくるのと一枚をどうにかとることに成功した。

ナイフで切り、フォークで差して口に運ぶ。ホロホロとほどける食感と優しい甘さが何とも嬉しいそんな味。

機嫌良さげな、えりなを横目で見ながら、昼也は冷蔵庫に近付き、入れておいたアイスコーヒーを取り出す。

苦味が強いため、今回のように甘い菓子を合わせるのがベストなのだ。

パンケーキによつて甘くなった口内を、キリツとした苦味により相殺、リセットして再びパンケーキを味わう。その繰り返し。

十数分後には完全に無くなった。

「やっぱり貴方、パティシエじゃないの？」

「俺はバリスタのつもりなんだがな」

そんなやり取りが有ったとか、無かったとか。

二十二杯目

秋の選抜。

それは選出された60名での料理の祭典。A、B二つの組に別れ、そこから更に勝ち上がった者達が本戦へと出場となる。

本日、遠月学園は終業式。夏期休暇へと思い馳せる学生ばかり——とはいかない。

今日は彼等にとって一大イベントである、秋の選抜に出場する60名が正式な発表を迎えるのだ。

「……………」

のだが、昼世の姿はボードの前には無かった。

一年皆が、注目するなかで一人自室のベッドで惰眠を貪っていたのだ。その目の下には濃い隈がある。

というのも、彼はここ最近凝っているスパイスや漢方の調合を組み込んだ新たな黄金比を編み出そうとしていた。

いや、それは本来彼にとっては副産物。本命は新たなコーヒーのレシピの試行錯誤で

ある。

結果、コーヒーの飲みすぎで寝るに寝られず、終業式をブツチしていた。

今は漸く眠りにつけているところだ。第一周りと違って昼世の目指すものには選抜はあまり関係ない。むしろ、無関係と言つても過言ではない。

そも、えりなによつて自分が選抜入りしていることは知っている。その後によつぱり落とそう等と言われれば、小躍りして喜びを表していたかもしれない。

だが、現実には彼にとつて優しくない。選ばれた事実は消えず、そのまま逃げることも許されない。

意識が飛ぶ直前まで、呪詛擬きを吐きながら彼は眠りについた。

さて、この施設だが昼世の知り合いには知りわたつた場所だ。そして彼は財布と通帳を金庫にぶちこんでいる以外は基本的に戸締まりはしない。強いて挙げるならば、コーヒー豆とコーヒーを淹れる器具が嚴重に保管されている位か。仮にそれらに手を出せば、彼は躊躇なく研いだ牛刀で、盗みを働いたバカの脳天をカチ割る事だろう。

そんな、スプラッタな光景が作り出される可能性のあるこの施設だが、基本的には来るもの拒まず、去るもの追わずのスタンズだ。

本人からすれば、自分の好きな空間さえ壊されなければ、後はどうぞご自由に、というのが本音だろう。

「昼也くーん！居るかしらー！」

「……………お嬢、もう少し静かに」

静謐をぶち破るのはそんな声。昼也の知り合い、悉くに知られているというのは、つまりこういうことなのだ。プライベートが軒並み死んでやがる。

とはいえ、死んだように寝ている昼也が返事をするはずもない。完全に意識が夢枕の彼方へと吹き飛んでいるために軒並み、五感の機能なども停止しているのだ。

「あれー？もしかして、居ない？」

「……………たぶん寝てるじゃないですか？えりな嬢が終業式に来ていないとぼやいてましたよ」

「何でそれを私に言わないの！？寝起きの昼也君って……………」

言い切る前に、ギシリ、と板張りの床が軋む音が聞こえてきた。その音は徐々に近づいてきている。そして、厨房際奥に設置された扉。

開け放たれていた扉の縁にガシリと噛み付くように張り付いた手。

現れるのはねこ背であり、伸びた前髪がダラリと垂れ下がり、そして全身から負のオーラを発する昼也だった。

「……………怒ってるね」

「……………怒ってますね」

「……………アアリスウ……………」

「ひい……………」

地の底から響くような低音。髪の間から覗く、怪しく光る眼光。その姿は、正に鬼の如し。

「……………」

「あ、あら昼也君、い、居るじゃない！」

「……………」

「え、えっと……………何で無言で近付いて来るのかしら？」

「……………」

「リヨ、リヨウく……………居ない!？」

「……………」

一歩ずつ着実に近づいてくる、鬼改め昼也にアリスはジリジリと後退りながらやがて冷蔵庫を背にして追い詰められた。既に従者は逃亡済みだ。

若い女性の悲鳴が木霊した。



「つたく……………こちとら寝てたつてのに」

不機嫌な様子で、昼也はコーヒーを淹れていた。目の下の隈は相変わらず濃い。

その側では調理台の天板に上体を投げ出して項垂れるアリスとその隣に座りコーヒーを飲む黒木場の姿もあった。

「酷い……………酷いわ……………！うら若い私の小顔を軋むほどに握るなんて！」

「……………ルツセエ、騒ぐな。頭に響く……………！」

「でも酷いわ！えりなにはしないのに私にはするなんて！」

「……………だから、煩いって。ホント頭イテエ……………」

言いながらも、昼也はコーヒーを提供する辺り、彼はツンデレなのかもしれない。その顔は隈も相俟って極悪人もかくやと言う悪人面である点には触れない方が良かったろう。

今回のブレンドは酸味を強めたもの。苦味で目を起こす事も考えたのだが、アリス達が帰った後にもう一度寝られなければ意味がないため、味を楽しむためにこのブレンドだ。

「それで？何のようだよ」

「そう！そうよ！忘れてたわ。昼也君。君、選抜の発表見てないでしょ？」

「あ……………寝てた。それが？」

「貴方、Aグループだったわ。リョウ君と一緒にね！」

「……………マジ？」

「……………ああ」

「うつわ……………マジで辞めたい」

昼也は辟易とため息をついてコーヒーを啜る。先程まで死んでいるだけだった目が、死んで腐り始めていた。内心は勝てる気しねえ、の一色である。

そんな燃え尽きたような昼也に対して、黒木場の内心は結構燃えていたりする。

昼也の料理を味わい、再現しようと試行錯誤したが、どうにも上手くいかなかった経験を持つ彼はこの機会に正面からの料理勝負ができることを意外にも楽しみにしていた。

研修では組むことがあったがそれ以外は悉く別の課題ばかりであり、若干の不完全燃焼だった。

(漸く……………か)

相手にとっては不足無し。強いことが分かるからこそ正面から全力で叩き潰す。

料理は振じ伏せるもの。それが彼が北欧で得た料理への姿勢なのだから。

「そーいや、課題って何するんだ？」

そんな燃える黒木場の内情など知るよしもなく、昼也は問う。

「さあて、私も知らないわ。けど、複雑なものじゃないはずよ」

「何でだ？」

「あんまり複雑だと、技術が先走りすぎるからよ。味が二の次じゃ料理人の課題に相應しくないでしょう？」

「だから簡単ってか？んじゃ、薬膳とかはねえか。あつたら新戸の一人勝ちだからな」

「あら、そこは俺が勝つ、位言うところじゃないかしら？」

「付け焼き刃で勝てるかよ。スパイスも薬膳もこちとら始めて一ヶ月ちよいだぞ？手際じゃやっぱり劣るだろ」

（とてもそうは見えないけどねー）

アリスからすれば昼也の技量は目を見張る。

ここ最近この厨房に染み付き始めているスパイスや漢方の臭い。昼也がどれだけの時間厨房に籠って調合しているのかを如実に表している。

黄金比、というある意味誰でも取得できそうな技術で類稀な味を生み出す技量。そして食材に対する鋭い感性。

何よりレシピへの忠実性を残しつつも、要所要所でアクセントを加えることで味を昇華させていくセンス。

アリスにすればその全てが羨ましい。

「ま、予選落ちなんて結果にしないでね？それじゃ面白くないもの」
 「そりゃ、その時によるだろ。旨ければ勝つし、不味いなら落ちるそれだけさ」



翌日、選抜に選ばれた生徒達の元にお題が届けられた。

「……………カレーかよ」

お題はカレー“料理”。

カレーライスに留まらず、カレーうどんやカレーラーメン、スープカレーやカレー鍋等、とにかく多種多様。

しかも、今回求められるのはスパイス時点から念入りに試行錯誤せねばならない。

上記の料理もそうだが使う食材によっても使い分けねばならないのだ。更には油性なのか水溶性なのか。香り付けのもののため組み合わせ、e t c. e t c.。

マトモに極めたものを出そうとするとキリがない。

だが、そこだけに囚われてはいけないのだ。

カレー料理なのだから、そこも試行錯誤し、更に食材の調和も考えねばならない。

生徒達は課題に振り回される夏休みを送ることが当たり前なのだ。

「……………面倒だ」

とりあえずお題の紙を冷蔵庫に磁石で張り付け、昼也は大きく欠伸をした。昨日はアリスと黒木場が帰って直ぐに寝たため、今は大分隈もマシになっていてる。

因みに課題に関しては何を作るか既に決めていたりする。被ったとしても問題無い為、後はスパイスと具材をどうするか、という点だけである。

その料理名は――

二十三杯目

秋の選抜。

既に出場者は決定しており、お題も提示されている。

本番までは凡そ一ヶ月といったところ。出場者は自身の作る料理へと例外無く追われていた。

「……………怠い……………」

大きく欠伸をしながら昼也はガリガリと頭を搔いていた。現在午前11時、随分とお寝坊さんである。

今は夏休み。選抜に選ばれた生徒達は各々が課題を突破するために試行錯誤をしているなかで、彼の生活態度は明らかに喧嘩を売っていた。

だが、究極のバランスとも言える昼也にとつては試行錯誤もくそもない。元より基本を崩す気の無い彼は今日も今日とて惰眠を貪り、趣味に精を出すのだ。

「まあまあ、だな……………」

目覚めの一杯を淹れて、一口啜ってホツと一息。夏でも彼はホツトを飲む。アイスコーヒーが嫌いな訳では無いのだが淹れるときにはブレンドを一から作り直さねばな

らない。

そも、アイスコーヒーは最初から冷たい訳ではない。大きめのグラスに縁まで水をタップリと入れて、そこに濃いめのコーヒーを淹れて作るのだ。アイスコーヒーがアホみたいに大きなグラスに入って出てくるのはそのためである。

一応、グラスも氷もあるのだが、まあ、面倒なのである。

さて、そんな物臭ダメ男の昼也の本日の予定——は特に無かつたりする。いつもならば店に帰るところなのだろうが、生憎と気が乗らない。元より道楽の店だ。潰す気は無くとも熱意も、無い。

それで店が保てるのだから世の中分らないものだ。

とりあえず試作するか、いつもの道具を広げようと棚へと近付き、ベルが鳴った。

何かと心配性なえりなを筆頭として雑切家に持たされた携帯電話。滅多に鳴ることなく、基本的に充電器が刺さったままのそれが鳴ったのだ。

昼也は露骨に顔をしかめた。掛けてくる相手など両手の指でも余る程度にしか居ない。

用事が無いから何かしよう、とは彼は思わない。用事が無いならダラダラしよう、が彼のスタンスである。

出たくない。しかし、勘だが取らねば切れることはない、という確信が昼也にはあつ

た。

逡巡し一つため息。泔々携帯を手に取り、ボタンを押して耳に押し当てた。

「もしも……………」

『遅い！遅すぎるわよ昼也君!!』

「……………ッ……………」

一瞬意識が飛ぶような錯覚を受けるほどの高音。未だに耳なりの鳴り止まない彼の耳のなかがその威力を物語っている。

昼也の知り合いでここまでの音量で叫ぶ相手など候補はただ一人のみ。

「……………で、何のようだよ、アリス。話し相手が欲しいんなら黒木場にでも頼めよ」

『リョウ君と話が弾むわけじゃないでしょ！そんなことより、昼也君つて暇よね?』

「……………いや、超いそが……………」

『ダウト。間が空いた時点で暇なのバレバレよ。どうせさつきまで寝てたんでしょ?』

「……………」

秒でバレた。えりな程ではないにしても付き合いの長いアリスには何かと誤魔化しが通用しない。

「じゃあ何のようだよ」

『プールに行きましょう!』

「却下」

『ブブーッ！却下出来ませーん！早く来なさいよ！40秒で支度なさい！』

一方的に捲し立てられ通話は切られた。

昼也は電話を片手に立ち竦む。正直、面倒だと思っっているのだが、行かない方が面倒になることは目に見えている。暫くの葛藤を経て、彼は渋々荷物を纏めに部屋へ向かうのだった。



「あぢい……………」

いつものバーテン服のベストとサロンをとった姿の昼也は半ばゾンビのように鳴りながら炎天下の日光に焼かれていた。

「ほらほらー、だらしなくて昼也君」

「いや……………マジで……………暑い……………」

「いつもホットコーヒー飲んでるんだからこれぐらい平気でしょ?」

「……………帰っていいか?」

「ふふっ、ダメ」

昼也の斜め後方では楽しげに笑うアリスと彼女に付き従うスイッチの入っていない黒木場。そして

「何で私まで……………」

未だに状況が完璧には飲み込めていない制服姿のえりなが居た。

四人が居るのは市民プールの前。完全に燃え尽きかけている昼也や腑抜けた状態の黒木場はそうでもないが、アリスとえりなは美少女だ。育ちのよさも相俟って場違い感が半端無い。

「分かってないわねえ、えりな。私たちの感性は一般市民とはかなり違うのよ？ 様々な視点を取り込むのも料理人には必要な事だわ！」

「俺、バリスト……………」

「ほらほら行くわよ！ ま、お子ちゃまえりなには無理かも知れないけどね〜」

「く〜く〜ッ！ 行くわよ！ 行けばいいんでしょ！」

明らかにのせられたえりなとその背を楽しげに追い掛けるアリス。
置いていかれた男二人はというと

「テンション高えな」

「……………とりあえず行くこうぜ。暑い」

「おう」

荷物を二人で分担して持ち上げ後を追うのだった。



その日、市民プールは妙なざわめきに包まれていた。

主に騒いでいるのは男達。彼等の視線の先には二人の少女。

フリルがあしらわれた白いビキニ姿のアリスと長袖の上着を羽織ったえりなの二人だ。

「さあ！リヨウ君、早くパラソルを広げてちょうだい！ここが今日の本拠地よ！」

「……………うす」

「黒木場……………早く……………暑い……………」

「ホントモヤシな奴だな」

「うるへ、筋肉オバケめ」

パラソルの準備をする黒木場とその隣に踞りダラダラと汗を流す昼也。片やファイアパターンの水着、片や黒一色の水着に灰色のラッシュユガード姿。

そして体つきは対照的だ。常に体を鍛えている黒木場に対して、インドア派な昼也はヒョロイ。病的とまではいかないが不健康そうな白さがあつた。

「相変わらず昼也君はヒヨロヒヨロよねー。そんなんじやモテないわよ?」

「別にモテなくて良いだろ。むしろ、恋愛とか面倒そうだからパスだな」

「えー、つまんなーい。えりなからも何か言っただけなさいよ!」

「な、何で私に振るのよ……………べ、別に彼の勝手じゃないかしら……………?」

「あーあ、面白くないわねー。それにいつまでその上着着てるのよ。脱がないと泳げないでしょ?」

「ツ……………わ、分かってるわよ」

言いながらもえりなは上着を脱ぐ気配がない。その視線はチラチラと昼也へと向けられていた。

当の視線の矛先を向けられた本人はバラソルの影に引っ込み、魔法瓶に入れたアイスコーヒーを飲んでいる。

「ほっほ〜」

「な、何よ……………」

「べつつに〜……………とりや!」

「きゃあ!」

それは一瞬だった。アリスはえりなの上着を剥ぎ取ったのだ。

露になるのは極上の肢体。黒のビキニが扇情的だ。

二人が並んでポーズをとれば男の一部がスタンドアップするほどに魅力に溢れている。現に何人かは前屈みだ。

「元気だな、お前ら……………」

「見張りはやつときますから、遊んできていいですよ」

例外二人は無反応。黒木場は膝を抱えて座り、昼也は胡座で座り、腕を支えに若干後ろに傾いている。

「じゃ、行くわよー」

「ちよ、待ってよ」

二人が駆けていくのを見送り、残るのは野郎二人。

「……………」

「お、悪い」

昼也がコーヒーの入った紙コップを渡し黒木場がそれを受け取る。特に示しあわせる事無くあおった。

「旨い」

「そうか？俺的にはもう少し深みが欲しいんだが……………」

「相変わらずだな、料理に回せよ、その熱意」

「無理」

不毛な会話だ。

黒木場としても自分の言葉で昼也のスタンスが変わることなど期待してはいない。とはいえ自分の主人の意向もあるため、まあ、ダメ元で言ってみただけである。

「元氣だなアイツ等」

「お嬢もえりな嬢もこういう遊びとは無縁だからな」

「大変だな難切つてのも。庶民万歳だ」

「……………そういえば、昼也。お前も選抜入りしてたよな？」

「まあな。不本意ながら、何で選ばれたんだかサツパリだ」

「本選で当たつても、俺もお嬢も手加減無しでやるから、そのつもりでいろよ」

「……………何で俺が勝ち上がる前提なんだよ。30人中の4人だろ？勝てるわけ無いつての」

「……………はぁ……………」

黒木場のため息も無理からぬこと。少なくとも、宿泊研修の結果だけを抜き出せば間違いない昼也はトップクラスだ。

それこそ一年で十傑に名を連ねるえりなにも迫るもの。知らぬは当人のみ。

「……………暇……………」

「遊いでくれれば良いだろ？」

「言つてなかつたつけ？俺、泳げねえのさ。ちよいと寝る」

追及から逃れるように昼也は言うのと支えを腕枕にしてごろりとその場で横になる。直ぐに寝息が聞こえてきた。



「あら、リヨウ君。昼也君寝てるのかしら？」

「……………うす」

「石の上よね？痛くないのかしら……………」

戻ってきたアリスとえりなは眠る昼也を上から見下ろす。濡れた二人は……………うん。

その状況でアリスはキュピーンと瞳を輝かせて隣のえりなへと耳打ちした。

「な……………！ほ、本気!？」

「良いじゃない。減るもんじゃあるまいし」



市民プールにてその絵は酷く似つかわしくなく、目立っていた。

「~~~~ツ……………」

頬を染めるえりな。彼女は敷かれたシートの上に正座しており、その日膝の上には眠りこけた昼也の姿。

所謂、膝枕、である。

けしかけた当人であるアリスはニヤニヤとその様子を見ていた。

「……………んあ？」

少しして、枕の柔らかさの違いに気がついたのか昼也は目を覚ます。

ぼんやりと下から見上げる形となった彼の視界には、豊かな双丘と赤くなつたえりなの顔が映っていた。

「何やってんだ、えりな」

第一声がこれとは、この男枯れているのではなからうか。普通美少女の膝枕など金払つてもやつてもらいたい事だろうに。

そんな周りの嫉妬の目など知らぬ存ぜぬ。昼也は特に名残惜しそうにもせず起き上がった。立ち上り、寝汗を掻いた為か上着の前を開ける。

直後に風が吹き、上着がはためき、背を向けられていたえりなはその傷を見てしまう。

「それ……………あの時の？」

「あ？ああ、この傷か。まあな」

「……………消えないの？」

「これでも大分消えた方だろ？むしろ後遺症もなく済んで万々歳さ」

腰に残る掌程の大きさの斜めに走る傷。

これを語るには凡そ10年以上前へと記憶を辿らねばならない。

「ま、今さらだな。知ってるだろ？過去って“過ぎ去る”て書くんだぜ？そこらの道路ならまだしも、時間はどうしようもない。何れ風化して忘れちゃうのさ」

そう、忘れられる。

そんな眩きが夏の空に溶けて消えた。

二十四杯目

夏休み。

一般の高校生ならば部活や友達付き合いに精を出しているようなそんな期間。課題？最終日に焦って終わらせるか、夏休み前に終わらせるのが普通でしょう。

「……………」
結局店へと帰ってきた昼也は珍しく少し落ち着かない様子となっていた。原因は力ウンター席に座る一人の男。

所謂、FXで有り金全部溶かした顔、もしくはぬとねの区別が付かない表情の彼はその空虚な瞳を力ウンターの向う側である棚へと向けていた。

流石にいい歳こいた大人の男がそんな面をしているのは昼也といえども気になってしまう。

チラツと昼也が見れば、彼はズズツと小さく出されたコーヒーを啜る。

「……………あー……………おっさん？」

ついに耐えきれなくなったのか昼也は件の彼、薙切薊へと声をかけた。

そう、このおっさん改め薊は何故だか今日は来店した直後からこの有り様だったのだ。

いや、店の外。扉を潜るその直前まではキリツとしていた。が、入った直後にこれだ。キヤラ崩壊も甚だしいというもの。

いつも通りだろ？と言われればそれまでだがそれにしたって今日は酷すぎる。昼也が話し掛けることを躊躇うなど相当である。

「ちゆ、昼也君……………」

「……………何だよ」

「娘に嫌われているんだが……………どうすれば……………」

「……………今さらだな、おっさん。アンタ結構昔から嫌われ者じゃねえか」

「……………ぐふっ……………」

慰めどころか殺しに来ている一撃を受け薊（アラフォー）はイイ笑顔で滂沱の涙と口の端から血を流してカウンターへと突っ伏してしまった。割りといつも通りのことである。

昼也も、なんだ、と拍子抜けしたような顔となり、いつも通り揺り椅子に揺られて、膝には膝掛け、ハードカバーの本を片手にコーヒを啜る。

喫茶 midnight は今日も平常営業であった。客沈めて平常とは何ともおか

しな話だが、この二人は割りとそのな風なのが当たり前であり、日常なのだ。

「……………もう少し君は自分の口撃力を知るべきじゃないかな？」

「今回に關しちやオツサンが悪いだろ。娘に嫌われてるって、あんなことしてりや、そら嫌われるさ」

「しかしだね。あの子は才覚があつた。それも私の信奉する美食に特化した才覚だ。研ぎ澄ませたいと思うのは親心じゃないかい？」

「程度の問題があるだろ。そんなだから、お父様臭いとか言われんだよ」

「い、いいいい言われてませんしい！うちのえりなはそんな言葉吐きませんしい！」

『お父様、半径五メートルに近寄らないでください。その、少し、加齢臭が鼻につきます』

「ゲヒツ！……………ちよ、ゲホツ！コ、コーヒーが鼻に、エンツ！」

再び突つ伏した薊を養豚場の豚を見るような目で睥睨した昼也は本へと視線を落とした。

「だいたい、これで二人のやり取りは終わることが多い。しかし、どうやら今回のオツサンはひと味違うようだ。

「……………秋の選抜に選ばれたらしいね」

「まあな。正直、面倒だが」

「あの学園でそんなことを言うのは君ぐらいだろうな。何を作るかは決めているのかい？」

「カレー料理つてのはとりあえずスパイスの組み合わせだろ。まあ、何とかなるさ」

「………さ」

「………たまに思うが君は手抜きが酷いんじゃないか？」

「時短つて言つてほしいところだな。一概には言えねえけど、時間をかければ旨いものができる訳じゃないだろ」

「少なくとも、今回のカレーは時間をかけるべきだろうけどね」

「分かつてねえな。短時間だからこそ、光るものもあるつてことさ」

キシリ、椅子を軋ませて昼也が口の端を僅かに歪めカップの中味を啜る。

薊もそれ以上の追及をすること無く、出されたコーヒーを旨そうに飲み干すのだった。

二十五杯目

秋の選抜。選ばれし60名の生徒達が二つの組に分かれてお題をこなしてしのぎを削る食の祭典。

当然ながら選ばれることすらも相当の意味を持つのだが、そこから生半可な腕では勝ち上がれない。

課題に関しては、夏期休暇の前に提示されるため、各々その休暇を全てつぎ込むことも少なくない。

そんな運命の日、当日。朝日の差し込むとある一室。

「……………頭イテエ」

ベッドで上半身を起こし、片手で顔を覆った、昼也は半分寝ぼけた声色でそう呟く。というのも、前日の夜遅くまで新作コーヒーの試飲をしていた結果、寝るに寝られなかったのだ。

元々眠りが浅いお陰で睡眠時間が短い事も慣れてはいるが、慣れていただけで辛くないわけではない。

現在10時57分。選抜開始まで、残り3分である。

彼は考える。最適解を導き出す。

「……………寝坊にするか」

そして、諦めた。

再び布団にくるまり、目を閉じる。黒木場やアリスが対抗心を燃やしていたが、知つたこつちやない、と目をそらす。

「ダメに決まつてるでしょう!!」

意識の飛び立つ直前に掛けられた大声によつて、昼也は現実へと舞い戻ってきた。

目を薄く開ければ、顔を真つ赤にしたえりなの姿。

「……………不法侵入」

「貴方がこの前私に鍵をくれたんでしよう? 起きれるか分からない、て」

「……………そうだっけか?」

「はあ……………本当に来ないとは思わなかったわ」

えりなは額に手をやり、深々もため息をつく。

いや、彼女も何となく昼也がサボリそうな事は分かっていたのだ。だが、彼女として傑としての仕事もある。これでも急いで起こしに来ていた。

「ほら、行きましょう昼也君」

「ええ……………」

「ええー、じゃありません！せつかく選抜入りしたのよ？少しはやる気を」
「……………分かったから叫ばんでくれ、頭に響く」

女性の高音ボイスは寝不足の頭に辛いものがある。

観念した昼也は渋々と起き上がった。

時刻は既に11時を過ぎてている。

「……………」

「完全に遅刻よ。どうする気かしら？」

「まあ、俺が作るのは時間もかかんねえんでな」

伸びをすると昼也、えりなを部屋の外へと押し出してしまふ。

また寝るつもりか、と慌てて扉を開けたえりなを待っていたのは、パン一の昼也。

「……………」

沈黙、圧倒的沈黙。

昼也はその無言のまま、着なれたパーテン服へと着替えていく。

いつもの、ベストまで羽織って彼はえりなへと向き直った。

「堂々と覗きすんなよ。ムツツリお嬢様」

「……………な、だだだだ誰がムツツリよ!!」

「で、遅くに行っても大丈夫なのか？」

「……………ンン、ええ、一応連絡は入れておいたから」

「……………なら、用意だけしとくか」

真つ赤になってワタワタしているえりなの隣を抜けて昼也は階下の厨房へと降りてきた。

そのまま向かうのは予め用意していた柵だ。

中身は幾つかの小瓶。ほんのりと香るスパイス独特の香り。

「……………ソレは？」

「まあ、一応作るものは決めてたからな。調合だけは済ませといたんだ」

それらを回収し、肩掛けのカバンに必要な食材と道具、そして小瓶を詰めてから問う。

「で、場所ってどこだ？」

▽▽▽▽▽▽

選抜。初っ端から低い点数に混じってそれだけの才覚を持つ者達は確りとした成績を修めていた。

Bブロックもかなりの波乱だったが、レベルが高いのはAブロックの方だ。

一位、葉山アキラ 94点

二位、黒木場リヨウ 93点

同率、幸平創真 93点

残る枠は一つ。そこに飛び込んだのは91点を叩き出した巨漢。

これで決まり。誰もがそう思っていた。

「すんません、まだ良いですかね？」

いつも通りのやる気の無さ。声の出所を見れば黒のカチューシャで髪を纏めた昼也が片手をあげていた。

時間は残り20分。残るはこの男のみ。

『えー、あ、夜帳昼也選手ですね。遅刻の届け出が出ていました。料理は出来ていますか？』

「おう」

審査員の前に出されたのは、五角の少し深い器。盛られているのはドーム状の

「チャー、ハン？」

「カレーチャーハンだ」

そう、チャーハン。先程まで出てきたリゾットオムレツやスープのパイ包み等からすれば凄まじく、普通だ。

香りも、先程の香りの爆弾のような強烈なものも無くほんのりと漂うに留まってい

る。

言ってしまったえば、味気無い。しかし

(なぜ、こんなにも食欲を誘うの……………!)

千俵なつめは何故か溢れてくる唾液を何度と無く飲み込む。

それは周りの審査員達も同じだった。

会場一杯に広がることはない、審査員のみはその香りは食欲を擽る。

誰からともなく、隣に置かれたレンゲを手を取った。

そして、一口。

「……………ツ!!これは」

「スパイスライス、でしょうか」

「それだけじゃない!噛む度に溢れでる旨味と香り!」

「だが、深みのあるこのコクは……………」

「……………旨い……………!」

皿を持ち上げ掻つ込む者も居るほど。

実を言うとBブロックにも同じくカレーチャーハンを作った者も居た。

だが、昼也の作ったソレは少々変わっている。

「このコクの元を、聞いても良いかしら?」

「……………ん？」

なつめが問えば、昼也はチャーハンを掻っ込んでいた。

一瞬食べながら口を開こうとするが、思い直し飲み込み、傍らの水で口のなかを濯いで開く。

「コーヒーつすよ」

「コ、コーヒー!？」

「ええ。コーヒーの苦味は辛味を殺しますけど、コーヒーは単に苦いだけじゃない。酸味とコクだけを狙って出すブレンド位、訳無い」

自称バリスタにとって、好きな味を出すブレンドを作ることなど難しくない。まあ、それは経験によるものだが。

それだけの実力がありながらも、彼は自分の求める味に辿り着けずにいた。

カチャカチャと進むレンジ。

このチャーハンは特に特別なことはしていない。

使用したのがスパイスライスであり、尚且つ炒める際にコーヒーをミリ単位で加え、食材全てにスパイスを仕込んだ程度。

スパイスライスを作る際には水溶性のスパイスを、そして炒める際には脂溶性のスパイスを用いた。

ここで、ここ最近凝っているスパイスコーヒーの技術が生きた。即ち、スパイスとコーヒーの黄金比も彼の中に蓄積されていたのだ。特別なことは一つもない。食材は愚かスパイス、コーヒーも買おうと思えばスーパーで集められる。

「高級品なんて必要ない。ある食材で、出来る料理それがいいだろう？」
 ま、今回は手抜きだけだな、と彼は緩く笑って食後のコーヒーを啜っていた。
 因みに、チャールハンを6つ作ったのは朝飯も兼ねたモノである。

『え、ええつと、それでは得点をお願いします！』

司会の言葉に表示される数字。

20 18 19 19 18

『ご、合計点数94点!!同率一位!決勝トーナメント出場です!!』

まさかまさかの大波乱。最後の最後で、荒らしていった昼也のチャールハン。制限時間の三時間のうち、彼は一時間半程しかここには居なかった。そして、この瞬間。実力者は例外無く、彼、夜帳昼也を意識する。

この男は間違いなく勝ち上がってくる、と。

「……………眠い」

件の男は大あくびをし、それは会場へと融けていった。

二十六杯目

秋の選抜、本選。A、Bの勝ち抜き戦を勝ち上がった各グループ上位四名ずつで行われるトーナメント戦。

一回戦の組み合わせは、A、Bそれぞれの勝ち抜いた者達で組まれることになる。

第一戦は、創真VSアリス。

お題は弁当であり、課題への取り組む姿勢などから創真に軍配が上がった。

第二戦は、黒木場VS田所。お題はラーメン。

どちらも真つ向勝負であったが、こちらは黒木場に軍配が上がった。しかし、田所の方も確りと発揮されており、どちらが勝つてもおかしくはない名勝負であったと言えるだろう。

ここで一日目は終了となる。残りの二戦は翌日に持ち越した。

第三戦は、葉山VS緋沙子。お題はハンバーガー。

スツポンバーガーという相当な変わり種を出した緋沙子だったが、葉山の本能そのものを刺激するハンバーガー。葉山へと軍配が上がった。

そして、第四戦。一回戦の最後を飾るのは、タクミ・アルディーニと夜帳昼也の二人。

お題は、デザート。それも食卓の最後にふさわしいデザートだ。

『それでは、これより第四試合。選手の入場です!』

会場アナウンスが響き、観客のボルテージは鰻登り。

観客に埋め尽くされた月天の間。その中央へと向かうための通路に面した扉が開かれる。

最初に現れたのは、タクミ。

その後を、眠たげに目を細めた昼也がのんびりとした足取りでついていく形だ。

そして互いの厨房、その前。つまりは、会場のほぼ中央で向かい合う形となった。

「漸くだ、夜帳昼也」

「……………んあ?」

「オレは全力を尽くす。だから、お前も全力を尽くしてくれ」

「……………」

メラメラと目の中に炎を燃やすタクミの熱意。アクビをしかけていた昼也も、彼の目を見て口を閉じるしかない。

昨日は、彼は寝て過ごすという暴挙に出ていたのだ。原因は、やはりスタンスの違い。

秋の選抜は、その後の自分達のアピールにもなる。故に誰しもが全力全開で事に挑み。その為の試行錯誤や相手の力量把握に努めるのが基本となる。

しかし、昼也の目的は、あくまでも自分の求める至高の一杯を完成させて味わうことであつた。それ故に、皆のように燃えたりしない。

余談だが、昨日は寝て過ごしたと記したが、途中でアリスの襲撃があつたりもした。そして今回、昼也にも感じられる何かの有つたらしい。

お題はデザート。タクミもそうだが、何より昼也の土俵でもあると言える。

『お題はデザート、制限時間は二時間！それでは、調理……開始です！』
その合図と共に二人は動き始めた。

タクミが作るのは、レモンを用いたセミフレッド。

今回は三層タイプのモノであり、試行錯誤の末に産み出された一皿だ。

対する昼也は、というと。

「お、おい、アイツ……………」

「コ、コーヒー淹れてるぞ?」

「こんな状況でコーヒーブレイクかよ!」

観客の言う通り、何故かコーヒーを淹れ始めていた。

確かに、デザートを食べる際に飲み物を出すことはある。しかし、今回に關して言えば、どれだけ飲み物が旨かろうともデザート本体が不味ければお話になら無い。

しかし、この試合を見ている彼の知り合い、特に彼の店へと足を運んだ者ならば何を

しようとしているのかすぐに分かった。

同時に、戦慄する。

喫茶—Mid Night—でもレアケースの中でも更にレアアース。割合的にはアップルパイよりも出てこない。

「本当に珍しいわね……」

会場を見下ろしていたえりなは小さく呟く。

彼女含めて、アリスや黒木場、仙左衛門等は昼也が作るものに直ぐに気が付き、同時に食べてみたいと思わされている。

そんな彼女含めた者達の内心など知らない昼也はその手をさつきと進めていく。

苦いだけではダメだ。かといって今回はそこまで酸味を求めていない。

左手でコーヒーを淹れるこの状況。周りがそこに注目するなかで、右手では粉ゼラチンを小鍋に張った水に溶かしている。

そして、小鍋をコンロにかけると火を調整し、右手で念入りに、よくかき混ぜる。

全く別の動作を正中線で分かれてやっていく。

平行作業が得意であり、やるべきタイミングが体で分かる昼也にとってはこの程度の事、訳が無かった。

「……………ちようど、か」

コーヒーを完全に淹れ終えた所で、鍋も同時に沸騰する。直ぐ様、予め用意しておいた砂糖を鍋の中へと、突っ込んだ。

ここから入れた砂糖が完全に煮とける迄、約一分と少し待つことになる。

この間、五分と掛かっていない。

当然だ、何せこの男、この場に長居するつもりが始めから無かったのだから。

砂糖が溶け終えれば、次は淹れたてのコーヒーの出番。

今回のブレンドは、かなり濃いめ。これはこのタイミングで小鍋に入れるつもりで最初から濃く作った為だ。

コーヒーを入れたら火を止めて、中身が均等に混ざるよう、細心の注意を払ってへらを回す。

ここで失敗してしまえば、味が悪い処の話ではない。最早食うに値しないモノが出来てしまう。

完全に混ざりきった事を確認し、次は冷やす作業。

ガラスボウルに水を注いで、氷を投入。

その後、鍋を揺らさないように持ち上げて、底だけが水につくように置いた。

ここで、鍋を静かに混ぜる。だまにならないよう、更に気泡が必要以上に出来ないよう丁寧だ。

とろみが出てきたら、かき混ぜることを止めて型へと流し込む。全部流し込めば、後は型を揺れないように冷凍庫へとぶっこむ。

本来は冷蔵庫でじっくりと冷ましたい所なのだが、そこはそれ。その点までも計算に組み込んで調整はとつくに終えている。

「ふう……………」

ここまで、10分掛かっていない。

「残りは、冷やし固まる前に作るアレで終わり、と」

指折り数えて次の行程までプランを再確認。

といつてもアクシデントもまるでない為に、何も変更は無いのだが。

「……………眠い」

大きなアクビがあふれた。

◆◆◆実食◆◆◆

カクテルグラスに盛り付けられ、頭上から注ぐライトによって黒く煌めく宝石たち。

「……………コーヒーゼリー？」

「うっす」

それは、見た目こそ極々一般的なコーヒーゼリー。小さなキューブ状に切られたその上にバランスよくホイップクリームが盛り付けられた形だ。

特筆すべき点は、無い。

「……………いitだこう」

最初に手をつけたのは、仙左衛門。

スプーンの上でぶるりと震えるゼリー。そこに、ホイップクリームをほんの少し盛り付ける。

そして、一口。

「ん、これは……………」

「旨……………」

舌の肥えた審査員たちも止まらないスプーン。

シンプル故に作り手の技倆全てを要求するのがこのデザートだ。

何より、自称バリスタの昼也には相性が良い。

本来ならば淹れたてのコーヒーなど用いず、インスタントコーヒーで十分だった。

「このブレンドを、お主のオリジナルか？」

「……………ええ、まあ。インスタントコーヒーじゃ、俺の欲しい味が出なかったもんで」

「このクリームにも何か？ 仄かに香りがするように思えるのだが」

「予めスパイスを幾つか。ホイップクリームそのままだと、せつかくのコーヒーの香りや味を邪魔しかねなかつたつすから」

審査員の問いに答えながら、昼也は調理場の台へと半ば腰掛けていた。

やはり眠そうであり、傍らに置かれたカップには、いつの間にもやらコーヒーが注がれている。

今回の料理勝負は、味以上に時間の勝負でもあったのだ。

そもそもお題は、“食卓の最後にふさわしいデザート”。つまり、それを食べれば後は何も食べなくても良い、若しくは食事を終えようとする気持ちになる、そんなデザートを作ることがお題とも言える。

つまりは、既にこの場は決した、ということ。



二回戦

第一戦、幸平創真VS葉山アキラ

第二戦、黒木場リョウVS夜帳昼也

二十七杯目

秋の選抜、本選。残り四名となったこの日。二回戦が始まるのは一週間後だ。

お題は、洋食のメイン。

二回戦全てに適用されるお題であり、食材の指定などもない。料理人としての技術が大きく作用する事だろう。

「……………眠い」

良くも悪くもなく、寝心地も普通の布団より身を起こした昼也は、首を回して伸びをする。

この一週間、ちゃんと授業がある。

その授業を受けながら、出場選手はお題に向けての試行錯誤を行わねばならない。

「洋食ねえ……………」

いつものバーテン服へと着替えていく昼也は、寝惚けた目のままお題へと思いを馳せる。

ぶっちゃけた話し、慣れないジャンルだ。

家では基本的に和食が多い。若しくは、カレーやシチューなどの一度に多く作れて、

日持ちする物。後は、デザート関連か。

まあ、そもそも家というか、店に居る場合は一日何も食べずに、本を読んで、コーヒを飲むだけの日も少なくない。

胃が荒れるのだが、昼也自身に改める気が無いせいでどうしようもないのが現状だ。因みに、その点を危惧した緋沙子が時偶薬膳を勧めたりしているのは余談である。

「……………髪、伸びたな」

寝癖頭を掻いていた昼也は、うなじを撫でながら呟く。

いつぞやの時には、その対策としてカチューシャを渡され、今も愛用している所だ。しかし、伸びた髪は鬱陶しいことに変わり無い。

えりなのように確りと手入れしているならばまだしも、伸び放題でありシャンプーなども安いから、という理由で買い置きしているような男の髪がサラサラストレートな筈もない。

ゴワゴワキシキシ、傷んだ髪。将来禿げるのではなからうか。

結局、鬱陶しい髪を後ろへと流して、ポニーテールのように輪ゴムで止めるという暴挙に出る始末。

その後、何度か伸びをして昼也は部屋を出た。

向かったのは階下。広々とした厨房で朝食とコーヒを準備する為だ。

「……………」

今日飲むブレンドを考えながら豆を選び、ハンドミルの中へと放り込む。

コリコリとハンドルを回して豆を砕いて挽いていく。

粗すぎても細かすぎてもいけない。

程よく、丁寧な、最高の具合を模索して導き出すのだ。

豆を挽き終えた事を確認し、今度は薬缶に水を注いで火にかける。水道水は使わない。カルキの臭いがコーヒーの香りを邪魔してしまうから。

求める温度まで、水が温まるのを待ちながら、昼也は冷蔵庫へと向かい、扉の中からあるものを取り出した。

キツシユ。卵と生クリームをたっぷり使ったフランスは、アルザスロレーヌ地方の郷土料理。

昼也が作ったこれには、たっぷりのチーズと生クリームが使われており、野菜はほうれん草、肉は無難に牛挽き肉を使った一皿。

コンロに薬缶を乗せたタイミングで、その下に備えられたオーブンに火をいれていた昼也は、キツシユがワンホール載った皿を片手に歩を進め、その途中でナイフを一本戸棚から取り出していた。

一歩進む度に体は揺れるが、皿は揺れない。

ささつ、と六分割したキツシユ。その一切れを開いたオーブンへと放り込んだ。

既に完成したキツシユを温め直すだけだ。時間は、1分そこらでもあれば美味しい匂いを厨房に満たしてくれることだろう。

オーブンの蓋を閉じる。同時に、薬缶のお湯も程好く温まっていた。

見れば分かる。嗅げば分かる。聞けば分かる。

他の料理ならばいざ知らず、コーヒーに関しては、少なくとも主として自分で作るモノならば、昼也に把握できない事はなかった。

挽いた粉をカップに乗せたネルへと盛って、その上からお湯を注いでいく。

一回し掛けて、蒸らし。その繰り返しだ。

じっくり、ゆっくり、焦らない。たつぷりと時間を掛けて一杯を産み出す。

そうして作り出された一杯が完成した所で、オーブンが鳴った。だが、直ぐには取り出さない。

先にネルの処理をせねばならない。でなければ、大変なことになり、最悪買い直す羽目になる。

そうなると、新品は糊落とし等をせねばならない。

抽出を終えた粉を捨て、ネルを綺麗に水洗い。最後は、水を溜めた容器に入れて外気に触れないように蓋をする。そして、臭いのキツイ物が側に無い場所に置いて終了だ。

この間にコーヒーが冷めたり、キツシユが必要以上に温まったりしそうな所だが、それはそれ。これらを見越して温めていた為に問題は無い。

キツシユを手掴みに食らって、コーヒーを啜る。

一応考えているのは、選抜のお題だ。

洋食のメイン。候補など、それこそ星の数ほどにも上るかもしれない程に膨大。

注意すべきは、洋食に見える和食の存在。とんかつ等が良い例か。

そんなもの作つた暁には、落第処か、学園から追い出されかねない。

「……………肉だな」

対戦相手が黒木場の時点で、この選択肢は半ば決まっていた。

彼は得意な魚料理で確実に仕留めに来るだろうということは、彼を知るものには明らか。

正直なところ、昼也は魚料理で黒木場に勝てるとは思っていない。ならば、態々相手の土俵で戦うなどやるだけ無駄。

だからこそその、肉料理。

一応、野菜でもメインは張れる。その証明として、四宮はプルスポール勲章を獲得している。

だが、ダメだ。夜帳昼也には、致命的な弱点があるのだから。

「……………はあ」

彼には、オリジナルが無い。既存のレシピを己の中で昇華させたモノばかり。つまりは、一を二にするだけだ。

これは彼自身がバリスタであり、料理人ではない事に起因している。零を一にできるのはコーヒー等のみ。ギリギリで軽食など。

新たな料理は生み出せない。

故に既存の料理で勝負する。やる気はないが。

「……………ハンバーグで良いか」

その言葉は、酷く投げやりで、それでいてどこか芯がある。

適当に誰かに試食させよう。そんなことを考えながら、彼はコーヒーを飲み干した。